

横根・桜井積石塚古墳群調査報告書

— 分布調査報告、横根支群39号墳・桜井内山支群 9 号墳発掘調査報告 —

1991

甲府市教育委員会
横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会

横根・桜井積石塚古墳群調査報告書

— 分布調査報告、横根支群39号墳・桜井内山支群 9号墳発掘調査報告 —

1991

甲府市教育委員会
横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会

序

甲府市東部から春日居町にかけての山すそには、積石塚古墳が数多く分布していることが知られています。これらの古墳群の分布する南の平地には、川山瓦窯跡や土器を生産していた大坪遺跡などの特殊な遺跡があり、この地は古墳時代後期から奈良時代にかけて、甲斐国を中心でもあった重要な地域です。

この山すそ一帯は開発の手が及んでいない豊かな自然と、貴重な文化遺産が共存している地域です。しかし、近年この地域に開発計画が浮上したため、実態の解明されていない積石塚古墳群の全容を知るべく、山梨県考古学協会に分布調査をお願いするとともに、成因解明のため同協会に横根支群39号墳の発掘調査を委託しました。また、桜井内山支群9号墳については、この場所に農道が建設されることから山梨学院大学考古学研究会に発掘調査をお願いしました。

分布調査によって新たに多くの積石塚古墳が発見され、その数は日本で二番目の数になると聞いております。さらに横根支群39号墳の発掘調査から、その構築年代が從来考えられていたよりも古いことが判明しました。桜井内山支群9号墳の調査では、地元の皆様や関係機関のご協力とご英断により、農道の建設計画が変更されて、古墳主体部が保存されることになりました。このことは、文化財を保護する立場として大変喜ばしいことあります。

このたび刊行の運びとなりました『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』は、本市だけでなく山梨県においても、また日本の古墳時代を研究するためにも、重要な資料を提供するものと確信しております。本書が多くの方々にご覧いただき、活用され、郷上の歴史と文化に対する理解を深めていただくことを祈念するものであります。

なお、本書の刊行に際しましてご指導とご協力をいただきました横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会の委員各位、山梨県考古学協会の皆様、地元関係者の方々に、厚くお礼申し上げます。

甲府市教育委員会

教育長 浅川紫朗

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市横根・桜井両町にまたがって分布する横根・桜井積石塚古墳群の調査報告書である。
2. 本書の内容は、横根・桜井積石塚古墳群の分布調査報告、横根支群39号墳の発掘調査報告、桜井内山支群9号墳の発掘調査報告の3部よりなる。
3. 本書の執筆は横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会委員および山梨県考古学協会会員を中心に行い、それぞれの執筆分担は文末に記す。
4. 本書の編集は、甲府市教育委員会より本書の刊行の委託を受けた横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会および山梨県考古学協会指導のもと、清水、信藤、保坂、宮澤が合議しとりまとめた。
5. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して甲府市教育委員会で保管している。

横根・桜井積石塚古墳群分布調査報告

- (1) 本調査は、甲府市教育委員会より委託を受けた山梨県考古学協会が実施した。
- (2) 本章の執筆は山梨県考古学協会会員が行い、それぞれの執筆分担は文末に記す。
- (3) 本分布調査の古墳番号は、飯島進ほか「甲府市北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査」『甲斐の古墳I』甲斐古墳調査会1974の通し番号を極力踏襲した。しかし、一部では今回の調査によって変更したところがある。変更点として大きくは以下の2点である。
 - ① 旧横根支群45・46号墳が本来の横根・桜井積石塚古墳群と分布域を異にし、平坦面に位置するため本古墳群から抹消し、分布調査によって新たに発見された古墳に向番号を付した。
 - ② 桜井地区所在の天王社古墳を新たに桜井支群へ編入した。なお、古墳の規模・主体部・法量・土軸等について異なるった計測値を示していることもあるが、敢えて統一していない。
- (4) 桜井B号墳採集の珠文鏡・勾玉については、採集当時の指導教官末木俊男氏が保管しているものを末木氏のご厚意により資料調査させていただいた。なお、珠文鏡のX線撮影については、帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏のご協力を得た。
- (5) 墳群分布調査一覧表における墳丘位置のX・Y座標値は、平面直角座標第VIII系に基づく数値である。図中の北を示す方位は磁北を使用しており、真北とは西偏5°50'のずれがある。また、標高については古墳の中央部の高さを計測したものであり、古墳が立地する標高値とは異なるものである。

横根支群39号墳発掘調査報告

- (1) 本調査は、積石塚古墳群の成因調査を行うため、甲府市教育委員会から委託を受けた山梨県考古学会によって実施されたものである。
- (2) 本章の執筆は、山梨県考古学協会会員が行い、それぞれの執筆分担は文末に記す。但し、発掘調査における事実記載については、山梨県考古学協会から甲府市教育委員会に提出された『横根古墳群西支群39号墳発掘調査概要』1985年3月、および発掘調査参加者の所見をまとめたものである。
なお、調査成果の所見については明治大学教授人塚初重先生に、出土遺物のうち馬の歯については日本中央競馬会鈴木健夫氏と横浜国立大学教授長谷川善和先生に執筆を依頼した。
- (3) 出土遺物中の色調名は、土器については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1990)、ガラス小玉については財団法人日本色彩研究所監修『配色カード129b』(1982)による。

桜井内山支群9号墳発掘調査報告

- (1) 本報告は農道建設に先立って行われた桜井内山支群9号墳の発掘調査報告書である。
- (2) 本調査は山梨学院大学考古学研究会によって行われた。
- (3) 本章の執筆は椎名慎太郎・十菱駿武が行い、それぞれの執筆分担は文末に記す。
なお、周辺の地形・地質については山梨学院大学助教授河西秀大先生に、出土遺物のうち骨片については日本中央競馬会鈴木健夫氏と横浜国立大学教授長谷川善和先生に執筆を依頼した。
- (4) 本章の編集は、発掘調査担当者である十菱駿武が行った。

本書執筆者（五十音順）

- 大塚初重 明治大学教授
河西秀夫 山梨学院大学教授助手
河西 学 山梨県考古学協会会員
椎名慎太郎 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会会長・山梨県考古学協会会員
十菱駿武 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会委員・山梨県考古学協会会員
清水 博 山梨県考古学協会会員
併藤祐仁 山梨県考古学協会会員
鈴木健夫 日本中央競馬会
萩原三雄 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会委員・山梨県考古学協会会員
長谷川善和 横浜国立大学教授
保坂和博 山梨県考古学協会会員
宮澤公雄 山梨県考古学協会会員

目 次

序

例言

目次

横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会委員名簿

第Ⅰ章 横根・桜井積石塚古墳群の概要

第1節 地理的環境と歴史的環境	1
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
第2節 甲府の積石塚古墳研究史	5
第3節 横根・桜井積石塚古墳群の調査と保存対策をめぐる経過	7

第Ⅱ章 横根・桜井積石塚古墳群分布調査報告

第1節 分布調査の方法	9
第2節 分布調査の経過	9
1. 調査に至る経過	
2. 調査参加者名簿	
第3節 横根・桜井積石塚古墳群の概要	10
1. 横根・桜井積石塚古墳群の分布概要	
2. 各支群主要古墳の概要	
(1) 横根支群	
(2) 桜井内山支群	
(3) 桜井支群	
(4) 桜井東支群	
(5) 表面採集遺物	
第4節 古墳群分布調査一覧表	42
第5節 分布調査の課題と問題点	47
1. 規模と石室構造	
2. 各支群の状況	
第6節 保存活用に向けて	55

第Ⅲ章 横根支群39号墳発掘調査報告

第1節 発掘調査の経過	56
1. 調査の経過	
2. 調査参加者名簿	
第2節 墳丘	56
第3節 石室	59
第4節 出土遺物	61
第5節 まとめ	65

第6節 横根支群39号墳の考古学研究上の課題	66
第7節 横根支群39号墳出土の馬の歯について	69
第Ⅳ章 桜井内山支群9号墳発掘調査報告	
第1節 発掘調査に至る経緯	71
第2節 発掘調査の経過	71
1. 調査経過	
2. 調査参加者名簿	
第3節 墳丘	75
第4節 石室	78
第5節 出上遺物	79
第6節 積石塚古墳の地形・地質的環境について	81
1. 地形・地質概要	
2. 積石塚古墳を構成する岩石について	
3. 積石塚古墳の構築技術の特殊性について	
第7節 まとめ	83
第V章 資料	
第1節 山梨県における積石塚の分布と研究の現状	86
1. 積石塚の分布	
2. 積石塚研究の現状	
第2節 山梨県積石塚古墳関係文献一覧	96

挿図目次

第1図 横根・桜井積石塚古墳群周辺の遺跡	4
第2図 横根・桜井積石塚古墳群分布図	14
第3図 古墳群詳細分布図1（横根支群南ブロック）	16
第4図 古墳群詳細分布図2（横根支群西ブロック）	17
第5図 古墳群詳細分布図3（横根支群北東ブロック 含桜井内山支群11号墳）	18
第6図 古墳群詳細分布図4（横根支群北ブロック）	19
第7図 古墳群詳細分布図5（桜井内山支群 除11号墳）	20
第8図 古墳群詳細分布図6（桜井支群）	21
第9図 古墳群詳細分布図7（桜井東支群）	22
第10図 桜井B号墳出土の鏡と勾玉	40
第11図 横根・桜井積石塚古墳群表採遺物	41
第12図 横根積石塚古墳群39号墳周辺地形図	57
第13図 横根支群39号墳平面図及びエレベーション図	58
第14図 横根支群39号墳埴丘と石室・墓列石	59
第15図 横根支群39号墳石室実測図	60
第16図 横根支群39号墳出土遺物	62
第17図 横根支群39号墳出土鉄鎌・刀子	64

第18図	馬の歯列	69
第19図	桜井内山支群9号墳の地形と桜井農道	72
第20図	桜井内山支群8・9号墳地形・区画図	76
第21図	桜井内山支群9号墳平面図及び断面図	77
第22図	桜井内山支群9号墳石室実測図	78
第23図	桜井内山支群9号墳遺物分布図	80
第24図	桜井内山支群9号墳出土遺物	81
第25図	積石塚古墳分布地域の地質	82

図版目次

- 図版1 横根・桜井積石塚古墳群遠景、横根・桜井積石塚古墳群案内板全景、
横根・桜井積石塚古墳群案内板近景
- 図版2 分布調査清掃風景、分布調査計測風景、プレート設置状況
- 図版3 横根支群1号墳、横根支群1号墳石室、横根支群5号墳石室、横根支群6号墳石室
- 図版4 横根支群7号墳石室、横根支群7号墳、横根支群9号墳、横根支群10号墳、横根支群11号墳
- 図版5 横根支群14号墳、横根支群14号墳石室、横根支群14号墳石室北側壁、
横根支群14号墳石室奥壁、横根支群14号墳石室閉塞石
- 図版6 横根支群15号墳、横根支群16号墳、横根支群16号墳石室奥壁
- 図版7 横根支群19号墳、横根支群20号墳、横根支群20号墳石室、
横根支群21号墳石室、横根支群22号墳石室
- 図版8 横根支群23号墳、横根支群24号墳、横根支群25号墳
- 図版9 横根支群29号墳、横根支群29号墳石室、横根支群29号墳石室裏壁
- 図版10 横根支群30号墳、横根支群31号墳、横根支群31号墳石室、横根支群33号墳
- 図版11 横根支群34号墳、横根支群35号墳、横根支群36号墳
- 図版12 横根支群38号墳、横根支群41号墳、横根支群43号墳石室、横根支群44号墳石室
- 図版13 横根支群47号墳、横根支群48号墳、横根支群51号墳
- 図版14 横根支群55号墳、横根支群56号墳、横根支群62号墳、横根支群62号墳石室
- 図版15 横根支群65号墳、横根支群69号墳、横根支群70号墳、横根支群75号墳
- 図版16 横根支群77号墳、横根支群81号墳、横根支群82号墳、横根支群84号墳
- 図版17 横根支群89号墳、横根支群95号墳石室、横根支群95号墳、横根支群94号墳
- 図版18 横根支群98号墳、横根支群98号墳石室、横根支群99号墳、横根支群105号墳
- 図版19 桜井内山支群1号墳石室、桜井内山支群3号墳、桜井内山支群5号墳
- 図版20 桜井内山支群6号墳、桜井内山支群11号墳
- 図版21 桜井支群1号墳、桜井支群1号墳石室、桜井支群2号墳
- 図版22 桜井支群8号墳、桜井支群9号墳、桜井支群9号墳清掃風景
- 図版23 桜井支群10号墳、桜井支群10号墳石室奥壁、桜井支群10号墳石室側壁、桜井支群11号墳
- 図版24 桜井支群14号墳、桜井支群14号墳石室、桜井支群15号墳
- 図版25 桜井支群16号墳、桜井支群17号墳、桜井支群21号墳、桜井支群22号墳
- 図版26 桜井支群・桜井東支群の立地する大藏院寺山、
桜井支群24号墳（天王社古墳）、桜井支群24号墳上の石祠

- 図版27 桜井東支群1号墳、桜井東支群1号墳石室、桜井東支群2号墳、
桜井東支群2号墳石室、桜井東支群3号墳
- 図版28 横根・桜井積石塚古墳群表採遺物
- 図版29 分布調査表採遺物
- 図版30 横根支群39号墳発掘調査前の状況
(横根支群39号墳の立地する八人山東斜面、石室付近、東上方より、西方より、東方より)
- 図版31 横根支群39号墳石室
- 図版32 横根支群39号墳南側、横根支群39号墳北側の裾列石
- 図版33 実測風景、発掘調査風景、横根支群39号墳現地説明会
- 図版34 横根支群39号墳出土遺物1. (土器・ガラス小玉)
- 図版35 横根支群39号墳出土遺物2. (鉄鎌・刀子・馬鹿)
- 図版36 桜井内山支群9号墳遠景(中央の森)、桜井内山支群9号墳近景、
桜井内山支群9号墳(発掘調査前) 全景
- 図版37 桜井内山支群9号墳(東北より、北より)、桜井内山支群9号墳石室
- 図版38 桜井内山支群9号墳等高線測量風景、桜井内山支群9号墳測量風景、
桜井内山支群9号墳(墳丘断ち割り状況)
- 図版39 桜井内山支群9号墳出土遺物、発掘調査開始式、現地説明会、調査風景

〔横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会委員名簿〕

委員長	椎名 恒太郎	山梨学院大学教授
副委員長	久保寺 春雄	古代の山梨を知る会会长
委員	十菱 駿武	山梨学院大学助教授
同	萩原 三雄	山梨文化財研究所研究部長
同	望月 幹夫	東京国立博物館
同	小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授
同	橋本 博文	早稲田大学
同	中込 茂樹	甲斐史談会会長

第I章 横根・桜井積石塚古墳群の概要

第1節 地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

横根・桜井積石塚古墳群は甲府盆地北縁に位置する。

甲府盆地は、日本列島中央部を南北に横断するフォッサマグナにそって配列する松本盆地・諏訪盆地などとならぶ内陸構造盆地のひとつである。甲府盆地は、西辺が釜無川、南東辺が笛吹川に沿い、北辺は関東山地に限られる三角形に類似した形態を示す。また甲府盆地内には、富士川支流の釜無川と笛吹川とに沿って扇状地・沖積低地が分布している。両河川は鐵沢で合流し、禹瀬付近で甲府盆地は収束する。甲府盆地北部の山地は、関東山地の南西縁部にあたり、そのうち甲府市の湯村山・愛宕山・八人山、および石和町大藏經寺山は甲府盆地側すなわち南側に突出して配列している。これらの山地は、新第三紀終りに形成された水ヶ森火山の開削された姿である。湯村山・愛宕山間には相川扇状地が、愛宕山・八人山間には高倉川・大円川による扇状地が、および八人山・大藏經寺山間には大川沢川による小扇状地がそれぞれ形成されている。

横根・桜井積石塚古墳群は、大山沢川による小扇状地上に位置する。この地域は、急傾斜の南向き斜面で日射量が多く、冬季北西の季節風が強い甲府盆地内にあって比較的季節風の穏やかな地域である。南側に開いた他の相川扇状地・高倉川扇状地と比較して、大山沢川小扇状地は急傾斜で、扇状地面積および流域面積が狭く、上部には顯著な凹型斜面をもつなどやや異なる。入山沢川は上流域で山地および斜面を開拓しており、中流域では流路と両側の斜面とに約3~5mの比高をもつ。中流域の扇状地は、分級不良な数cm~1mを越える輝石安山岩巨礫を含み、褐色ローム質堆積物からなる土石流堆積物におおわれている。さらに大山沢川下流域では、大川沢橋付近を巣頂とする小扇状地を南東方向に形成しており、青梅街道に接した北側の横根町集落はこの小扇状地上に立地している。また扇状地上には八人山を構成する輝石安山岩の一帯が残丘として存在する。扇状地上微高地の一部には積石塚古墳が分布する。この扇状地は三島神社から十郎川にかかる十郎橋・九之橋などの間を境として、南側の笛吹川扇状地と接している。明治40年の水害以前の笛吹川は現在の平等川を流路としていたように、笛吹川は流路変更を繰り返して扇状地を形成している。甲府市川田・和戸・上阿原・七沢付近は笛吹川扇状地扇端部に位置し、シルト・粘土などを主体とした細粒堆積物が堆積している。土器遺跡では、地表下約1.4m付近で厚さ約5mの始良Tnテフラ(AT)(約2.1~2.2万年前)がこれらの堆積物中に検出されている。川田・和戸付近は、古代から現代にいたるまでこれらの堆積物を利用して窯業が盛んな地域である。また濁川沿いの低地は、西側の釜無川・荒川扇状地と東側の笛吹川扇状地とに挟まれた南北にのびる沖積低地が広がり、甲府盆地底の中心部をなしている。

古墳群の両側に位置する八人山と大藏經寺山は、片山・湯村山・愛宕山などとともに新第三紀鮮新世の水ヶ森火山岩を構成している片山溶岩からなる。片山溶岩は、西は貞川、東は兄川(山梨市)、および北は乙女高原(牧丘町)に至る地域に分布している。片山溶岩の岩石は、青みを帯びた暗灰色の均質な普通輝石紫蘇輝石安山岩である。緻密で硬質な片山溶岩は、片山石あるいは山崎石と呼ばれ石材として採掘されている。山崎石は八人山南端で採掘されているほか大藏經寺山西斜面にもかつての採掘跡が点在する。片山溶岩下部の安山岩からは2、3百万年前というK-Ar年代測定値が得られている(三村ほか、1984)。鮮新世水ヶ森火山岩の溶岩は溶岩流や溶岩門頂丘などが復元可能な程度に地形が保存されている。水ヶ森火山は、片山溶岩の推定火道約50m以上からなる単成火山群と考えられており、八人

山山頂にも火道が推定されている。水ヶ森火山はその後の風化・浸食作用によって開析され、現在では火山の基盤をなしていた小幡山火山岩・太良ヶ崗火山岩・甲府花崗岩体あるいはさらに下位の四万十層群などが地表に露出している。第四紀になって本遺跡の北西方向に位置する黒富山火山が活動し、その最後の活動で茅ヶ岳を形成したが、横根・桜井地域にはこれらの火山活動に伴う火山碎屑物の堆積は見られない。

古墳群は河川流路にそった小扇状地上の土石流堆積物上、八人山東斜面および大藏經寺山西斜面上に分布している。古墳を構成する岩石は新鮮な輝石安山岩であり、周辺に分布する水ヶ森火山片山溶岩の安山岩の岩相と一致する。おそらく周辺の上石流堆積物中あるいは山地斜面上に大量に分布する片山溶岩の輝石安山岩片が、積石塚古墳の構築材として使用された可能性が高い。
(河西 学)

参考引用文献

- 河西秀夫 (1985) 「積石塚古墳の岩石、地質学的検討」『甲府盆地の積石塚古墳研究集会資料』 p.12
中山正民・高木勇夫 (1987) 「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39
p.98~112
三村弘二・加藤祐三・片田正人 (1984) 「御岳界仙峠地域の地質」『地域地質研究報告』 (5万分の1図
幅) 地質調査所 p.61
田代孝・柳原功一・宮澤公雄 (1988) 「土器遺跡発掘調査報告」『甲府市史研究』6 p.69~92
吉村稔・平川一臣 (1984) 「地形分類図」『土地分類基本調査 (5万分の1) 甲府』 山梨県
吉村稔・平川一臣 (1985) 「地形分類図」『土地分類基本調査 (5万分の1) 御岳界仙峠』 山梨県

2. 歴史的環境

横根・桜井積石塚古墳群の所在する甲府市東部地域は、秩父山系の前衛である大藏經寺山・八人山が連なり、その南側に平等川によって形成された比較的安定した沖積地が広がっている。遺跡はこの大藏經寺山南西麓および八人山東南麓の山腹斜面や崖錐上に立地し、甲府盆地が一望できる場所に存在している。

甲府市域においてこれまでに確認された遺跡は縄文時代から中・近世まで約400か所を数え、遺跡の存在する甲府市東部地域は、このうちの八分の一にあたる約50か所の遺跡が確認されており、特に古墳時代以降の遺跡が顕著に見られる地域である。

この付近の縄文時代の遺跡は、甲府市域内では地蔵堂遺跡、石和町内では畔作遺跡、大藏經寺前遺跡、松本塚ノ越遺跡(15)等で前期から中期の遺物が発見されており、これらは大藏經寺山の山麓部に点在している。また、最近では甲府市桜井畑(A・C地区)遺跡(14)のように盆地内の微高地上に立地する遺跡も確認されている。

弥生時代の遺跡に関しては、これまでに弥生時代後期の土器片が出土した上土器遺跡(12)および桜井畑遺跡が確認されており、周辺地域に集落跡などの存在が予想される。

古墳時代における甲斐国の人勢力は、4・5世紀頃には銚子塚古墳・大丸山塚古墳等の大和政権との結びつきの強い古墳が存在する中道町を中心とする曾根丘陵地域一帯にあったが、6世紀頃には八代町・御坂町と、甲府盆地の東南部からさらに北部へと勢力の中心地が拡散していった。御坂町の姥塚古墳を中心とするもの、甲府市西部の加賀郡塚古墳を中心とするもの、そして、横根・桜井積石塚古墳群の存在する甲府東部から春日居を中心とするものである。本地域においてはそれ以前に桜井畑遺跡の方形周溝墓が確認されているほか、甲府市の沖積地にあったとされる琵琶塚古墳・太神さん塚古墳という前方後円墳と推定される2基の古墳の存在が知られている。また本地域における古墳時代後期の古墳の

特徴としては愛宕山・大藏經寺山の山腹斜面や崖錐上に形成された横根・桜井積石塚古墳群を含む横石塚古墳の存在があげられる。山梨県における横石塚は大部分がこの地域に密集している。この横石塚古墳は東北地方以南に散見されるものであり、一般的な盛土古墳が平坦地に構築されるのに対し山腹に集中している。本地域内におけるこの種の古墳は本古墳群をはじめとして鞍掛駒古墳(5)、大藏經寺山古墳群(6)などがあり、大きさは小規模なものであるが総数が160基以上を数える。このうち本古墳群に現在残るもののは145基に及び長野県の大室古墳群について全国2位の規模を誇っている。

県内における横石塚古墳の最初の発掘は昭和53年(1978)に調査された春日居町の笠原塚3号墳であり、横穴式石室の構造が確認され、鐵鏹等の遺物も発見されている。さらに昭和59年(1984)には石和町の大藏經寺山15号墳が調査され、墳丘径12m、内部主体が無袖型横穴式であることが確認され、石室内からは6世紀末頃の土器・鐵鏹・金環・玉類が出上している。これらの調査により石室構造や出土品の様相の一端が知られることとなる。このような横石塚とは別に山裾の平坦地に横穴式石室をもつ盛土墳が存在している。

大山沢川と青梅街道(国道140号線)に囲まれた横根地区の集落内(八人山南麓前面の平坦地)の横根山田古墳(8)、村内1号墳(9)、村内2号墳(10)の3基の古墳がそれである。標高268m付近に立地する横根山田古墳は直径23.5m以上を測る円墳で、石室は基底部を残すのみであるが、主軸をN-17°-Wにとり、現存長7.45m、奥壁幅2.27mの大型の横穴式石室である。奥壁は大型の石が広口積みされ、側壁は大型の石を用材とし、横口積みを主として構築している。出土遺物としては金環・須恵器等が知られている。村内1・2号墳は開墳等により墳丘および石室が破壊されており、明確な規模等は把握できない。現状では1号墳は天井石・側壁等の石室の構築材が墳丘上に散在し、2号墳は石室の構築材が一か所にまとめられている状況である。出土遺物については2号墳の土師器、直刀が知られている。これらの平坦地に存在する3基の古墳はいずれも盛土墳で、山腹に分布する横石塚とは対照をなしており、横石塚と盛土墳とがどのような関係をもっているかが注目される。

横石塚の集中する甲府盆地北縁地域は、後代に春日居町寺本庵寺(16)の瓦を川田瓦窯跡(13)で生産していることから考えてもひとつのまとまりのある地域であったと思われる。この地域に存在する古墳時代の集落遺跡は、桜井畠遺跡、石和町塚ノ越遺跡、春日居町神東町遺跡などがあげられるが、古墳時代から平安時代まで継続して営まれているものが多い。

7世紀末になると春日居町に新しい政治・文化の象徴である寺本庵寺が造られる。県内における7世纪代の寺院は寺本庵寺だけであり、この時期春日居地域を中心とした勢力が台頭したことが窺われる。寺本庵寺は三次にわたる発掘調査が行われ、法起寺式伽藍配置をとることが確認されており、特色としては講堂が金堂・塔に軒を接する程に接近し、塔・金堂間の距離を広く取っていることである。

奈良時代に入ってからも春日居地域を中心とした勢力は衰えず、最初の行政都市「国府」が造られたと考えられる。甲斐国府の置かれた場所については、「和名抄」に「国府は八代郡に在り、行程上二十五日、下十三日」と書かれており、当時の八代郡にあったとされている。現在は東山梨郡春日居町国府(17)を前期国府跡、東八代郡御坂町国衙(19)を後期国府跡とするのが通説となっている。近年、春日居町国府遺跡の発掘調査が行われ、礎石建物跡2棟が発見され、山梨郡衙の倉庫跡か甲斐国府の一部となる倉庫群と考えられている。

奈良時代になると中央集権的な地方制度である国・評(郡)・里(郷)制が成立する。甲斐国には山梨郡・八代郡・巨麻郡・都留郡の四郡が設置された。本古墳群を含む甲府盆地北縁地域は山梨郡に属していたと考えられる。近年の発掘調査によって甲府市大坪遺跡(11)で「甲斐国山梨郡表門」の刻書土器、一宮町松原遺跡(24)で、「林口」、「石禾束」、同町大原遺跡(22)で「玉井郷長」の墨書き土器が出土し、各郷の所在地が明らかになってきている。



第1図 横根・桜井積石塚古墳群周辺の遺跡 (1 : 50,000)

1. 横根支群 2. 桜井内山支群 3. 桜井支群 4. 桜井東支群 5. 駿掛塚古墳 6. 大蔵經寺山古墳群 7. 春日居古墳群 8. 橋越山田古墳 9. 村内1号墳
10. 村内2号墳 11. 大平遺跡 12. 上土器遺跡 13. 川田瓦窯跡 14. 松井塙跡 15. 松本塙跡 16. 宮本塙跡 17. 春日居町国府 18. 魁甲塙古墳
19. 須坂町国府 20. 二之宮遺跡 21. 越塙遺跡 22. 大原遺跡 23. 甲斐国分尼寺跡 24. 松原遺跡 25. 甲斐国分寺跡

奈良・平安時代の集落は古墳時代からそのまま継続したものが多く、盆地北縁に近い沖積地に遺跡が集中するが、盆地底部の平坦地にも多くの集落の形成が確認され、低湿地への開拓が行われた状況が窺われる。また特に注目されるのは、一般的な集落遺跡の他に生産遺跡が知られていることである。春日居町寺本庵寺の瓦を生産した川田瓦窯跡は奈良時代になると甲斐国分寺(25)の瓦も生産するようになる。また、その時期には川田瓦窯跡に隣接した上土器遺跡(12)でも因分寺瓦の生産を行っている。これらの瓦生産遺跡のさらに西側に土師器を生産したと考えられる大坪遺跡があり、甲府市の東部にはこうした生産遺跡が多く存在することが知られ、この地域で採集される良質な粘土を利用して、高度な窯業技術を持った集団が居住したものと推定されている。

中世から近世にかけての遺跡は、山麓から沖積地のより広い地域に密に立地している。中でも、川田町の二之宮神社付近の地は、甲斐武田氏が守護大名から戦国大名に変貌する時期の拠点となった川田館の存在が想定されている。後に永正16年(1519)、古府中の櫛ヶ崎の地に館が移されることとなる。

以上、本遺跡周辺の歴史的環境について概観してきた。まとめると本地域は、古墳時代後期において甲斐の三大勢力の一つとなり、7世紀末には最も優勢になり寺本庵寺の建立をはじめ、甲斐国の政府である甲斐国府が造営された。本古墳群はこのような春日居勢力と非常に密接な関係をもつ地域に存在しており、本古墳群の被葬者についてはこれまで帰化人説や立地環境説などと説かれているが、いずれにしても本地域の勢力基盤を担った人物の墓制であることは間違いないであろう。(保坂和博)

第2節 甲府の積石塚古墳研究史

甲斐の積石塚古墳に関する最古の記録は、今のところ文化3年(1806)にまとめられた横根村と桜井村の『村方明細書上帳』と羽黒村の『諸色明細帳』である。「火の雨塚壹ヶ所 當村小物成山之内」(横根村)、「火の雨塚 拾五ヶ所 是ハ先年火ノ雨塚と申傳貳拾五人位居り候程之石積いたし候穴ニ御座候 大概四間ニ八間位火の雨と申風説にても有之作り申候山中候」(桜井村)、「一 営村火之雨除塚三ヶ所 字大塚 小塚 しんげ塚」「一 明峰山此山山上荒川石ニ而右塚御座候此塚之上に石塔御座候石塔之譯不存候」(羽黒村)との記述がある。これらの記載から前より積石塚古墳を「火之雨塚」「火之雨除塚」と呼んで他の盛土塚と区別していたこと、横根村1基・桜井村15基・羽黒村4基の計20基の存在が確認されていたこと、明峰山(天狗山)山頂の積石塚が荒川右にて墳丘が構築されていたことなどがわかる。文化11年(1814)に松平定能らが中心となって編集された『甲斐国志』の本文中には、羽黒村の「加牟那塚」の項のなかで積石塚に関する同様の記述があるのみであり、「火之雨塚」が「石室」として表現されている点が異なっている。

「火之雨塚」や「火之雨除塚」の積石塚を示すこの言葉は、現在ではまったく使われてはいない。県外の一部の文献にも、古墳に対して「火之雨塚」の文字が使われている例があるが詳しく述べてない。この「火之雨」の文字から来る解釈としては、火山灰や火山弾などの火山性降下物が流星群などと想定される。当時は「火之雨除塚」の言葉から、積石塚の構築理由を「火之雨」を除けるために先人が築いたと信じていたものと解釈される。しかし、なぜ盛土塚には用いられず積石塚にのみ用いられたのか謎である。

明治20年代に山中共古は、見聞した甲斐の民俗や遺跡などを『甲斐の落葉』(1926)にまとめている。この中で「甲府在湯村ニ蠍蛇塚トイヘル石塚ニツアリ盛ルニナク小行け什ノミ土ノ落チタルモノ 始ヨリ土ナク造リカ詳ナラズ」「東山梨郡鎮日村奥ヨリ上府中岩屋觀音ヘ至ル道石塚三四ヶ所アリ 天井及壁石ノミアリテ少シモナシ・・・」と甲府市湯村と春日居町の積石塚について図入りで紹介している。また、「日下部村々社地内」と「上岩下村人家ヨリ向フ山」にも「石塚」の記載がある。山中は、

石のみにて構築されている塚を「石塚」と呼び、築造当初から石のみの古墳なのか、盛上墳の土の流出した結果の産物かその由来に注目している。

このように早くから積石塚に対する注意が払われていたにもかかわらず、積石塚が本県の古代史研究の俎上に上がったのは昭和になってからであった。昭和10年(1935)仁科義男は「甲斐國の先史並原始時代の調査」の中で、春日居町御室山古墳と山梨岡神社の関係を積石塚という古墳構築形式の特異性と共に指摘している。これに統いて12年には、大場磐雄は「原始神社の考古学・考察」を著し、神奈備型の神体山御室山とその山中の積石塚古墳、それに延喜式式内社山梨岡神社の三者の関連を考察している。古墳と神社の有機的関係を、被葬者である山梨県上の古墳奉祀からここを遙拝する山中に神社の旧社地が設けられ、参拝の便が容易な現在の社地に移ったことで、本来の古墳との関係が消えてしまったと説かれている。

しかし、現地では、御室山古墳の存在する場所の北側のやや高所に旧社地があったと考えられ、位置的に不自然なところがある。あるいは、この古墳と旧社地との間にある平盤状の磐座が元来の信仰の対象で、古墳がその聖地にちなみ構築された可能性もある。

戦後になって「甲府の古代遺跡」をまとめた三枝善衛は、御室山と羽黒(天狗)山とともに夢見山駿部の積石塚を紹介し、これら三者の立地が共通している点を強調している。その後山木寿々雄は県内の類似例の報告をし、一般の古墳との相違点などに注目している。山梨県教育委員会の全県下を対象とした埋蔵文化財包蔵地分布調査によって、横根・桜井・石和・春日居の積石塚古墳群が明らかとなつた。この調査で甲府市域を担当した飯島進らによって、昭和49年(1979)『甲斐の古墳Ⅰ 甲府北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査』が刊行された。横根・桜井積石塚研究の基礎的データとして墳丘・石室及び出土遺物の実測図が作成されて掲載された。飯島は、これらの資料の集成と共に分析を試み、朝鮮半島における墓制・「帰化人」系神社・古代牧・『続日本紀』などの古文献における渡来人記述を含めて、総合的な見地から強く帰化人墓説を提唱している。また、これまで出されていた石の多い地域的環境から発生したという環境自生説の問題点も指摘している。この飯島の調査に加わった小林広和らは、同書中や「甲府盆地北縁部における後期古墳の様相Ⅰ」(1975)の中で、積石塚の主体部を中心として古墳群の内容を追求している。これらの石室を型式分類し、横根積石塚古墳に見られる堅穴式石室が横穴式石室の変化から発生したと推定している。

昭和53年(1978)春日居古墳群中の笹原塚3号墳が発掘調査された。この発掘は本県で初めての積石塚古墳の正式な発掘調査であり、墳丘の築造状況や石室の構造が詳細に明らかにされた。この調査を担当した坂本美夫は甲府盆地北縁の積石塚を集成し、その立地している石の多い環境を重視して、従来提唱されていた環境自生説の補強をしている。また、これまで堅穴式とされてきた横根古墳群の石室が、実は横穴式石室そのものであることを詳細な分類と比較検討から導き出している。同報告書中で伊藤恒彦は、長野県の大室・長原古墳群や一般的の盛土墳と積石塚との対比を行い、石室構造や墳丘の違いを比較検討している。このころ、郷土の古代史を愛好する市民研究グループ「古代の山梨を知る会」が誕生した。この会は遺跡の保存運動にも関心を示し、横根地区の山林の開発計画に対し熱意をもって保存運動に取り組んだ。昭和56年(1981)独立でこの地域の積石塚の分布調査を実施して、新たに22基の積石塚を発見している。この開発計画に対して、甲府市教育委員会は当該地域の積石塚古墳群の保存活用の基礎資料とするため、山梨県考古学協会に詳細な分布調査を委託した。昭和58年(1983)早春の分布調査によって、70基以上の積石塚古墳の新発見があり、八人山の東南の山腹にも分布していることが新たに確認された。また、甲府市教育委員会は横根地区的開発と保存の調整を図るために、学識経験者・開発関係者・地元代表者からなる横根・桜井積石塚古墳群保存活用マスタープラン作成会議を設置しプランの検討を行った。このように積石塚に対する関心が高まった機運に対して、昭和58年2月に山梨県考古

学協会では「積石塚の地域研究」と題し、山梨・長野・群馬・静岡の積石塚の現状と問題点についての研究発表や、積石塚に関するシンポジウム及び講演会を甲府において開催した。この催しへは時を得たものであって、全国レベルで山梨県の積石塚古墳の位置付けがなされたと共に、一部の研究者にとどまらず一般の県民がこの問題に対し広く関心を示すきっかけとなった。昭和59年、橋本博文は「甲府盆地の古墳時代における政治過程」を発表し、県内の主要な古墳から政治権力の推移を考察した。特に積石塚古墳の築造年代については、出土遺物や立地から従来考えられていたよりも古く、5世紀代まで遡る可能性が高いことを指摘している。この地域に群集する積石塚古墳の諸説ある成因等を究明するため、昭和58年2月に甲府市教育委員会は、山梨県考古学協会に学術発掘調査を委託した。横根支群39号墳を残存状況と立地から調査対象に決定し、発掘調査によって盗掘は受けているものの、得られた副葬品から6世紀代の積石塚古墳であることが判明した。また、同年桜井町地内に農道の新設工事が計画され、このルート上に桜井内川支群9号墳が位置していることがわかった。甲府市教育委員会は、山梨学院大学考古学研究会にこの発掘調査を委託した。調査により埋葬主体部がよく残っている状況が把握され、農道の設計変更によって古墳の主体部を含む3分の2が保存されることになった。

(信藤祐仁)

第3節 横根・桜井積石塚古墳群の調査と保存対策をめぐる経過

横根・桜井積石塚古墳群が考古学の世界で認知されたのは1972年、不動産鑑定のためこの付近を調査していた飯島道氏（故人・元山梨県考古学協会副会長）が地元の人に存在を聞いたことにはじまる。飯島氏は甲斐古墳調査会のメンバーとともにこの地域の分布を調査し、約30基を確認して当時行われていた県教委の跡跡分布調査に追加報告した。この結果、確認された古墳の数は16基にのぼった。

1981年、横根地区の共有林部分について開発計画が表面化したため、古代の山梨を知る会が独自に分布調査を行い、約70基を確認した。

積石塚古墳群の保存が検討されたのは、1982年に古代の山梨を知る会や山梨県考古学協会が甲府市教委に保存を要請したことにはじまる。保存を検討し、保存する場合の範囲や方法を知るためにも、その分布の全容をつかむ事が第一に必要であるため、市教委の委託により1983年1月から4月にかけて山梨県考古学協会が全面的分布調査を実施した。この調査の結果、既知の分を含めて145基が積石塚古墳またはその可能性のあるものとして確認された。

1984年に甲府市教委は前年度の分布調査を受けて成因調査と保存対策の検討に入った。1985年2月から3月にかけて成因調査として、具体的には保存状態の良いと思われる古墳の学術調査を実施することになった。甲府市教委および山梨県考古学協会のメンバーによる検討の結果、横根支群39号墳が調査対象として選定された。この調査も山梨県考古学協会に委託されたが、先に石和町松本の大藏經寺山15号墳で積石塚古墳の発掘の経験をもつ山梨学院大学考古学研究会の学生達が主力となった。1985年春には、甲府市教委によって、甲運東部果実組合所有の駐車場の北側に積石塚古墳の案内板が設置された。

これと並行して、甲府市教委は横根・桜井積石塚古墳群保存活用マスタープラン作成会議を設けて当面の焦点である共有林部分を中心に具体的な保存計画の検討を行い、一応の成果を得たが、これは地元への打診・働きかけの前提としての内部資料として扱われ、それ以上に具体化することはなかった。

1985年夏、桜井地区の農道建設で桜井内川支群9号墳の一部破壊が避けられないことから、この古墳の緊急調査が行われた。この調査は山梨学院大学考古学研究会（担当・十箇駿武助教授）に委託された。調査によって確認された主部を保存するため、再度の路線の見直しが行われた結果、破壊は墳丘の一部にとどまった。

第1章 横根・桜井積石塚古墳群の概要

1990年になって、横根・桜井積石塚古墳群の全体にわたる保存整備計画を検討するための横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会が甲府市教委に設置された。同委員会は現地踏査、房総風上記の丘の見学などの調査活動をへて、1991年3月には基本構想を答申、つづいて基本計画策定のための活動に入っている。

(椎名慎太郎)

第II章 横根・桜井積石塚古墳群分布調査報告

第1節 分布調査の方法

甲府市横根町から桜井町にかけての山裾は、未開発の山林やブドウ畠が広がっている緩やかな南斜面である。調査対象区域は、東は右利町との境界から大藏経寺山を経て山崎の採石場までの大山沢川を中心とした一帯である。この地域の積石塚古墳の形態を見ると、埋葬主体部が明らかなものでも墳丘の石材が失われ一見積石塚と認められないようなものがある。この点を考慮して内部主体の不明なものについても、とりあえず積石塚の可能性のあるものとして取り上げた。その後入念な観察を行い周囲の分布状況なども加味して積石塚か否かを判断した。しかし、それでも判断の下せなかったものについては、積石塚の可能性が残るものとして登録した。

從来から積石塚の確認されている地域の再調査と、さらにその周辺の山林、果樹園における分布調査を徹底して、その分布範囲の確認を行った。積石塚と判断したものについては、過去の古墳番号と照合し、まずこれに旧番号を付けて過去の調査における古墳番号と一致するようにした。また、新たに発見された積石塚については、旧番号の最終番号に統いて一連番号を付与した。

分布調査の進め方として、次の手順で調査を行った。

- 最初に当日の参加人員を4～5人編成の3～4班に分け、地域を区切って山林の藪をかきわけながら人海戦術で悉皆調査した。発見された積石塚古墳や積石塚古墳の可能性のあるものについては、入口にビニールひもで日印をつけ、地図に位置を記入して簡単な記録をとった。
- 再度日印を頼りに現地に赴き確認調査を行い、墳丘・石室の状態、形状、法量、隣接古墳との位置関係を記録した。
- 積石塚古墳と判断されたものについては、所属古墳群および古墳番号を記入したナンバープレートを立て、簡単な清掃を行い現状写真を撮影した。
- これらの調査結果は大きく4つの古墳群に分け、それぞれ集約して分布調査カードに記入し、写真と位置図を裏に添付した。
- 積石塚古墳及び積石塚古墳の可能性のあるものについては、主体部の内容を記号により区分し甲府市の二千五百分の一都市計画図に落とした。
- 積石塚の位置図については、次の四つに分類して記入し全体の分布状況が把握できるようにした。
①堅穴式石室を持つ積石塚、②横穴式石室を持つ積石塚、③埋葬主体部は確認されないが墳丘の積石の構築状況等から積石塚と判断したもの、④埋葬主体部が不明なもので石の集中状況などから積石塚の可能性のあるもの

(信藤祐仁)

第2節 分布調査の経過

1. 調査に至る経過

横根・桜井両町の背後の緩斜面上に存在する積石塚古墳群が多くの人々に周知され、貴重な歴史遺産として重要性が叫ばれるようになったのは、そう古いことではない。そのきっかけの一つは、飯島進氏ら甲斐古墳調査会のメンバーによる労作『甲斐の古墳I 幸福北東部における積石塚、横穴式古墳の調査』の刊行と、そのための調査活動であろう。この報告書の中では、積石塚古墳が大きな研究テーマとしてとり上げられ、種々の角度から考察が加えられている。統いて春日居町誌編纂事業に伴う積石塚占

墳の調査によってさらにその重要性が指摘されるようになり、本地域における積石塚古墳群が大きくクローズアップされるとともに、詳細な実態究明が急務とされてきた。

これらの積石塚古墳群の立地する地域一帯は果樹園が多く、水年の耕地化によって遺構もだいに失われている。1980年12月、横根町県有林地内にある積石塚古墳2基が梅園化によって破壊されるという事態を招いたのもその一つで、それらの保存措置に何らかの方策が必要とされてきた。また、この積石塚古墳群の占地する地域は地元の共有林も多く、さまざまな開発計画もいくたびか組上にあがり、古墳群の保護と開発計画との調和の問題がだいに論議されるようになつた。

こうした積石塚古墳群をめぐる諸問題は、甲府市議会でもとりあげられ、開発との調整、調査と保存を求める意見などが相次ぐようになり、また地元の考古学愛好団体である「古代の山梨を知る会」の積石塚古墳群に関する熱心な調査活動などとも相まって、1982年には市当局はまず正確な実態把握のための分布調査の必要性を感じ、そのための予算を計上することになった。

これらの調査は、積石塚古墳であるか否か個々の認定作業を伴う極めて専門的知識を必要とするために、県内の考古学研究団体である山梨県考古学協会が受託することとなり、これに市民団体である先の「古代の山梨を知る会」の全面的な協力を得ながら実施することとなつた。調査対象は横根・桜井両町に分布する積石塚古墳で、全域を悉皆調査し、分布図の作成と規模・形態・遺存状況等の資料化、さらに個々の古墳にはナンバープレートを設置する等、積石塚古墳の実態把握と保存措置の方策がとられることになった。

分布調査は、厳冬の1983年1月22日から実施され、以降特に休日等を利用してしながら熱心な調査活動が繰り広げられるようになった。なお、県考古学協会では横根・桜井積石塚古墳群の分布調査に並行して積石塚古墳に関する講演会を開催、坂本美夫「甲斐の積石塚」、桐原健「信濃の積石塚古墳」、柴田稔「遠江地方の積石塚」、橋本博文「上野の積石塚」などの基調講演とともに、積石塚古墳に対する研究を深めるとともに、進行中の分布調査の中間的報告もなされている。
(萩原三雄)

2. 調査参加者名簿

出月洋文、数野雅彦、金丸平甫、久保寺春雄、小池正蔵、坂本美夫、佐野勝広、椎名慎太郎、信藤祐仁、末木健、田代孝、中込茂樹、長沢宏昌、中山誠二、新津健、萩原三雄、畠大介、日向千恵、保坂康夫、平出知恵子、三井健一、宮川昌蔵、吉田香屋子（五十音順）

第3節 横根・桜井積石塚古墳群の概要

1. 横根・桜井積石塚古墳群の分布概要

横根・桜井積石塚古墳群は甲府市の北東端、八人山（標高572m）東斜面と大藏経寺山（標高715m）の南西斜面上およびその間を流れる大山沢川によって開析された小扇状地の扇頂部付近の南傾斜面上および沢を挟んだ山腹の斜面上、標高290m付近から460m付近にわたって広く分布している。

本古墳群は、数度にわたる分布調査の結果、古墳かどうか断定できないものも含めて、総数145基を数える。分布にはいくつかのまとまりがみられ、4支群に分けられる。4支群は従来より様々な名称で呼ばれていたが、字名を重視するという観点から本報告をもって統一することとした。西より横根支群（旧称 横根西支群）・桜井内山支群（同 横根東支群）・桜井支群（同 桜井道遙院支群）・桜井東支群となる。

積石塚が分布する範囲は果樹園として現在使用されており、過去の果樹園造成にともなって多くの古

墳が削平されたものと考えられる。飯島進氏はかつて、現在遺された古墳から消滅した古墳の推定を行い、古墳総数1,000~1,400基と試算している。この数字の当否はともかくとして、果樹園が広範囲におよんでいることを考慮するならば、相当な数の古墳が消滅したことは確かであろう。

横根支群は、八人山南東斜面、八人山と大藏經寺川に挟まれた南斜面から大山沢川によって形成された小規模な扇状地状の地形上に分布している。総数107基を数え、本積石塚古墳群総数の約3/4を占める。積石塚は、標高290mから460m付近までの広範囲に広がりをみせる。290m付近から350m付近にかけた大山沢川両岸はもっとも古墳が密集している地域である。現在知られる墳丘形態はすべて円墳である。墳丘径4.6~12.0mを測り、5~7mの大のものが70%ほどを占める。107基のうち内部主体が明確なものは68基を数え、横穴式石室が50基、竪穴式石室が15基、箱式石棺状を呈するもの3基となっている。そのうち八人山南東斜面低位に位置する39号墳は、比較的保存状態が良好な大型の墳丘を残していたため、積石塚の成因調査のための学術調査が実施されている。全長6.2mを測る横穴式石室から土師器・ガラス小玉・鉄鎌・刀子などが出土している(第III章参照)。

桜井内山支群は、大山沢川によって形成された小扇状地から人藏經寺山南西斜面にかけて広く分布する。標高300m付近から430m付近までに総数11基を数え、広く散漫に分布しているといえる。墳丘はすべて円墳であり、規模としては5.5~9.5mを測る。6~7mのものが主体を占めている。総数11基のうち内部主体が明確なものは7基を数え、横穴式石室5基、竪穴式石室2基となる。そのうち竪穴式石室をもつ9号墳は農道建設に先立って発掘調査が行われており、出土遺物としては土師器・須恵器のほか金環、人骨等が発見されている(第IV章参照)。

桜井支群は、人藏經寺山南西斜面、標高290m付近から400m付近に24基が確認されている。本古墳群は東西にはさほど広がらず、南北に長く広がりをみせている。4号墳に隣接する古墳からは珠文鏡と勾玉が採集されている。古墳は過去に農道建設によって消滅したようである。珠文鏡は直径7.5cmを測る。文様は素文縁、外向鋸歯文帯、素文帯、二重円環、1列の珠文帯、一重円環を経て紐にいたる文様構成をとる。勾玉は瑪瑙製であり、片面より穿孔されている(第10図 図版28)。墳丘はすべて円墳であり、規模としては5.0~13.2mを測り、5~7mほどのものが主体を占めている。24号墳は從来天王社古墳と呼ばれていたものであり、本古墳群の中で唯一盛土墳として認定できる古墳である。墳丘上からは土師器片が採集されているが、残念ながら主体部および築造年代は明らかではない。本古墳群形成の性格を考える上で注目される古墳である。総数24基のうち内部主体が明確なものは9基を数え、横穴式石室6基、竪穴式石室3基となる。

桜井東支群は大藏經寺山南斜面、標高290m付近から330m付近にかけて分布する3基の古墳からなる。墳丘はすべて円墳であり、規模としては10m前後を測る。3基のうち2基が内部主体が明確であり、横穴式石室・竪穴式石室各1基である。

以上が横根・桜井積石塚古墳群の分布概要であるが、積石塚古墳の性格上、盗掘されやすいといふこともあり、ほとんどの古墳が盗掘等に伴う破壊を受けているものと思われる。発掘調査が実施されたものは2基にとどまり、それ以外の古墳からの出土品は先に触れた珠文鏡および勾玉のほか、分布調査の折りに発見された土師器片・須恵器片が採集されているにすぎない。

したがって、本古墳群がいつ頃から築造を開始し、いつ頃築造を停止したのか。また、積石塚の被葬者の性格づけなど、現状では詳細に検討する材料を提示することができない。

本章第4節に掲げた表は密度にわたる分布調査の結果を一覧表にまとめたものである。分布調査という性格上多くの誤りや漏れがあるものと思われるが、現状で把握できる成果をまとめたものである。今後の調査・研究の進展によって修正を加えなければならないと考える。

なお、分布調査によって計測することができなかった一部のデータについては、過去の計測データを

引用している部分もある。

また第3～9図は詳細な古墳分布図であるが、図版の関係上支群を無視して古墳をプロットした部分もある。なお、プロットしたマークの凡例は以下の一覧表に示す通りであるが、マーク内の白ヌキ部分は主体部を意味し、一部を除きその方向は主体部の主軸方向と一致させてある。

(宮澤公雄)

主体部の主軸・石室形態の凡例

マーク	主体部の主軸・石室形態
●	主軸方向が明らかな横穴式石室墳
●	主軸方向が不明な横穴式石室墳
●	主軸方向が明らかな胸張型横穴式石室墳
○	主軸方向が明らかな竪穴式石室墳
○	主軸方向が明らかで石室幅に差のある竪穴式石室墳
○	主軸方向が不明な竪穴式石室墳
○	主軸方向が明らかな箱式棺状を呈する石室墳
●	主軸方向が明らかではあるが形態不明な石室墳
●	石室形態が不明な古墳
○	古墳かどうか不明なもの

注

- 1) 飯島進「各地区的古墳分布」『甲斐の古墳 I 甲府北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査』甲斐古墳調査会 1974 p.13～40
- 2) 萩野秀男ほか「積石塚について」『郷土社会の研究 中学校編』山梨県教職員組合・山梨県連合教育会 1956 p.69～72
- 3) 珠文鏡出土の古墳については、註2) 文献においては桜井B号墳として報告されているが、『甲斐の古墳 I』において現在の桜井支群1号墳出土として扱われている。その後、地元の久保寺春雄氏に1号墳出土ではなく、現在の4号墳に隣接した古墳から出土したものであったとのご教示を得た。そのため現在の1号墳とは別の古墳であった可能性の方が高いことが明らかとなった。現在その古墳は、過去の農道建設の際消滅しており存在しないとのことである。本報告では別の古墳からの出土品であるとして、註2) 文献により桜井B号墳出土遺物として扱うこととする。

2. 各支群主要古墳の概要

数度にわたる分布調査によって古墳群全体の分布状況を把握することができ、主体部構造等も一部明らかにすることことができた。以下では、本古墳群のうち比較的保存状態が良好で内容が明らかにできた古墳についてその概要を記す。

(宮澤公雄)

(1) 横根支群

横根支群1号墳

大山沢川の造った沢状地内でも、微地形的には小尾根状に膨らみのある地点に築かれる。標高は427

mを測り、本古墳群中でも高所の見晴らしの良い位置を占める。

西8mには48号墳が隣接している。東35mには87・51号墳が東西に並び、斜面上部には52~56・88号墳がほぼ東西に並んで築かれている。

墳形はかなりくずれているが、不整円形と思われる。

墳丘は、東西7.7m、南北10.1mを測る本古墳群中では比較的大型のものである。高さは、南（斜面下位）から2.75m、北（斜面上位）から1.5mを測る。墳丘構築には主として人頭大の礫が用いられている。

内部主体は、無袖型の横穴式石室で羨道部はすでに失われている。羨道部の天井石は失われているが、玄室部分は原形を保つものと考えられる。規模は現状で長さ3.6mを測るが、玄室内部は礫が充満しそれ以上は計測不能である。幅は羨道部で1.1m、高さは同0.9mを測る。主軸方位はN-10°-Eにとり、斜面にはほぼ並行する。石室の構築は比較的大型の石材を用い、3~4段の小口に積んでいる。この古墳群中では、石室規模・石材ともに大きな造りである。

尚、墳丘から須恵器甕片が出土している。

(清水 博)

横根支群 2号墳

大山沢川の造った沢状地内でも、上位緩斜面に占地する。標高は415mを測り1号墳を北西方向に見上げている。南（斜面下方）10mには4号墳が位置し、西15mには3・49・50号墳が東西に並んでいる。

墳形、墳丘規模ともに明確でないが、墳丘構築には主として人頭大の礫が用いられている。内部主体は無袖型の横穴式石室で上半部及び羨道部は失われている。現長4.1m、幅1.2~1.3mを測り、石室高は1.3mを残している。玄室は胸張を示し、小口積みで構築されている。主軸方位はN-22°-Wにとり、斜面にやや斜行する。本古墳群中では大型の部類に属する石室である。

(清水 博)

横根支群 3号墳

沢状地の上位緩斜面に占地し、標高417mを測る。2号墳の東15mに位置し、北（斜面上位）10mには49・50号墳が直線状に並んでいる。

墳形はほぼ円形を呈し、直径は4.9m、南（斜面下方）からは高さ1mを測る。

内部主体は無袖型の横穴式石室と思われるが、東側側壁の一部しか確認できない。計測しうる範囲では長さ2.6mを測る。石室は石材を小口と横口との両方向に用いて構築している。主軸方位はN-10°-Wにとり、斜面とほぼ並行している。

(清水 博)

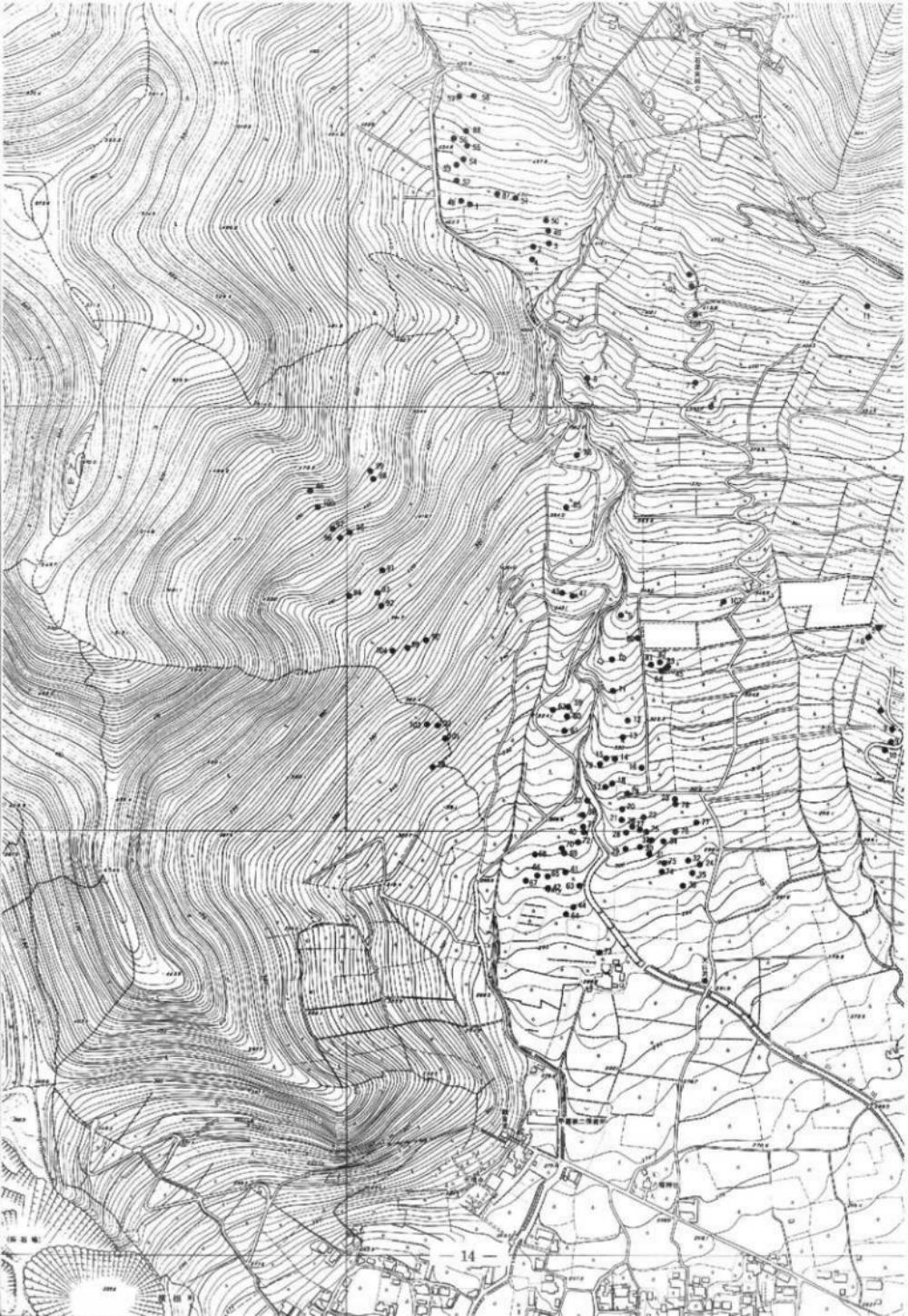
横根支群 5号墳

沢状地内の中央、小尾根状に膨らんだ部分の先端に築造されている。標高は392mを測り、他古墳からは離れて単独に存在する。

墳形は不整円形を呈し、東西7.35m、南北7.1mを測り、高さは南（斜面下方）から1.6mを有する。墳丘は人頭大の礫で築かれている。

内部主体は堅穴式石室で、蓋石を失っている以外はほぼ原状をとどめている。長さは2.2m、幅は0.4~0.5mで東側小口部がわずかに広く、高さは0.76mを持つ。小口部は両側とも大型の石材の一枚石を用いるが、西側小口部は上部に小型の石材をもう一段積み上げている。側壁は石材を小口に用い、4~6段持送りに積み上げている。側壁上端は約10cm迫り出している。主軸方位はN-63°-Wにとり斜面に直交している。

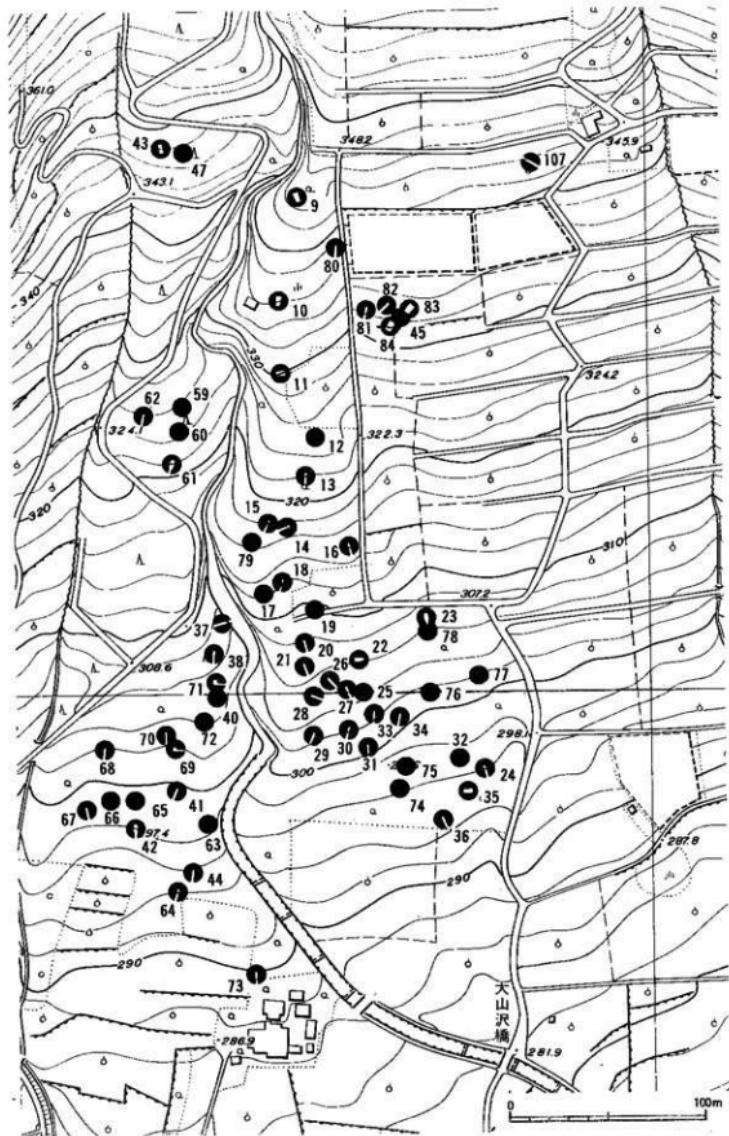
(清水 博)



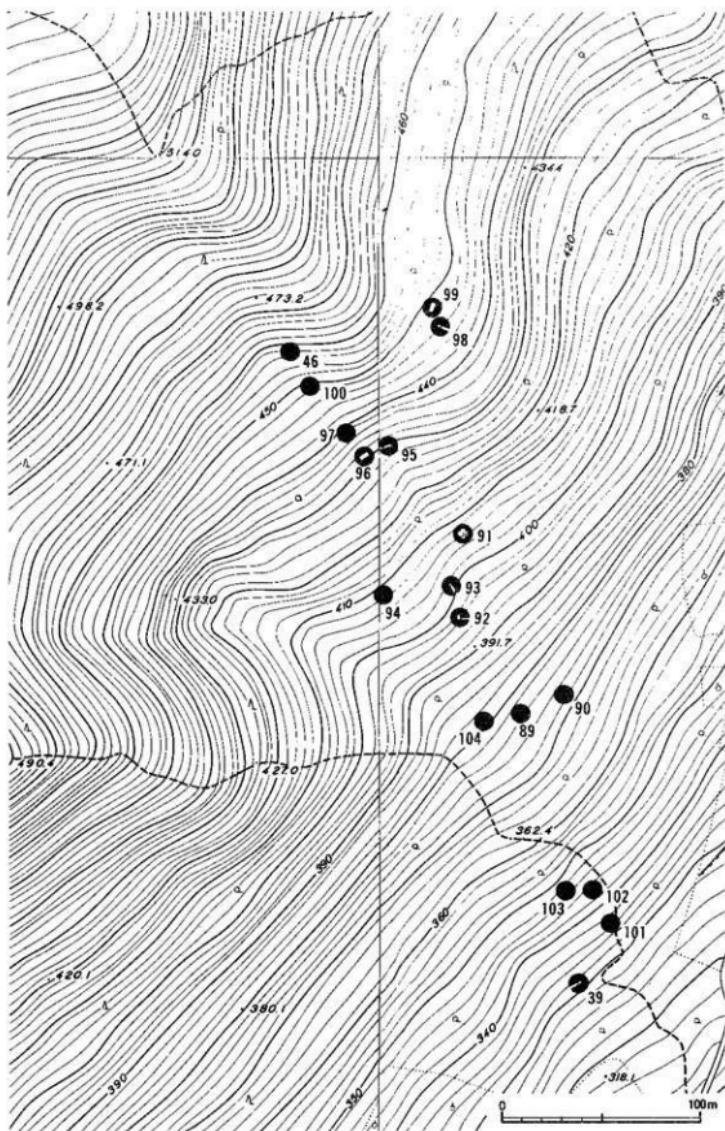
伊豆山
日根町

大根山

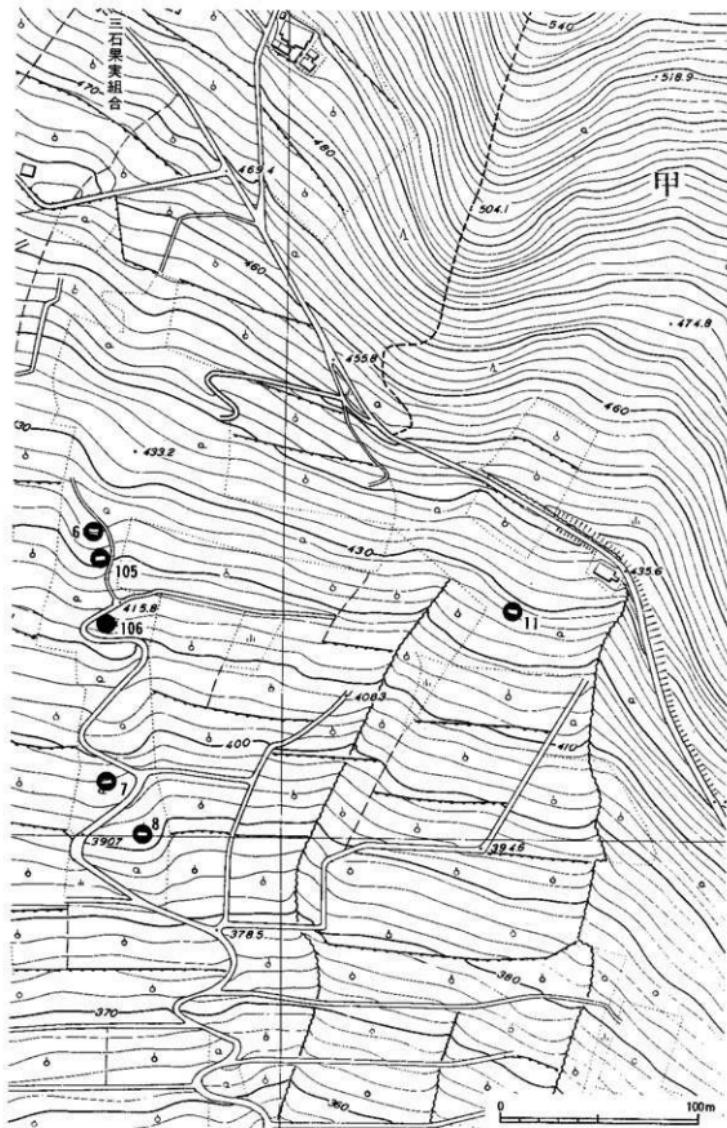
第2図 横根・桜井積石塚古墳群分布図



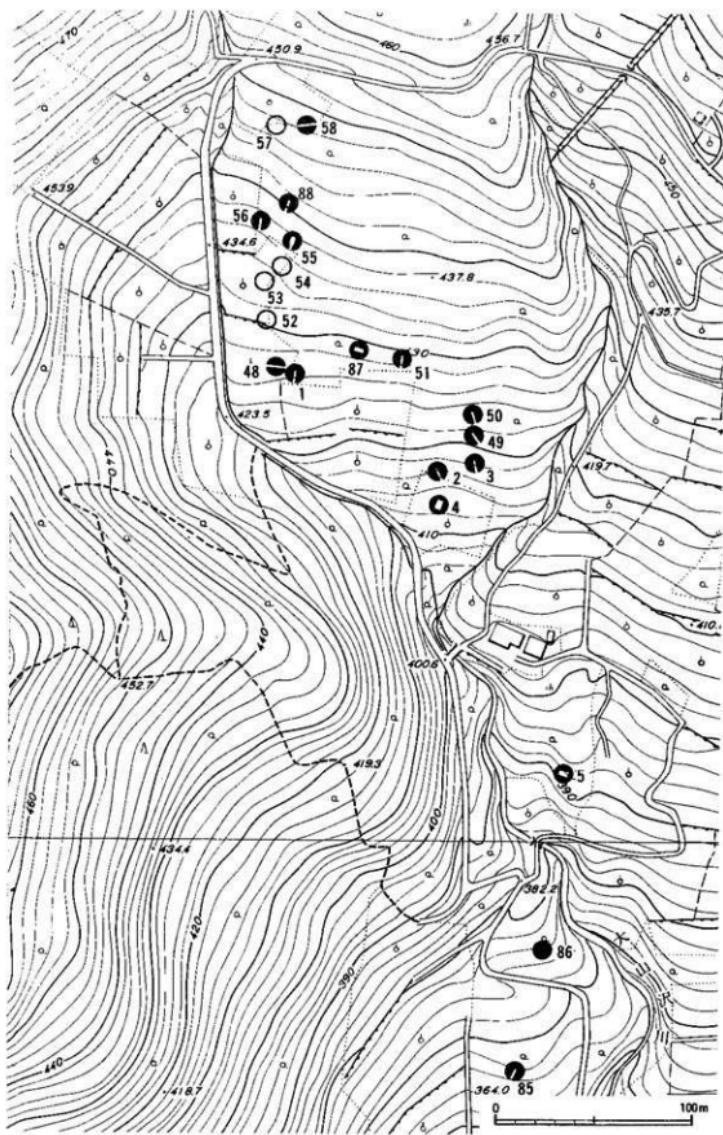
第3図 古墳群群細分布図1（横根支群南ブロック）



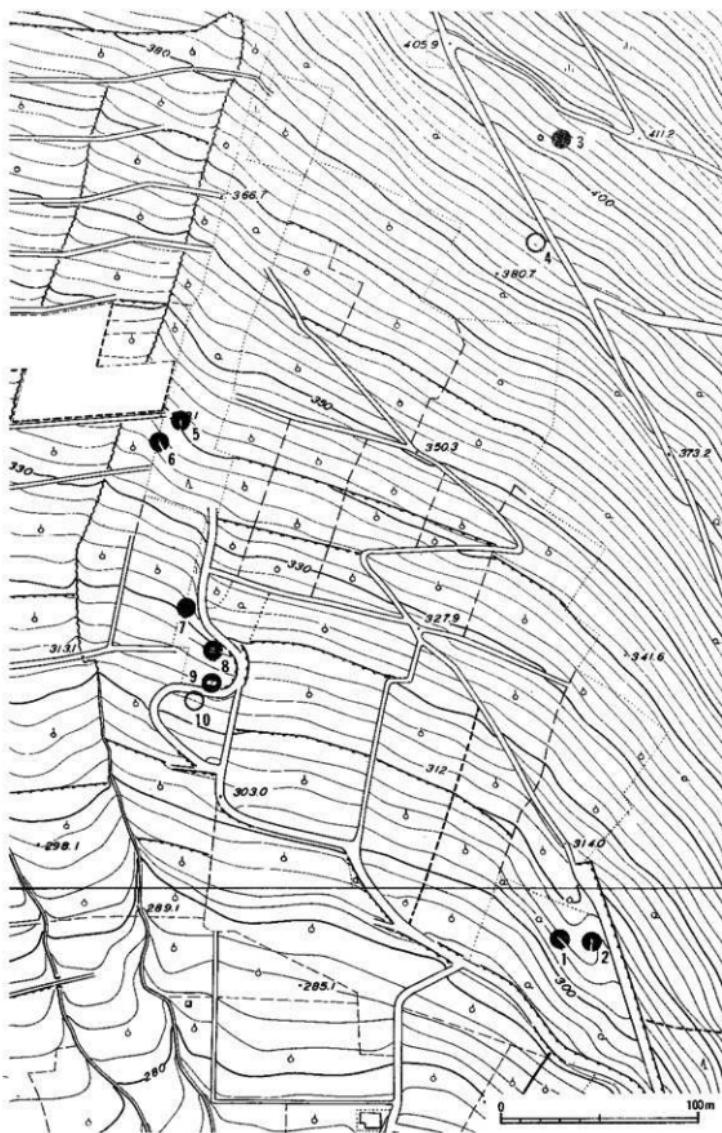
第4図 古墳群詳細分布図2 (横根支群西プロック)



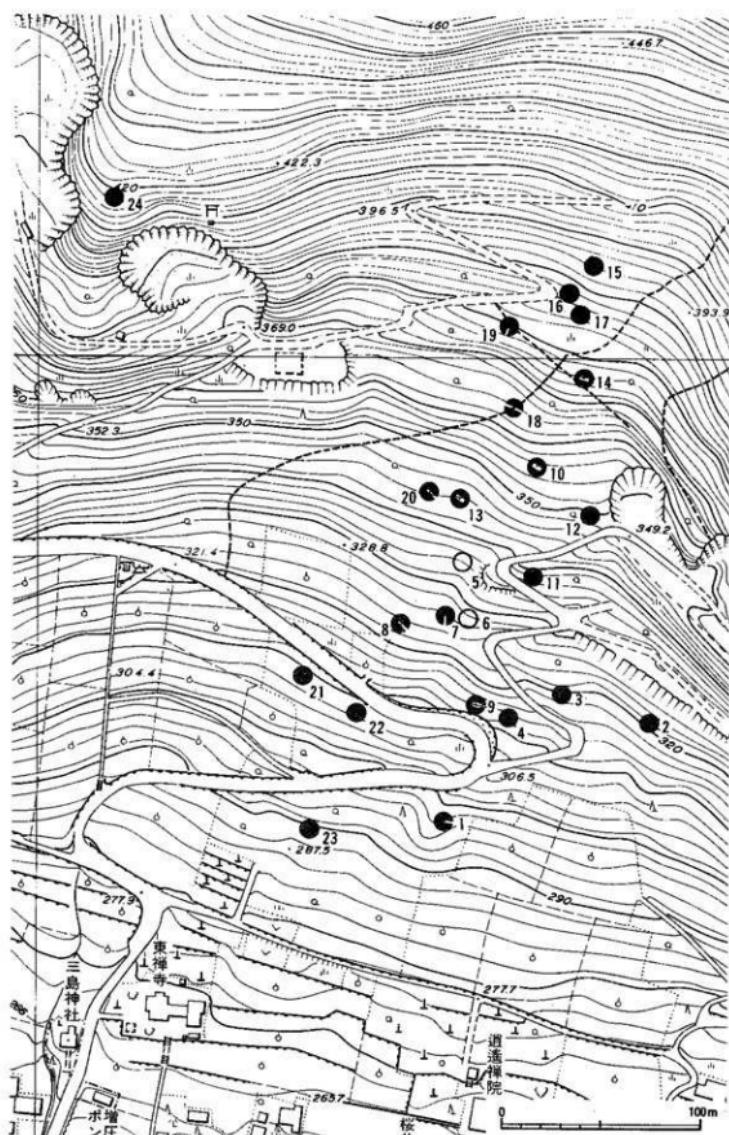
第5図 古墳群詳細分布図3（横根支群北東ブロック 含桜井内山支群11号墳）



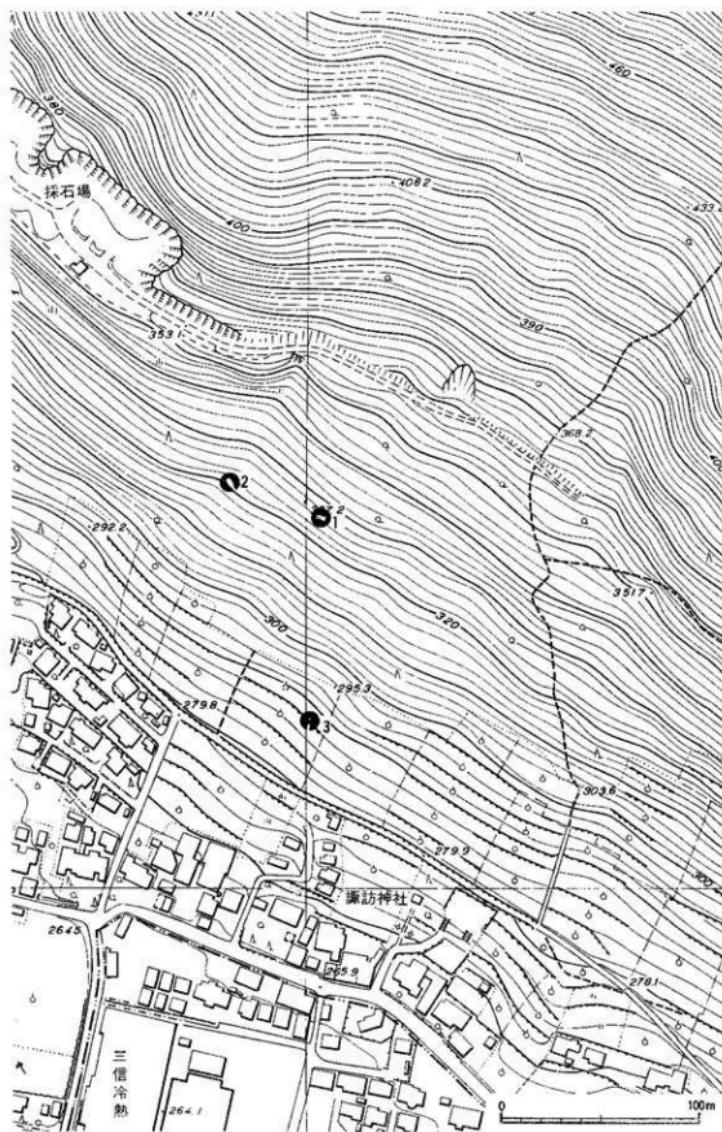
第6図 古墳群詳細分布図4 (横根支群北ブロック)



第7図 古墳群詳細分布図5 (桜井内山支群 除11号墳)



第8図 古墳群詳細分布図6（桜井支群）



第9図 古墳群詳細分布図7（桜井東支群）

横根支群 6号墳

八人山山頂東側の南傾斜面標高424m付近に立地し、斜面下方には105号墳が位置している。古墳は東西長5.4m、南北長5.6mを測る円墳である。高さは南側より1m、北側より0.25mを測り、比較的低い墳丘である。墳丘の遺存状態は良好であり、20~30cmの石を用いて積み上げ、墳端には大型の石を並列石として巡らせている。

主体部は蓋石が取り去られているものの、遺存状態は良好である。石室は長さ2.7m、幅0.6m、高さ0.52mを測る竪穴式石室で、主軸をN-74°-Wにとる。蓋石は矩形の扁平な石（85×45×20cm）が東壁付近に1枚残るのみである。他の用材は斜面下方墳端に散乱している。側壁は基底部に大型の石を横口ないし広口に積み、その上に小形の石を横口ないし小口積みにしており、基底部から5段ほど積まれている。西小口は1枚石を鏡石として用い、その上に石室幅を満たす扁平な石を横口に2段積んでいる。東小口は左右2枚の板石を広口に積んでいる。床面と推定されるレベルまで確認することができるが、床面には敷石は確認できない。石室プランはやや膨脹を呈している。

(宮澤公雄)

横根支群 7号墳

八人山山頂東側の南傾斜面、標高396m付近に立地しており、南東には8号墳が位置している。古墳は東西長6.7m、南北長6.8mを測る円墳である。高さは南側より1.5m、北側より0.2mを測る。墳丘は東側がやや崩落しているものの、裾には0.5~1mの大型の石材を巡らせており、墳端は全体的に明瞭である。

主体部は蓋石がなく取り去られているものの、ほぼ完存している。全長1.85m、幅0.5m、高さ0.5mを測る竪穴式石室を有する。主軸をN-83°-Wにとる。側壁は基底部を全て広口積みにしており北側壁では3枚、南側壁では4枚の石材を使用し、その上に扁平な用材を小口ないし横口積みに2段ほど積んでいる。両小口は1枚石を使用している。

過去の調査では床面に敷石が1枚敷かれているのが確認されたと報告されているが、現状では確認できない。南北两侧壁とも中央部が迫り出したようになっており、石室プランも分銅型を呈する。

(宮澤公雄)

横根支群 8号墳

八人山山頂東側の南傾斜面、標高390m付近に立地しており、斜面上方には7号墳が位置している。古墳は東西長5.1m、南北長4.8mを測る円墳である。高さは南側より0.9m、北側より-0.1mを測る。墳丘は20~30cmの礫を使用して積み上げられている。

墳丘の上半部が削平されているようであり、主体部も上半が破壊されている。東側の小口とその付近の側壁の基底部を残すのみであり、断定はできないがおそらく竪穴式石室であると思われる。石室長0.8m以上、石室幅0.45m、石室高さ0.45m以上を測る。主軸は等高線と並行するようにN-78°-Wにとる。東小口は板状の大型の石を広口に立てている。北側の側壁は小口から3列、2段しか遺っておらず横口ないし小口積みされている。南側壁は1石のみ残存している。

(宮澤公雄)

横根支群 9号墳

大山沢川左岸、南面する小尾根上の高台頂部に位置し、標高約345mの梅畠の中に存在する。墳丘は、東西4.9m、南北5.7m、高さは南方向より0.9mを測る。構築材は10~40cmの石が用いられ、20cm前後のものが多い。周囲には1mほどの大きめの自然石が裾石の役割を果している。墳形は略円形であるが、西から北にかけて本墳の周囲を取り巻いて農道があるためにこの方面的墳丘は遺存状

態が悪い。

石室は天井石が完全に失われている。長さは2.4m、幅は南側0.4m、中央0.88m、北側0.75mを上部で測定でき、胸張型の横穴式石室のようである。しかし、昭和47年の飯島進氏を中心とするグループの調査によると、石室の底面まで確認され石室長2.32m、南壁幅0.43m、北壁幅0.87mの台形をした堅穴式石室が判明している。北壁は階段部を丸めており、底面は板状石材による敷石が認められている。石室は、3～5段の小口積みで、主軸はN-14°-Wをとる。

(信藤祐仁)

横根支群14号墳

大山沢川によって開析された扇状地頂部、本支群の最も古墳が集中する区域の上位、標高317m付近に位置している。周辺には横穴式石室を有する15・16・17・18号墳などが近接している。

墳丘西側は山道によって積み直しがされており明確ではないものの、東西9.6m、南北8.1mを測る円墳である。高さは南側から1.8m、北側から0.6mを測る。墳丘自体は20～30cmの石を積み上げ比較的良好に造されている。

主体部は天井石がまったく見られず移動されているものの、本古墳群中においては非常に良好な遺存状態を保つ1基である。石室形態については、従来から堅穴式石室とする見解もあるが、今回の調査結果で西側壁体が東側壁体に比べ用材の形態も異なり、積み方も整然さを欠いており閉塞石と考えられた。また、石室もさらに西側に延びるものと推定された。従って横穴式石室である可能性が高い。主軸長5m(閉塞石まで)以上、幅0.8m、高さ1.2mを測る。主軸を等高線に平行なN-72°-Eにとる。側壁は南北両壁とも20～60cmの扁平な石を6段ほど端正に小口積みにしている。奥壁は基底部に大型の石を広口積みにし、その上に扁平な石を小口積みに7段ほど積んでいる。奥壁の上部では側壁との接点を直角に作らず、45°に架構している。床については石室が砾で埋まっており、確認することができない。

(宮澤公雄)

横根支群15号墳

大山沢川左岸の南緩斜面上に位置し、標高約319mの雑木林中に存在する。墳丘は東西約6m、南北約7m、高さ南から1.3m北から0.4mを測る。構築材は10～50cmの石が用いられ、墳丘の残存状況のあまり良くない円墳である。石室は天井石が完全に失われて開口しており、長さ2.6m、幅約0.75m、高さ0.9mを測る。無袖型の横穴式石室で主軸をN-28°-Eにとる。奥壁は一枚石を鏡石として用いており、側壁は横口積みを主とする平板状の石が3段確認されている。側壁の石は、崩れのためかやや持送り状になっている。また底面には、拳大以下の石が敷かれたようになっている。

(信藤祐仁)

横根支群16号墳

大山沢川左岸の南緩斜面上に位置し、標高316mの雑木林中に存在する。墳丘は、東西約6.9m、南北約7.9m、高さは南から1.1m北から0.5mを測る。構築材は10～50cmの石が用いられ、残存状況のあまり良くない円墳である。石室は天井石が失われ開口している無袖型横穴式石室である。長さ3.5m、幅約0.95m、高さは南東から0.6mを測る。主軸をN-6°-Wにとる。奥壁は一枚石を鏡石として用いており、側壁は横口積みを主とする平板状の石が3段確認されている。側壁の石は、崩れのためかやや持送り状になっている。また底面には、拳大以下の石が敷かれたようになっている。

(信藤祐仁)

横根支群18号墳

大山沢川によって開析された扇状地の扇頂部、標高312m付近に位置する。本支群において古墳が最

も密集する地域の上位に占地し、西側には17号墳が隣接する。

墳丘は北側が良好に造るもの、南側は一部削平を受けている。北側の墳端の状況からすれば円墳であると想定され、東西長6.7m、南北長4.8mを測る。マウンドは低く、かなり削平されているようであり、高さは南から0.6m、北から0.3mを測る。

主体部は、天井石が取り去られており、奥壁と側壁3枚が上面でのみ確認できる。壁の状況などから南に開口する横穴式石室であると推定される。主軸長2.1m、石室中央部付近で幅0.75mを測る。高さについては石室内に礫が落ち込んでいるため測定することはできない。主軸は等高線と直交するように、N-18°-Eにとる。奥壁は上面でのみの確認であるが、1枚の板石を使用している。側壁は炬形のやや大型の用材を横口に積んでおり、現状では2段のみ確認できる。床面は確認するに至っていない。

(宮澤公雄)

横根支群20号墳

大山沢川によって開析された扇状地扇頂部、人山沢川左岸の標高308m付近に位置する。北側には19号墳、南側には21号墳が隣接している。

古墳は東西長7.4m、南北長6.6mを測る円墳である。高さは南側から1.6m、北側から0.6mを測る。墳丘裾には大きな石を巡らせており、墳丘は10cm大の石を多用しており、良好な遺存状態である。

主体部は天井石が全て崩落しているほかは良好に造る。全長3.5m、幅0.85m、高さ1.1m以上を測る横穴式石室を有する。主軸をN-12°-Wにとる。入口部には天井石が散乱しており、閉塞石を確認することは出来ない。天井石は奥壁よりに造る1枚が0.8m四方の正方形を呈するが、他は細長い形態である。側壁は大型の用材を用い、ほとんどが横口積みされているようである。奥壁は上部でしか確認できないが、同じく横口積みであろう。

(宮澤公雄)

横根支群21号墳

人山沢出口の緩傾斜面で、やや小尾根状に膨らむ位置に築かれている。標高は307mを測り、本古墳群中でも低位に集中して営まれている一群に属している。周囲15~20m程には20・26・27・28号墳が本古墳を取り囲む様に存在している。

墳形は円形で、墳丘構築には拳大から人頭大の礫が用いられているが非常に不揃いである。規模は、東西5.8m、南北6.4mを測り、高さは1.3mを有する。

内部主体は横穴式石室であるが、天井石・側壁上半・前半部を失い、遺存状態は悪い。規模は現状で、長さ1.75m、幅0.85m（奥壁部）を測り、高さは0.5mを有する。奥壁は石材を広口に用い、現状では一段であるが上部に更に1段積まれたものであろう。側壁は奥壁に接して横口に用い、他は小口に積んでいる。いずれにしても小型の石室であろう。主軸方位はN-12°-Wにとり、斜面と並行している。

(清水 博)

横根支群22号墳

大山沢川によって開析された扇状地扇頂部、大山沢川の左岸標高306m付近に立地している。20・26号墳などが隣接している。

古墳は東西長6.7m、南北長6.5mを測る円墳である。高さは南側から1.3m、北側から0.3mを測る。裾部に比較的大きな石を用いており、墳丘上は20~30cm大の石を多用して構築している。

主体部は蓋石がまったく見られず、床面が露出している。主軸長1.8m、幅0.8m、高さ0.9mを測る横穴式石室を有する。主軸を等高線とほぼ並行するN-80°-Wにとり、石室プランは幅に比して主軸

長が非常に短い形態をとる。南北両側壁は扁平な石を小口積みと広口積みを併用して構築している。東西両小口は鏡石として大型の1枚石を使用し、隙間には小さな石を充填している。床面には10~30cmの扁平な石を敷き詰めている。

(宮澤公雄)

横根支群23号墳

大山沢川左岸の南緩斜面上に位置し、標高約309mの雜木林中に存在する。尚には78号墳が裾を接する形で存在するが、重複する部分があるため主体部の不明な78号墳は古墳でない可能性もある。

墳丘は、東西8.3m、南北7.3m、高さ南方向から1.2m、北方向から0.3mを測る円墳である。構築材は5~30cmの石が用いられているが、拳大以下の小さめのものが多い。石室は、長さ3.6m、高さ0.9m以上を測り、幅は奥壁部0.9m、中央1.24m、入口部0.86mのきれいな胴張型の平面プランを呈している。主軸をN=8°-Wにとる無袖型の横穴式石室である。天井石はすべて失われており、石室の構築材も内部に崩落し前部付近に散在している。奥壁石は2枚が確認され、下方は広口積み上方は横口積みである。側壁は小口積みを主とし、やや持送り状になっており、平板状の石1~3段が確認されている。

(信藤祐仁)

横根支群24号墳

八人山南緩斜面、扇状地扇頂部の標高296m付近に立地し、本古墳群中でも最も低い位置に存在する一群に含まれている。周辺に32・35・36号墳が近接している。

墳丘は東西7.9m、南北7.7m、高さ南から1.2m、北から0.5mを測る円墳である。構築材は10~30cmの石が用いられているが、人頭大のものが主体を占めている。

主体部は天井石が失われており、主軸をN=10°-Wにとる横穴式石室と思われ、全長約3.75m、玄室長3.1m、同幅1.2m、高さは現状で最大0.6mを測る。羨道部は遺存状況が悪く、0.65mが残存している。奥壁は広口積みないし横口積みの石が2段確認され、隙間を小型の石で充填している。特に上段2枚の内、東側は0.6m程の大型の石が広口積みされている。側壁は扁平な石を用材とし、横口積みを主として小口積みが若干混じり、わずかに持送り状を呈している。現状では3段確認されている。

(保坂和博)

横根支群26号墳

大山沢川によって開析された扇状地扇頂部、大山沢川の左岸標高305m付近、本古墳群中最も古墳が密集する地区のほぼ中心に位置しており、周辺には21・22・25・27・28号墳などが隣接している。

古墳は東西長5.8m、南北長6mを測る円墳である。高さは南側から1.3m、北側から1mを測る。墳丘裾には大きな石を巡らせており、墳丘端は明瞭となる。特に斜面上方の北側、奥壁後方部では顕著である。墳丘は5~20cmの小さな礫を多用して構築されている。

主体部は全長3.15m、幅0.9m、高さ1.05mを測る横穴式石室である。主軸をN=42°-Wにとる。天井石は石室内に崩落しており、原位置をとどめるものはない。側壁は小口積みによって3~4段ほど積まれている。奥壁は基底部を大きな石で横口に据え、その上に小口積みで3段ほど積んでいる。石室内には天井石および礫が崩落しており床を確認することは出来ないが、石室プランはやや胴張を呈する。

(宮澤公雄)

横根支群27号墳

八人山南緩斜面、扇状地扇頂部の標高305m付近に位置している。26号墳同様、本古墳群中では最も

古墳が密集する地域に存在している。周辺に20・21・22・25・26・28・33号墳が近接している。

墳丘は東西5.5m、南北4.7m、高さ南西から0.96m、北東から0.45mを測る円墳である。墳丘上には20~40cmの比較的人型の構築材を多用している。古墳の縁辺部には大型の石がいくつか配置されている。

主体部は主軸をN-18°-Wにとり、現状で主軸長3.8m、幅0.8m、高さ0.6mを測る横穴式石室である。大井石は石室内に崩落している1枚のみが確認されている。奥壁およびその周辺は破壊されており、石室内に構築材が散在している状況である。側壁は基底部のみが確認され、大型の石を用材とし、小口積みないし横口積みされている。

(保坂和博)

横根支群28号墳

沢出口の緩傾斜面に位置している。標高は305mを測り、本古墳群中でも低位に集中して営まれている一群に属している。周囲15~20m程には21・26・27・29・30号墳が本古墳を取り囲む様に存在している。

墳丘は崩落が著しいがほぼ円形を留め、東西5m、南北5.6mを測り、高さは0.85mを有する。構築には人頭大よりやや小さめの石材が用いられている。

内部主体は明確ではないが、墳丘中央部に1.4×0.6mの豊穴状の石組が認められる。この石組は東南側へさらに1.4mほど延長しており、横穴式石室となる可能性が強い。規模は現状で長さ2.8m、幅0.6~0.5mを測り、高さは0.48mを有する。基本的には小口積みで構築されている。主軸方位はN-65°-Wにとり、斜面に斜行している。

(清水 博)

横根支群29号墳

大山沢川左岸の南緩斜面上に位置し、標高約303mの雜木林中に存在する。墳丘は東西8.3m、南北7.7m、高さ南方向から1.95m、北方向から0.9mを測る円墳である。墳丘の遺存状態は良好で、構築材は20~50cmの石が用いられている。古墳の縁辺部には大型の石がいくつか配置されている。石室は、天井石がなく開口しているものの残存状態はきわめて良好であり、閉塞石も原位置をとどめていると思われる。石室長2.65m、羨道長1.5mを測る。幅は、奥壁部0.9m、中央部1.0m、入口部0.82mのやや胴張型の平面プランを呈す。主軸をN-30°-Eにとる無袖型の横穴式石室であると思われ、奥壁の隅の部分は、角を落とす形で石が配されている。奥壁は小口積みないし横口積みの30~40cm大の石が4段確認され、側壁は小口積みを主とした積み方となっている。

(信藤祐仁)

横根支群30号墳

八人山南緩斜面、單状地壘頂部の標高302m付近に位置し、本古墳群中では最も古墳が密集する地域に存在している。周辺に29・31・33・34号墳が近接している。

墳丘は東西5.3m、南北6.0m、高さは南から1.0m、北から0.6mを測る円墳である。墳丘の遺存状況は良好であり、土石混合墳の可能性がある。墳丘上には20~30cmの構築材を多用している。古墳の縁辺部には大型の石が巡らされている。

主体部は主軸をN-20°-Eにとり、主軸長2.4m、幅0.8m、高さは現状で最大0.64mを測る横穴式石室である。主体部の位置は墳丘の中心よりやや東側に傾いており、これは西に傾く斜面に立地しているためと思われる。天井石は確認されていない。奥壁は基底部に2枚の大型の石を広口積みし、現状ではその上に平板状の石を小口積みで3段積んでいる。側壁は基底部に人型の石を広口に積み、その上に小口ないし横口積みに2段確認されており、やや持送り状になっている。

(保坂和博)

横根支群34号墳

沢山口の緩傾斜面で、ほぼ傾斜変更線上に位置している。標高は301mを測り、本古墳群中でも低位に集中して営まれている一群に属している。この301~302mの等高線上には本古墳を含め、29・30・76・77号の各古墳が並んでいる。

墳頂部を尖りが遺存状態は比較的良好である。墳形は円形で、東西7.5m、南北6.5mを測り、高さは北（斜面上方）から0.45m、南（斜面下方）から1.1mを有する。墳丘は人頭大よりやや小さめの石材を用いて構築され、石材の大きさは比較的そろっている。墳船には大きめの石が断続的に一巡している。

内部主体は無袖型の横穴式石室で、天井石及び石室上部を尖りがよく原形を保っている。規模は全長2.3m、幅0.8mを測る。奥壁は広口面を表にして1段遺存するが、本来は2~3段はあったものであろう。側壁も石材の広口ないし横口を利用して2~3段積み上げている。側壁の高さは、現状で最大0.65mを測るが、石室全体の形状から本来的にも1mには達しない規模のものであろう。奥壁から1.15m程の位置に疊が3段程積み上げた状態で存在するが封鎖石であるか否かは判断しえない。上軸方位はN-15°-Eにとり、斜面にやや斜行している。

この石室は形態的には横穴式石室であるが、石室規模から推して本来的な意味で横穴式石室として使用したか否か疑問がかかる。
(清水 博)

横根支群35号墳

八人山南縁斜面、扇状地扇頂部の標高295m付近に立地し、本古墳群中でも最も低い位置に存在する一群に含まれている。周辺に24・32・36号墳が近接している。

墳丘は東西7.7m、南北6.6m、高さ1.2mを測る円墳である。墳丘上には10~40cmの構築材を多用している。古墳の縁辺部には人型の石がいくつか配置されている。

主体部は主軸をN-90°-Wにとり、現状では主軸3.42m、幅0.5m、高さは0.5mを測る堅穴式石室である。主体部の位置は墳丘の中心より南側に傾いている。蓋石は確認されていない。西側小口は大型の1枚石を使用しているが、東側小口は確認されていない。南北両側壁は扁平な石を主に小口積みと横口積みを併用して構築している。小口および側壁の裏込め石は拳大の石を充填している。

主体部の北側（墳丘中央部）には窪んでいる箇所や小口にあたる位置に大型の石がみられるため、本古墳には二つの堅穴式石室が存在した可能性がある。
(保坂和博)

横根支群38号墳

大山沢川によって開析された扇状地扇央部、大山沢川の右岸標高307m付近に占地する。大山沢川が東側陥を流れ、37・71号墳が前後に位置している。

古墳は東西長7.4m、南北長7.9mを測る円墳である。高さは南側から1.2m、北側から0.4mを測る。墳丘は比較的良好に残存しており、とくに東側墳端は良好に遺存している。墳端には50~70cmの大型の石を樹列石として巡らせている。

主体部は全長3.3m、幅0.95m、残存高0.5mを測る無袖型の横穴式石室を持つ。石室は南に開口し、主軸をN-10°-Eにとる。天井石はまったく残らず、石室も下半を残すのみである。入口部は袖石を左右に広げ、前面をきれいに作り出している。側壁はほとんどが基底部一段を造るのみで、奥壁とのコーナー部に3段ほどを造る。確認できる側壁は小口積みされている。奥壁は東側2/3ほどを大型の石1枚で広口積みし、隙間を小型の石で充填している。奥壁隅は両隅とも連結部の側壁を斜位に配しているが、石室プランは調査にはならない。閉塞石は最下段のみ遺るが、細長い石を主軸に対し並行に配置してい

る。

(宮澤公雄)

横根支群41号墳

大山沢川によって開拓された扇状地扇央部、大山沢川の右岸標高300m付近に位置する。大山沢川が東脇を流れ、周囲には63・65・69号墳が近接している。

古墳は東西長9m、南北長7.7mを測る円墳である。高さは南側から1.4m、北側から0.8mを測る。比較的大型の用材を用いて構築している。

主体部は天井石が見られず、壁体が墳丘上に一部露出している。奥壁は確認できず、入口部よりの計測値であるが、全長4.05m以上、幅0.9mを測る横穴式石室を持つ。石室は南に開口し、主軸をN-28°-Eにとる。側壁は上部でのみ確認できるが、小口積みないし横口積みとなる。石室内には礫が崩落しており、床面を確認することは出来ない。また、入口部は基底部が遺るのみで、閉塞石も確認できない。

(宮澤公雄)

横根支群42号墳

大山沢川右岸の南緩斜面上に位置し、標高299mの雜木林中に存在する。墳丘は東西7.0m、南北7.8m、高さ南方向から1.56m、北方向から0.53mを測る円墳である。石材は10~40cmの石が用いられている。古墳の縁辺部には、60~80cmの人頭の石がいくつか配置され据りとなっている。石室は、天井石が中央部に一枚残存するものの、石室内にコナラの木が生えており、南半は判然としない。石室長は北半奥壁より1.7mが確認でき、高さ0.58m以上ある。幅は奥壁部で0.75m測り、中央部でややふくらむ胸張型を呈すと思われる。奥壁は一枚石で、側壁は横口積みを主として小口積みが若干混じる。主軸をN-2°-Eにとる横穴式石室であると思われる。なお、墳丘の南半部からは、須恵器の甕の破片が十数点発見されている。

(伝藤祐仁)

横根支群43号墳

大山沢川右岸の、小尾根状に膨らんだ部分の先端に築造されている。標高は348mで高度的には古墳群のはば中位に位置する。東9mには47号墳が存在する。

墳形は円形で、東西5.4m、南北6.3mを測り、高さは北（斜面上位）から0.6m、南（斜面下位）から1.2mを有する。

内部主体は竪穴式石室で、規模は長さ2.5m、幅1.02~1.1mを測り中央部がやや膨らみを見せる。高さは現状で0.85mを有し蓋石は失われている。石室小口側は一枚岩を立てて造り、側壁は小口積みで粗い造りである。主軸方位はN-7°-Wで斜面とほぼ並行している。

(清水 博)

横根支群44号墳

沢出口の緩傾斜面で、大山沢川右岸に位置する。標高は296mを測り、本古墳群中でももっとも低位に集中して營まれている一群に属し、南西8mには64号墳が存在している。

墳形は円形であるが、墳丘はかなり削平され特に東半分は抉り取られるように失われている。しかし、墳裾には大きめの石が断続的に巡らされ、古墳の形状、規模はよく推測しうる。規模は東西10.8m、南北12mを測り本古墳群中では規模の大きな古墳である。高さは1.6mほどしか遺らない。墳丘は人頭大的礫によって構築されている。

内部主体は無袖型の横穴式石室で、天井石及び石室上部を失うが比較的よく遺っている。規模は、全长5.3m、幅1.1mで現状でも1.1mの高さを有している。奥壁は大きな石材を横口及び広口に積んでお

り、現状で2段本来は4段はあったものと考えられる。側壁は横口積みでわずかに持送り状を呈し、壁上部は14cm程迫り出している。羨門部には封鎖石が幅1.6m程にわたってよく遺っている。羨門部から前庭部、墳裾へのラインも比較的よく観察される。主軸方位はN-15°-Eにとり、斜面と並行している。

(清水 博)

横根支群49号墳

沢状地の上位緩斜面に占地し、標高は421mを測る。北（上部）6mに50号墳、南（下部）10mに3号墳とほぼ一直線上に並んで築かれている。

墳形は円形で、墳丘は拳大から人頭大の礫で築かれる。規模は東西4.0m、南北6.0mを測り、高さ1.0mを有する。

内部上体は横穴式石室で、前半部を失っている。天井石は3枚確認できるが全て玄室内に落ち込んでいる。規模は現状で、長さ1.6m、幅0.65mを測り、高さ0.6mを有する。奥壁は石材を広口に2段積み、側壁は小口積み2段である。主軸方位はN-37°-Wにとり斜面にやや斜行している。

この石室は形態的には横穴式石室であるが、石室規模から推して本来的な意味で横穴式石室として使用したか否か疑問がのこる。

(清水 博)

横根支群50号墳

沢状地の上位緩斜面に占地し、標高は423mを測る。南（下部）方向6mに49・3号墳とほぼ一直線上に並んで築かれている。

墳形は円形を呈し、墳丘は拳大から人頭大の礫で築かれ拳大のものが多い。規模は、径5.7m、高さ1.2mを測る。

内部主体は横穴式石室で、前半部を失っている。天井石は5枚確認され、玄室内に3枚落ち込み、石室周囲に2枚散乱している。規模は現状で、長さ3.0m、幅0.81mを測り、高さ0.67mを有する。奥壁は石材を立てて鏡石とし、側壁は左右で構築方法が異なり、奥壁に向かって右側は小口に2段以上積み、左側は石材の広口面を使用している。主軸方位はN-12°-Wにとり斜面に並行している。

本石室の現状の高さは0.67mで、側壁の遺存状態などからみてもそれをわずかに上回る程度であろうと考えられる。従って形態的にはきれいな横穴式石室であるが、規模から推して本来的な意味で横穴式石室として使用したか否か疑問がのこる。

(清水 博)

横根支群51号墳

大山沢川の造った沢状地内でも高所の見晴らしの良い位置を占める。標高は429mを測り、西18mには同一等高線上に87号墳が築かれている。

墳形は円墳で、墳丘は人頭大よりやや大きめの礫で築かれている。規模は東西5.4m、南北5.6mを測り、高さは南（斜面下方）から1.5m、北（斜面上方）から0.5mを有する。

内部主体は無袖型の横穴式石室で、天井石はすでに無く羨門部も失っている可能性が高い。規模は、現長2.5mで、幅は奥壁部で0.85m、玄室で1.05mを測り入口方向に広がっている。高さは側壁で0.73mを示す。奥壁は一枚の石を立てて鏡石とし、高さは0.85mを測る。側壁はやや大型の石材を小口積みにし、現状では2段しか遺存しないが、玄室内には側壁に用いたと思われる石材が多量に落ち込んでいる。主軸方位はN-10°-Eにとり、斜面にはば並行している。

(清水 博)

横根支群55号墳

大山沢川の沢底地最奥部から小尾根状に地形変化を示す地点に占地している。標高は437mを測り、本古墳群中でも高所に築かれる一群に属する。周囲には本古墳を囲む様に54・56・88号の各古墳が存在する。

墳形は円形を呈し、墳丘は拳大から人頭大の比較的大きさのそろった礫で築かれている。古墳前面は石垣化し、おそらく開墾時に積まれたものであろう。規模は東西6.0m、南北6.1mを測り、高さは0.6mを有する。

内部主体は無袖型の横穴式石室で、きれいな胴張を示す。天井石が一枚梁門部に落ち込んでいる。天井石及び側壁上端を失うが、右側壁上部最奥部が奥壁に対して隅取をしていることが観察しうるなど、かなり原形を止めているものと思われる。規模は玄室長2.4mで、同幅は奥壁部0.75m、玄室中央部1.1m、玄門部0.77mできれいな胴張を見せている。奥壁は一枚岩を立てて鏡石とし高さは0.5mを測る。側壁は、一段目は大きな石を広口に用い、その上部はやや小さめの石を小口に積んでいる。

この石室の現状の高さは0.5m程度で、側壁の遺存状態などからみてもそれをわずかに上回る程度と考えられる。従って形態的にはきれいな横穴式石室であるが、規模から推して本来的な意味で横穴式石室として使用したか否か疑問がかかる。

(清水 博)

横根支群56号墳

大山沢川の支流にはさまれた南緩斜面上に位置し、標高436mのブドウ園より一段高くなった雑木林との間に存在する。

墳丘は東西8.7m、南北10.5m、高さ南方向から2.1m、北方向から0.75mを測る。西・南と東の半分をブドウ園に削平されているため、墳形は判然としない。構築材は10~20cmの小さめの石が用いられている。

石室は、大型の石を用いた横穴式石室である。長さ3.65m以上、幅は奥壁部で1.3m、中央部で1.4mのやや胴張型を呈し、高さ1.1m以上を測る。天井石は石室内に崩落したものと石室入口部分で確認される。奥壁は二枚の石で、上が広口積み、下が横口積みとなっている。側壁は横口積みで三段が確認できる。側壁の上部や入口の天井石は、最近人為的に割られたような形跡がある。石室の主軸は、N-10°-Eである。

(信藤祐仁)

横根支群61号墳

大山沢川の右岸、川によって形成された微高地状の地形上、標高322m付近に立地する。北側には59・60号墳が隣接する。

古墳は東西長6.4m、南北長7.5mを測る円墳である。高さは北から1.1m、南から0.6mを測り、墳丘下半の遺存状態は良好である。

主体部は天井石がまったくみられず、壁材が露出しており、横穴式石室であることが確認できる。規模は主軸長2.2m以上、石室幅は奥壁で0.6m、中央部付近で0.8m、高さは0.3m以上を測る。石室は南に開口し、主軸をN-24°-Eにとる。奥壁は下半にやや大型の板状の石を広口に立て、その上に小型の石を2段ほど積み上げている。側壁は西側で5列、東側で3列が確認できるだけで入り口部は確認できていない。用材には50~60cmの礫を用い、小口ないし横口に積んでいる。東側壁のプランは直線的であるが、西側壁は胴張を呈する。床面は確認するに至っていない。

(宮澤公雄)

横根支群62号墳

大山沢川右岸の南緩斜面上に位置し、標高326mの雜木林中に存在する。墳丘は東西5.39m、南北5.55m、高さ南方向から1.1m、北から0.2mを測る。構築材には10~40cmの石が用いられた円墳である。石室は、長さ2.4m、幅は奥壁部で0.63m、中央部で0.86m、入口部で0.70mの胴張型を呈する横穴式石室である。石室の高さ0.5m以上を測る。天井石は石室内に崩落したものが2枚確認される。奥壁は1枚石で、側壁は小口積みを主とし三段確認できる。主軸はN-14°-Eにとる。

(信藤祐仁)

横根支群68号墳

大山沢の西側縁部にあたり、八人山山腹との傾斜変更線に近い位置に築かれる。標高は302mを測り、沢出口の低位に集中して営まれている一群に属する。南20mには66・67号墳が並んでいる。

墳丘は削平が著しく、形状・規模は明確にしえない。

内部主体は横穴式石室であるが、これも石室下部が確認されるに止まり、内部には墳丘構築に使用されたと思われる礫が充満している。規模は現状で、長さ3.0m、幅0.9mを測る。奥壁は確認できないが、墳丘との関係から原状に比べてもさほど長くならないものと考えられる。側壁は基本的に横口積みであるが、一部小口に積まれている。主軸方位はN-10°-Eにとり、斜面に対して並行している。

両側壁の外側80cm程には人頭大の礫が石室方向に小口面を揃えて並べられており、石室控積みの基底である可能性も考えられる。

(清水 博)

横根支群80号墳

大山沢川左岸の南緩斜面上に位置し、標高339mの梅畠に存在する。墳丘は東西5.6m、南北7.4m、高さは南から1.9m、北から0.4mを測る。東をブドウ畑、西は道路で墳丘が削平されている。石室は、天井石がほぼ原位置をとどめる良好な遺存状況の横穴式石室である。長さ2.3m、幅は奥壁部で1.01m、中央部で0.98m、入口部で0.7mの台形を呈し、高さ1.03mを測る。天井石は3枚確認され、最大長1.3m、最大幅0.9mの平板状の石を用いている。奥壁は大きめの石が横口積みで2段、側壁はやや小さめの石を4~5段小口積みを主として積んでいる。石室の主軸はN-10°-Eをとる。

(信藤祐仁)

横根支群81号墳

大山沢川左岸、川によって形成された微高地上、標高332m付近に占地している。東側には46・82・83・84号墳が密接している。古墳はブドウ畑の中にあり、墳丘は耕作による削平のためまったく認められない。主体部の用材だけが露出しており、墳形及び墳丘規模は不明である。

主体部は主軸長2.7m、幅0.85m、高さは奥壁付近で0.2mほどを測る横穴式石室である。石室はほぼ南に開口し、主軸をN-20°-Eにとる。奥壁は1m以上ある大塊の石を横口に据えている。側壁についても扁平な大型の石材を横口に積んでいる。石室内には崩落した壁材が落ち込んでいる。周辺にも大型の石材が散乱しているが、前述のように古墳が密集しているため、本古墳の壁材であるのか断定できない。石室内には土や礫が堆積しているため明確ではないが、奥壁・側壁とも基底部のみ残存しているものと考えられる。したがって、床面を確認するには至っていない。

(宮澤公雄)

横根支群82号墳

大山沢川左岸、川によって形成された微高地上、標高333m付近に占地している。81・83・84号墳が密接している。

81号墳同様、ブドウ畑の中にあり削平されているために、墳丘形態・規模については不明である。主

体部は基底部のみが残り、石室長3.2m、石室幅1.1m、現状での高さ0.4mを測る。石室は南西に開口し、主軸をN-43°-Eにとる。奥壁は1mほどの扁平な石を横長に広口積みしているが、石室幅を満たすことができず小型の石を充填している。側壁も奥壁同様扁平な石を横長に広口積みしており、東側壁が2列、西側壁が3列残存している。石室内には1m四方を越えるような大型の石を含む石材が露出している。壁材ないし天井石の一部であると推定される。石室内には土砂や礫が堆積しているが、側壁などの状況から20cmほどで床に至るものと思われる。

(宮澤公雄)

横根支群83号墳

大山沢川左岸、川によって形成された微高地上、標高333m付近に占地している。周囲には82・84号墳が密集している。

古墳はブドウ畑の中にあり、墳丘は耕作によって削平されている。石室の用材だけが露出しており、墳形および規模は不明である。

主体部は全長2.8m、幅1.1m、高さ0.7mを測る横穴式石室であるとすることもできるが、石室南側の入口部分にあたるところに、割られてはいるが扁平な石が立った状態で一部露出しており、箱式棺状を呈する可能性も残されている。主軸をN-45°-Eにとる。天井石が右室内に1枚崩落しており、1.2×0.6×0.3mを測る。石室は側壁、奥壁とも大型の扁平な石を立てて構築している。このような石室形態は隣接する84号墳にもみられる。

(宮澤公雄)

横根支群84号墳

大山沢川左岸、川によって形成された微高地上、標高332m付近に占地している。斜面上方には81・82・83号墳が接するように立地している。周辺の古墳同様墳丘は完全に削平を受けているため墳形・規模は不明である。

主体部は主軸長2.1m、幅1.1m、高さ1.0mを測る。主軸をN-33°-Eにとり、南西に開口する横穴式石室とも考えられるが、壁材の使用方法や入口にあたる南西部に壁材の一部と思われるものが確認できることなど83号墳と共通があり、これらのこと考慮するならば本墳の主体部も83号墳同様、箱式棺状を呈する可能性が高いものと推定される。壁材のほとんどは扁平な大型の石材を広口に立てて用いており、北東・南西壁は2枚、南東壁は3枚の石によって構成されている。石室内の現状で確認できる面が本来の床面に近いものと推定されるが、床面を確認するまでには至っていない。本墳や83号墳に採用されたと考えられる箱式棺状の主体部は、他にはみられない形態である。

(宮澤公雄)

横根支群85号墳

沢状地内大山沢川右岸の、小尾根状に膨らんだ部分の先端に築造され八人山山腹との傾斜変更線に近い。標高は367mを測り、高度的には古墳群のはば中位に位置する。他の古墳からは距離を保つ古墳である。

墳形は円形を呈し、規模は東西5.2m、南北5.4mを測り、高さは北（斜面上位）から0.5m、南（斜面下位）から1.5mを有する。

内部主体は横穴式石室であるが、遺存状態は悪く両側壁の一部しか確認しえず、内部には礫が充満している。規模は現状で、長さ2.1m、幅0.83mを測り、高さは0.35mを有する。主軸方位はN-30°-Bにとり、斜面にやや斜行している。

(清水 博)

横根支群87号墳

八人山東側の南緩傾斜面の2つの沢に挟まれた尾根状地形のほぼ中央、標高429m付近に占地している。東側には51号墳が位置する。

古墳は東西長5.9m、南北長5mを測る円墳である。高さは南側から1.1m、北側から0.3mを測る。

主体部は蓋石は全て失われているが、石室自体の遺存状態は良好である。主軸長3.3m、幅0.6m、高さ0.85mを測る、竪穴式石室を有する。主軸を等高線と並行するようにN-68°-Wにとる。南北両側壁は20~40cmの扁平な石によってやや持送りぎみに小口積みされ、墓体は非常に整然と積まれている。東小口は南側から2/3ほどを大型の扁平な石によって広口積みし、残りを扁平な石によって小口積みしている。西小口は礫が落ち込んでおり、はっきり確認できないが小口積みされているものと思われる。石室は礫で埋まっており、床面の状況を確認することはできない。

(宮澤公雄)

横根支群88号墳

八人山東側の南緩傾斜面の2つの沢に挟まれた尾根状地形の上位、標高440m付近に占地している。斜面上方には55・56号墳が位置する。

古墳は東西長6.6m、北長9.5mを測り、南北にやや長い円墳となる。高さは南から0.9m、北から0.4mを測る。墳丘には比較的小型の礫を用いており残存状況も良好である。墳丘裾には50cmほどの大きさの楕円石が一部に認められる。

石室内に扁平で矩形を呈する天井石が2枚崩落しているのが確認できるのみで原位置をとどめるものはない。石室の入口部および閉塞部は確認できず、全長は明らかではないが、軸長は奥壁より1.4mまで確認でき、幅0.82m、高さ0.7m以上を測る横穴式石室である。石室はほぼ南に開口し、主軸をN-24°-Eにとる。奥壁は板状の用材によって小口積みされており、現状では4段まで積まれているのが確認できる。側壁も奥壁同様基本的には小口積みされている。東側で1列、西側で3列が確認できる。床面は確認されていない。

(宮澤公雄)

横根支群93号墳

八人山山腹の標高401mを測る急傾斜面に築かれる。斜面下方の南12mに92号墳が存在している。

墳形は円形を呈し、墳丘は10~15cm程の礫及び人頭大の礫によって構築されている。規模は東西5.9m、南北6.3mを測り、高さは南(斜面下方)から1.8mを有する。

内部主体は横穴式石室であるが、崩落によって内部に墳丘構築の礫が充満したためか調査部が確認されただけであった。規模は確認部で長さ1.5m、幅は0.8mを測る。主軸方位はN-30°-Wにとり、斜面にはほぼ平行している。側壁は基本的に小口積みで構築され、東壁はよく壊っている。一部では石材を3段積み上げていることも確認され、玄室部分もかなり遺存していることが期待される。(清水 博)

横根支群95号墳

八人山東南斜面、標高431mの山林中に存在する。墳丘東西9.9m、南北9.3m、高さ東から2.1mを測る円墳である。石室は片袖型の横穴式石室と思われ、長さ2.8m以上、玄室部2.4m。羨道部は南で20cm減じるようであり、幅は奥壁部で0.75m、高さ0.75m以上を測る。天井石は石室内に崩落した一枚が確認される。奥壁は広口積みの石の上に小さめの石が乗り、側壁は当古墳群で唯一の割り石を用いた小口積みで、5段まで確認できる。石室は主軸をN-80°-Eにとり、等高線に直交する。(信藤祐仁)

横根支群98号墳

八人山東南斜面、標高446mの山林中に存在する。墳丘は東西5.5m、南北5.6m、高さは南から1.5mを測る円墳である。墳丘の縁辺部には、大きめの石が裾石として配されており、墳丘の遺存状況は良好である。

石室は横穴式石室と思われ、長さ2m以上、幅は0.75m、高さ0.6mを測る。天井石は1.15×0.9mの一枚が確認される。奥壁は広口積みの石二枚で構成され、小口積みを主とした4段以上の側壁となっている。主軸はN-68°-Wにとる。

(信藤祐仁)

横根支群105号墳

八人山東の南傾斜面標高420m付近に立地する。斜面上方には6号墳が近接している。

古墳は東西長6m、南北長4.9mを測り、現状では東西にやや長い円墳となる。残存高南側から1.1m、北側では0mを測る。墳丘上には5~20cmの小さな礫を積み上げており、墳端も一部ではあるが明瞭に確認できる。

主体部は墳頂部分に側壁が一部露出しており確認できる。東西両壁が確認できず全長は明らかでないが、幅0.45m、高さ0.45m以上を測る。墳体の構築方法と主軸方向から横穴式石室であると推定される。主軸を等高線とほぼ並行するように、N-88°-Eにとる。蓋石は確認できず、斜面下方に数枚が散乱している。石室内には礫が崩落しており、石室中央部の側壁が上部で確認できるのみである。側壁は小型の長方形の礫を用材として端正な小口積みとなっている。

(宮澤公雄)

(2) 桜井内山支群

桜井内山支群1号墳

大藏經寺山の西斜面上、標高304m付近に位置する。東には2号墳が近接する。

墳丘は東西長6.9m、南北長6.4mを測る円墳である。高さは南側から1.1m、北側から0.3mを測る。墳丘頂部は削平をされているものの、墳端は良好に造る。

主体部は墳体の上面でのみ確認できるが、主軸長3.2m、幅1.15mを測る横穴式石室である。石室は南に開口し、主軸をN-42°-Wにとる。天井石は移動しているものの、主軸部上に3枚が遺り、1.3×0.6mほどの扁平な石である。側壁は大型の石が小口積みされ、奥壁は1枚石を鏡石として用いている。石室内には天井石や礫が崩落しており、床面を確認するには至っていない。

(宮澤公雄)

桜井内山支群2号墳

大藏經寺山の西斜面上、標高306m付近に位置する。西には1号墳が近接する。

古墳は東西6.3m、南北6.1mを測る円墳である。現存高南から0.8m、北から-0.4mを測る。墳丘西側は墳端が明瞭であるが、東側は墳端がはっきりしない。

主軸部は墳丘を構築した礫の合間から壁材が一部確認できるにとどまっている。主軸長2.8m以上、中央部付近幅0.9mを測る。壁材のあり方から横穴式石室であることが推定される。石室は南に開口し、主軸をN-7°-Eにとる。奥壁は不明であり、主軸長の測定は側壁の確認部分において行った。側壁は西側では明瞭であり4枚が確認できる。東側は入口部付近の1枚が確認できるのみである。側壁は小口ないし横口によって積まれている。天井石はすべて移動されており、発見することはできなかった。床面も確認するには至っていない。

(宮澤公雄)

桜井内山支群 6号墳

大藏經寺山の東側の南西緩斜面上、標高337m付近に位置する。斜面上方北側には5号墳が近接している。

古墳は東側が畠境によってやや不明なもの、東西長7.5m、南北長9.2mを測る円墳である。高さは南側から1.8m、北側から1.2mを測る。墳丘には20~30cmの礫を用いて積み上げており、保存状態は良好と言える。

主体部は奥壁が確認できないものの、全長推定5.1m、幅1.2mを測る横穴式石室を有する。石室は南東に開口し、主軸を等高線と並行するようにN-22°-Wにとる。天井石はほとんどが石室内に崩落しており、1.5×0.6mほどの大きさをもつ。側壁も墳丘上に一部が露出しているのみであるが、小口積みされているようである。入口部付近には石室主軸方向と並行するように細長い礫が配されているようで、閉塞石の一部と推定される。

(宮澤公雄)

(3) 桜井支群**桜井支群 7号墳**

大藏經寺山東の南西斜面上、標高326m付近に位置している。東には6号墳が、南西には8号墳が近接している。

古墳は東西長6.1m、南北長7.5mを測る円墳である。高さは南側から1.8m、北側から0.3mを測る。墳丘は10cm前後の小礫によって構築されており、墳端には一部大型の石を巡らせていている。

主体部は天井石が散逸しており、奥壁、側壁の一部が墳丘上に露出している。主軸長2.95m以上、幅0.95m、高さ0.8m以上を測る横穴式石室と推定される。石室は南東に開口し、上軸をN-12°-Eにとる。天井石は墳丘上と墳丘下に4枚が散乱しているが、矩形を呈している。側壁は奥壁付近と西側入口部付近で上部が確認できるだけであるが、小口積みされているようである。奥壁は大型の1枚石が鏡石として用いられている。石室内には礫が多数崩落しており、床面は確認できない。

(宮澤公雄)

桜井支群 8号墳

大藏經寺山南西斜面、標高324mの山林中に位置する。東には7号墳が近接する。墳丘は東西10.6m、南北11.2m、高さ南西方向から3.2mを測る円墳である。墳丘構築材は10~30cmのやや小さめの石が用いられているが、墳丘中には動かせなかっただけに2m以上もある自然石が組み込まれて利用されている。

石室は、7枚の天井石が原位置を保ち、良好な残存状況を示している。長さ4.85m、幅0.82m、高さ0.7mの細長い石室である。主軸をN-37°-Wにとる無袖型横穴式石室である。天井石は、長さ約1mほどの細長い石7枚が原位置を保ち、一部入口部分に散乱する。奥壁は不明で、側壁は小口積みを主体として4~5段が確認される。

(信藤祐仁)

桜井支群 9号墳

大藏經寺山南西斜面、標高315mの山林中に位置する。

墳丘は、東西5.8m、南北5.3m、高さは南西方向から1.6mを測る円墳である。墳丘はかなりの削平を受けており、構築材としては10cm前後のやや小さめの石が多く用いられている。

石室は、胸張状を呈する横穴式石室である。長さは3.9m、幅は中央部で1.25mを測る。主軸をN-7°-Wにとる。天井石はすべて欠われており、奥壁は平板状の石を広口で立てている。側壁は小口積みと横口積みで2段が確認される。

(信藤祐仁)

桜井支群10号墳

大藏經寺山東の南西急斜面上、標高356m付近に位置する。

古墳は東西長9.3m、南北長9.9mを測る大型の円墳である。高さは南側より2.6m、北側より0.1mを測る。墳丘中央を山道が通り、墳頂部は東西に分断され破壊を受けているが、墳丘の残存状況は良好である。墳丘は10~30cm程度の不均等な疊によって構築されており、墳丘端には裾列石として大型の石を配している。

主体部は西半分ほどが露出しているが、東小口が確認できないため規模は主軸長で西小口より1.85m以上、幅1.1m、高さ0.75m以上を測る竪穴式石室であると推定される。主軸を等高線と並行するようにN-56°-Wにとる。前述のように山道によって中央上半部が破壊されているが、下半部の保存状態は良好のようである。石室には蓋石はまったく遺っておらず、墳端に0.9×0.7mほどの楕円形に近い石が崩落しており、蓋石の一部と推定される。側壁は5~10cmの扁平な石を端正に小口積みないし横口積みしており、やや持送りぎみに積んでいる。西小口も側壁同様、小型の石によって小口積みされている。石室は疊で埋まっており、床面を確認することはできない。

(宮澤公雄)

桜井支群13号墳

大藏經寺山東の南西斜面、標高344m付近に立地する。西には横穴式石室を有する20号墳が隣接する。

古墳は東西長6.5m、南北長7.0mを測る円墳である。現存高南側から1.8m、北側から0.2mを測る。東西の墳端はやや不明瞭であるが、斜面下方の南側は良好に遺っている。墳丘は15~30cmの疊によって構築されている。

主体部は南側の壁のみ上部で確認された。他の壁は確認することはできない。しかし、主軸方向や側壁の積み方などから竪穴式石室であると推定される。確認できる規模は主軸長で1.4m以上を測る。幅・高さについては計測できない。主軸は等高線と並行するように、N-52°-Wにとる。南側壁は5列確認でき、いずれも小口積みされている。現状では上部から2段積まれているのが見える。石室は疊で埋まっており、床面は確認できない。

(宮澤公雄)

桜井支群14号墳

大藏經寺山東の南西急斜面、標高376m付近に位置する。

古墳は東西長8.5m、南北長7.5mを測る円墳である。現存高は南側より1.9m、北側より-0.2mを測り、比較的低墳丘である。

墳丘は斜面上方、北側の墳端が不明瞭であるが、他は比較的明瞭である。10~20cmの疊を用いて構築している。

主体部は主軸長4.1m、幅0.65m、高さ0.65mを測る竪穴式石室である。主軸を等高線と並行するN-68°-Wにとる。石室は一部蓋石が取り去られているが、石室中央部に2枚、西小口上に1枚の蓋石が原位置を保っており、石室内の残存状況も良好である。側壁は小口積みないし横口積みで、6段ほど積まれている。北東側の壁は一部崩落している。西小口は小口積みされており、側壁同様6段積まれている。東小口は北東壁の崩落により一部しか確認できない。

(宮澤公雄)

桜井支群19号墳

大藏經寺山東の南西斜面上、本支群の上位標高380m付近に立地する。斜面上方には15・16・17号墳がみられる。

古墳は東西長6.3m、南北長5.8mを測る円墳である。高さは南側より1.7m、北側より0mを測る。

墳端には50cmほどの石を配し括り石としている。

主体部は墳丘用材が散乱しておりはっきりしないが、東側で3枚、西側で1枚の側壁を上部のみ確認できる。奥壁は不明であるが、横穴式石室であると思われる。主軸長1.9m以上、幅0.7mを測る。石室はおそらく南に開口し、主軸をN-24°-Eにとる。天井石はみられず、上部だけの観察では東西両側壁は小口積みされているものと思われる。

(宮澤公雄)

桜井支群20号墳

大藏経寺山東の南西斜面上、標高344m付近に立地する。東には13号墳がある。

古墳は東西長6.7m、南北長6.5mを測る円墳である。現存高南側より1.9m、北側より-0.2mを測る。やや急斜面上に立地するために斜面下方の南側墳端は一部崩壊している。西側墳端は遺存状態が良好である。

主体部は破壊が著しく、明瞭ではない。西側の側壁5枚と西側の側壁2枚が確認できる。奥壁は不明であるが、横穴式石室であると推定される。主軸長入口部より2.6m以上、幅0.85m、高さ0.5m以上を測る。石室は南東に開口し、主軸をN-42°-Wにとる。側壁は基本的には小口ないし横口積みであるが、一部広口積みもされている。墳丘端には大型の矩形を呈した天井石の一部と思われるものが崩落している。床面は確認するには至っていない。

(宮澤公雄)

(4) 桜井東支群

桜井東支群1号墳

大藏経寺山南斜面、標高326m付近に位置している。西側50mに2号墳が存在している。

墳丘は東西9.7m、南北9.4m、高さは南から2.6m、北から1.2mを測る円墳である。墳丘上は10~20cmの小さめの石を多用して構築している。

主体部は主軸をN-70°-Wにとり、主軸長1.9m、幅0.48m、高さは現状で最大0.43mを測る横穴式石室である。蓋石は扁平な大型の石が兩小口付近に2枚残存しているのみである。兩小口は1枚石を使用している。東小口の裏側は石が抜き取られ、破壊されている。側壁は扁平な石を小口積みと横口積みを併用して構築している。南側壁の裏込め石は拳大の石を充填している。

(保坂和博)

桜井東支群2号墳

大藏経寺山南斜面、標高320m付近に位置している。東側50mに1号墳が存在している。

墳丘は東西9.7m、南北10.4m、高さ南から3.4m、北から0.6mを測る円墳である。古墳の遺存状態は本古墳群中最も良好である。墳丘上は10~20cmの小さめの石を多用して構築している。古墳の縁辺部には大型の石が巡らされている。

主体部は良好な残存状況を示している。主軸をN-30°-Wにとる横穴式石室である。主軸長3.7m、高さ1.0mを測る。幅は奥壁部で0.8m、中央部で1.0mあり、中央部でややふくらむ胴張型を呈すと思われる。天井石は3枚確認されており、奥壁付近の原位置を保つもの、石室内に崩落しているもの、墳丘上に散乱しているものがある。奥壁は大型の石が広口積みで2段積まれている。側壁は横口積みを上として小口積みが若干混じり、4段積まれている。

(保坂和博)

桜井東支群3号墳

大藏経寺山南斜面、標高288m付近に立地し、本古墳群中で最も低い位置に存在している。

古墳はブドウ園の中にあり、墳丘は耕作によって削平されている。石室の用材だけが露出しており、

墳形および規模は不明である。

主体部は主軸をN-16°-Eにとり、現状では主軸長4.4m、高さ0.86mを測る横穴式石室である。幅は中央部1.6m、入り口1.5mを測り、ややふくらむ胸張型を呈すと思われる。天井石は6枚の扁平な大型の石が確認されたが、すべて石室内に崩落しており、原位置を止めるものはない。奥壁は現状では広口積みされた大型の石1枚が確認されている。側壁は比較的大型の扁平な石を用材とし、横口積みを主として現状で2段確認されている。

(保坂和博)

註

- 1) 飯島進ほか 『甲斐の古墳I 甲府北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査』 1974 甲斐古墳調査会

(5) 表面採集遺物

桜井B号墳 (第10図)

この古墳は桜井支群1号墳の北東、4号墳の西に位置していたが、農道建設によって昭和40年ごろ廻滅した古墳である。遺物は昭和30年9月に、石和中学校生徒によって石室内から発見されたものである(当時の指導教官木本俊男氏及び元甲連村長久保寺春雄氏よりご教示)。

鏡は直径7.5cm、厚さ1.5cmの青銅製の珠文鏡である。手擦れのためか、拓本やX線写真でも紋様が不明瞭である。鏡背の内区には、19個の珠文が一列に配されるが付着物のため不鮮明である。珠文帯の外側には、無文帯とそのさらに外側に鋸齒文帯を持つ構成である。X線写真を撮影した鈴木稔氏から、付着物は朱であるとご教示を受けた。勾玉はメノウ製で、長さ2.9cm、不透明な黄褐色を呈し、中に薄くあずき色の縞が入る。

横根支群24号墳 (第11図1・2)

1は須恵器の环の蓋で、推定口径は13.8cmを測る。内外面ともにロクロ成形によるナデ痕を明瞭に残す。胎土は緻密で白色粒子を含み、灰褐色を呈する。2は須恵器の环身で、推定口径13.6cmを測る。内外面ともにロクロナデ痕を残す。胎土は緻密で、灰褐色を呈する。

横根支群42号墳 (第11図3~6)

3~6ともに須恵器の甕の胴部破片である。外面には平行線叩き目、内面にはナデ調整が行われている。胎土は緻密で白色粒子を含み、灰褐色または灰白色を呈する。

横根支群47号墳 (第11図7)

土師器環の胴部である。口縁下に稜を有し、下部にヘラケヅリが看取される。

横根支群73号墳 (第11図8~12)

8は須恵器環の蓋である。外上部をヘラで削り、下部をロクロナデ調整している。9は推定口径11.0cmを測る甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整が行われている。外面には灰緑色の自然釉が付着し、胎土は緻密で黒色粒子を若干含み、灰白色を呈する。10は环身で、推定口径10.0cmを測り、外面ナデ内面ロクロナデ調整をしている。11・12は須恵器の甕の胴部破片で、外面には平行線叩き目、内面には11に当て具の平行線文が見られ、外面に自然釉がかかる。胎土は緻密で白色粒子を含み、灰白色を呈する。

横根支群84号墳 (第11図13~15)

13~15ともに須恵器の甕の胴部である。外面には平行線叩き目、内面には青海波紋が施される。胎土は緻密で白色粒子を含み、灰褐色を呈する。

桜井支群24号墳 (第11図16)

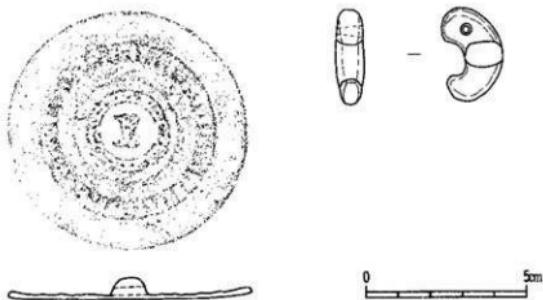
旧採石場の尾根上に位置する、天王社古墳（24号墳）墳丘南側裾部分から発見された甕である。同一個体4点を図上復元したもので、底径は8.4cm、胴部の最大径は25cm位に推定される。外面は胴部から底部付近までハケメ調整の上をナデしており、内面はナデ調整が認められる。色調は橙色で、胎土は密だがもろい。

桜井東支群1号墳（第11図17・18）

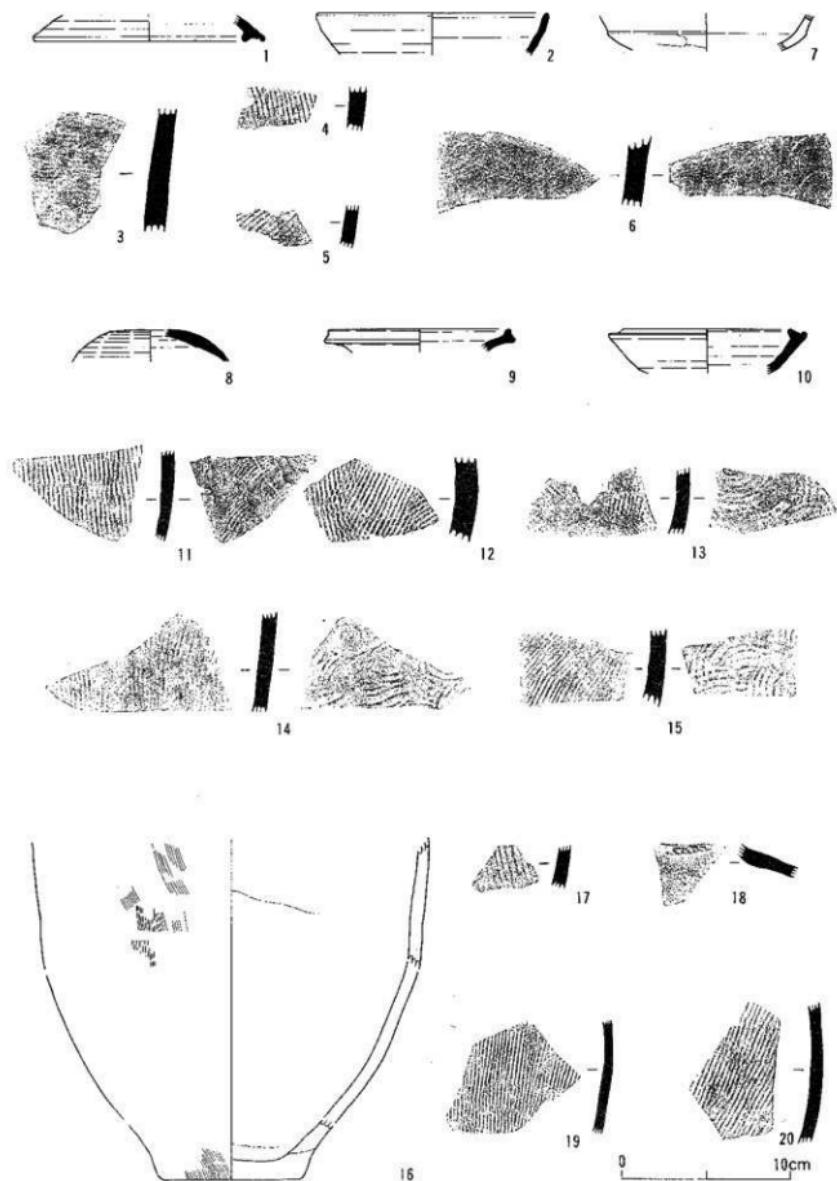
墳丘西南部から発見された。17は須恵器の泰胴部で、頸部と接続する屈曲部の端が確認される。内外面ともナデ調整され、胎土は密で灰黄褐色を呈する。18は須恵器の胴部で、外面は平行線叩き目が施される。胎土は密でにぶい黄橙色を呈する。

桜井東支群3号墳（第11図19・20）

19・20ともに須恵器の泰胴部である。19は外面に平行線叩き目、内面にナデ調整が認められる。胎土は密で、灰白色を呈する。20は外面にナデ調整後平行線叩き目が施され、内面にナデとヘラケズリが認められる。胎土は密で、灰白色を呈する。（信藤祐仁）



第10図 桜井B号墳出土の鏡と勾玉



第11図 横根・桜井積石塚古墳群表採遺物

横根古墳群分布調査一覧表(2)

名 称	現 次	現地番号	現丘位置			現丘位置		現丘位置		現丘位置		石室主軸 (東北)
			X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	下方	上方	前方	後方	右方	左方	
横根 41 号墳	山 林	9.0	7.7	-37565.250	10284.154	301.778	1. -4	0. 8	横穴式	(4.9)	0. 9	N-25°-E
横根 42 号墳	山 林	7.8	7.0	-37565.697	10284.578	309.518	1. -5	0. 5	横穴式	(0.7)	0. 75	(0.56) N-2°-E
横根 43 号墳	山 林	6. 3	5. 4	-37220.718	10284.049	345.937	1. -2	0. 6	横穴式	2. 5	1. 1	0. 85 N-7°-W
横根 44 号墳	山 林	12.0	10. 8	-37560.536	10286.484	207.059	1. 6	横穴式	5. 3	1. 1	1. 14 N-15°-E	
横根 45 号墳	山 林	20. 0	20. 0	-37368.588	10375.274	332.956	1. 7	横穴式				附近石垣く壘る
横根 46 号墳	山 林	6. 7	5. 6	-37106.398	10287.442	461.056	2. 4	横穴式				他の石の墓構の可能性あり
横根 47 号墳	山 林	5. 6	4. 4	-36723.416	10285.416	347.747	1. 2	0. 2	横穴式	(2.6)	2. 4	0. 85 N-10°-W
横根 48 号墳	山 林	6. 0	4. 6	-3758.413	10135.527	425.961	1. 0	横穴式	(0.8)	0. 65	0. 6 N-37°-W	
横根 49 号墳	山 林	5. 7	5. 7	-36761.955	10238.465	426.563	1. 2	0. 5	横穴式	(3.0)	0. 41	(0.57) N-12°-W
横根 50 号墳	山 林	5. 6	5. 7	-36764.721	10138.900	428.503	1. 5	0. 5	横穴式	(2.9)	0. 85	N-10°-E
横根 51 号墳	山 林	8. 4	5. 4	-36734.849	10130.535	430.511	2. 0	0. 35	横穴式			他の石の墓構の可能性あり
横根 52 号墳	山 林	7. 7	3. 8	-36716.456	10129.194	433.231	1. 6	0	横穴式			他の石の墓構の可能性あり
横根 53 号墳	山 林	7. 0	4. 8	-36709.444	10131.741	434.351	1. 15	横穴式				他の石の墓構の可能性あり
横根 54 号墳	山 林	6. 1	6. 0	-36939.551	10143.055	436.831	0. 6	横穴式	2. 4	1. 1	0. 5 N-20°-E	
横根 55 号墳	山 林	10. 5	8. 7	-36934.301	10126.831	436.451	2. 1	0. 75	横穴式	3. 65	1. 3	(1.1) N-10°-E
横根 56 号墳	山 林	9. 4	5. 5	-36544.323	10132.935	446.731	1. 6	0. 5	横穴式			石室斜面石室底
横根 57 号墳	山 林	7. 6	6. 25	-36544.132	10130.109	446.821	1. 9	横穴式				石室斜面石室底
横根 58 号墳	山 林	8. 0	6. 2	-36544.331	10281.643	382.252	0. 9	0. 4	横穴式			他の石の墓構の可能性あり
横根 59 号墳	山 林	7. 0	6. 6	-37366.165	10289.099	326.582	1. 6	0. 6	横穴式			40~50cmより上は乾後の無機質
横根 60 号墳	山 林	7. 5	6. 4	-37362.609	10287.184	323.832	1. 1	0. 6	横穴式	(2.2)	0. 8	(0.3) N-24°-E
横根 61 号墳	山 林	5. 59	5. 8	-37584.323	10274.934	298.760	1. 1	0. 2	横穴式	(2.4)	0. 45	0. 5 N-14°-E
横根 62 号墳	山 林	5. 2	5. 1	-37564.131	10274.731	298.760	0. 6	0. 3	横穴式			石室斜面のみ剥落
横根 63 号墳	山 林	9. 5	7. 9	-37564.662	10258.430	256.739	1. 1	0. 25	横穴式			
横根 64 号墳	山 林	8. 23	7. 68	-37353.831	10259.703	301.308	1. 25	0. 35	横穴式		1. 17	(0.62) N-20°-E
横根 65 号墳	山 林	7. 6	4. 5	-37562.798	10225.102	300.483	1. 1	0. 25	横穴式			
横根 66 号墳	山 林	6. 47	4. 9	-37557.845	10211.762	300.256	0. 7	横穴式				他の石が剥離されていて場所不明
横根 67 号墳	山 林	6. 59	6. 8	-37528.754	10222.614	301.398	0. 75	横穴式				
横根 68 号墳	山 林	6. 6	5. 95	-37528.754	10273.384	309.748	0. 8	横穴式				田邊に東側偏平
横根 69 号墳	山 林	6. 35	6. 1	-37520.533	10254.713	304.398	1. 03	0. 32	横穴式?			中段部主体らしくみみ
横根 70 号墳	山 林	7. 7	5. 5	-37565.652	10278.424	308.018	0. 7	0. 25	横穴式?			天端3枚收斂に斜
横根 71 号墳	山 林	6. 7	4. 7	-37513.115	10273.527	305.518	0. 8	0. 2	横穴式			石室の底面
横根 72 号墳	山 林	7. 3	4. 9	-37543.257	10297.316	261.929	1. 8	0. 5	横穴式	3. 3	0. 95	0. 7 N-6°-E
横根 73 号墳	山 林	6. 8	4. 5	-37548.941	10371.117	258.535	0. 95					
横根 74 号墳	山 林	5. 8	4. 5	-37537.940	10373.725	258.535	0. 95					
横根 75 号墳	山 林	5. 5	5. 1	-37501.938	10387.983	303.445	1. 5	0. 6	横穴式			
横根 76 号墳	山 林	5. 8	4. 85	-37490.214	10412.871	306.100	1. 1	0. 3	横穴式?			
横根 77 号墳	山 林	7. 4	6. 0	-37469.953	10386.309	308.230	1. 0	0. 45	横穴式?			
横根 78 号墳	山 林	6. 3	6. 0	-37421.846	10284.933	318.432	1. 1	0. 5	横穴式			
横根 79 号墳	山 林	5. 6	5. 6	-37272.790	10357.141	335.950	1. 9	0. 4	横穴式	2. 3	1. 01	1. 03 N-10°-E
横根 80 号墳	山 林	5. 6	5. 6	-37292.649	10358.840	333.760	1. 7	0. 45	横穴式	2. 7	0. 45	0. 2 N-30°-E
横根 81 号墳	山 林									3. 2	1. 1	0. 4 N-45°-E
横根 82 号墳	山 林											

名 称	現 状	東西長径 (m)	南北短径 (m)	埋在位置		埋在高さ (m)	石室構造 上方	石室構造 下方	石室具 (m)	石室幅 (m)	石室高さ (m)	石室主軸 (回旋)	備 考
				入道櫛(0)	Y櫛(0)								
横根 8.3号墳	アドウ塚	5.4	5.2	-37106.469	10577.457	333.520	1.5	0.5	2.8	1.1	0.7	N 45° E	石室の基部部の外様子
横根 8.4号墳	アドウ塚	5.4	5.2	-37111.761	10576.201	332.360	1.2	0.5	2.1	1.1	1.0	N 33° E	底盤のみ残存
横根 8.5号墳	山 林	5.0	4.6	-37115.755	10556.219	365.580	1.1	0.5	0.83	0.35	0.35	N 30° E	中空部に主柱感らしき凹みあり
横根 8.6号墳	山 林	5.0	4.6	-37167.319	10572.136	376.570	1.2	0.5	3.3	0.6	0.45	N 45° W	主柱遺存良好
横根 8.7号墳	山 林	5.9	5.0	-36576.394	10177.455	428.473	1.1	0.3	0.82	0.82	0.7	N 34° E	
横根 8.8号墳	山 林	9.5	6.6	-36575.037	10148.016	438.393	0.9	0.4	0.4	0.4	0.45	N 34° E	八山東南鏡
横根 8.9号墳	山 林	8.1	8.1	-37134.143	10078.866	374.400	1.8	-0.6	0.8	0.8	0.8	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.0号墳	山 林	7.3	7.1	-37172.441	10094.512	379.986	8.0	-0.2	3.2	0.6	0.6	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.1号墳	山 林	11.5	9.5	-37193.548	10942.865	405.375	3.2	0.2	0.8	0.8	0.8	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.2号墳	山 林	6.6	6.3	-37134.061	10943.178	394.040	1.5	0.5	0.8	0.8	0.8	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.3号墳	山 林	6.3	5.9	-37219.547	10357.942	542.146	1.8	0.5	0.8	0.8	0.8	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.4号墳	山 林	8.0	7.3	-37225.472	10906.513	406.916	2.1	0	0	0	0	N 30° W	八山東南鏡
横根 9.5号墳	山 林	9.9	9.3	-37145.283	10065.325	406.770	2.1	-1.6	0.75	0.75	0.75	N 49° E	八山東南鏡
横根 9.6号墳	山 林	8.4	8.15	-37154.590	9958.095	430.546	2.6	0.6	0.7	0.7	0.4	N 41° E	八山東南鏡
横根 9.7号墳	山 林	6.55	6.1	-37142.843	9884.649	436.885	2.5	0.5	0.75	0.75	0.6	N 45° W	八山東南鏡
横根 9.8号墳	山 林	5.6	5.5	-37046.949	10932.638	445.625	1.5	0.5	0.75	0.75	0.6	N 45° W	八山東南鏡
横根 9.9号墳	山 林	5.9	5.6	-37077.129	10928.104	447.936	2.0	0	0.75	0.75	0.5	N 24° E	八山東南鏡
横根 10.0号墳	山 林	6.7	6.4	-37116.672	9968.394	481.226	2.3	0	0.75	0.75	0.5	N 30° W	八山東南鏡
横根 10.1号墳	山 林	8.0	7.1	-37191.538	10117.439	345.776	1.6	-0.9	0.75	0.75	0.4	N 41° E	八山東南鏡
横根 10.2号墳	山 林	9.1	7.3	-37376.161	10108.234	343.606	2.0	0	0.75	0.75	0.6	N 45° W	八山東南鏡
横根 10.3号墳	山 林	9.2	9.1	-37375.244	10095.539	346.256	2.6	0	0.75	0.75	0.5	N 24° E	八山東南鏡
横根 10.4号墳	山 林	6.1	6.5	-37348.090	10955.761	378.346	1.0	-0.6	0.75	0.75	0.45	N 35° E	八山東南鏡
横根 10.5号墳	山 林	6.0	4.9	-38565.210	10406.422	426.910	1.1	0	0.75	0.75	0.4	N 32° W	八山東南鏡
横根 10.6号墳	アドウ塚	5.3	4.1	-38689.878	10410.348	413.930	1.1	0.15	0.75	0.75	0.4	N 32° W	八山東南鏡
横根 10.7号墳	アドウ塚	7.0	6.4	-37230.344	10442.664	344.320							

板井跡石冢古墳群内山支群分布調査一覧表

名 称	現 状	標高(m)	東正南偏角(m)	測定位置		地丘高さ(m)	石室構造	石室長(m)	石室幅(m)	石室高さ(m)	石室主軸(度)	備 考
				X座標(m)	Y座標(m)							
板井内山 1 号墳	山 林	6. 9	6. 4	304.197	10819.477	304.140	1. 1	0. 3	横穴式	3. 2	1. 15	N・42°・W
板井内山 2 号墳	山 林	6. 3	6. 1	30726.757	10835.934	306.320	0. 8	-0. 4	横穴式	(2.6)	0. 9	N・7°・E
板井内山 3 号墳	山 林	6. 6	6. 5	-37115.722	10813.795	404.260	1. 5	-0. 5				現在地不明
板井内山 4 号墳	山 林	6. 6	6. 5	-37115.722	10813.795	404.260						現在地不明
板井内山 5 号墳	ブドウ園	7. 6	(4.4)	30726.658	10826.538	341.030	2. 0	0	横穴式?	5. 1	1. 2	N・8°・E
板井内山 6 号墳	山 林	9. 2	7. 5	-37272.613	10815.274	338.260	1. 8	1. 2	横穴式			N・22°・W
板井内山 7 号墳	ブドウ園	7. 8	7. 1			2. 0						風神社境内にて一帯夷平・異性一同露出
板井内山 8 号墳	ブドウ園	5. 5	5. 4			1. 0	横穴式	(2.6)	0. 9	0. 4	0. 4	風神社境内土中に遺存
板井内山 9 号墳	山 林	9. 5	9. 5	-37356.541	10642.174	316.350	1. 5	1. 5	壁穴式?	2. 9	0. 6	0. 4
板井内山 1.0 号墳	山 林	7. 6	5. 8	-38481.854	10613.566	428.050	1. 1	-0. 3	壁穴式?	(2.6)	1. 06	(0.4)
板井内山 1.1 号墳	山 林	7. 6	5. 8	-38481.854	10613.566	428.050	1. 1	-0. 3	壁穴式?	(2.6)	1. 06	(0.4)

桜井横石塚古墳群桜井支群分布調査一覧表

名 称	現 状	現丘高さ (m)	現丘幅員 (m)	現丘位置 (X座標 (m) Y座標 (m))	測丘位置 (m)	測丘高さ (m)	測丘上方	石室幅 (m)	石室長 (m)	石室高さ (m)	石室主軸 (度)	備 考
桜井 1 号 墓	山 林	1.3, 2	1.0, 5	-37137.069 -37046.795	11066.484 11011.195	299.750 323.070	2. 8 2. 3	椭円式			N-74°-W	
桜井 2 号 墓	山 林	5. 6	5. 4	-37046.795 -37511.728	11055.750 11038.090	321.190 316.310	1. 5 2. 1				N-12°-E	
桜井 3 号 墓	山 林	5. 2	4. 2	-37511.728 -37483.716	11043.090 11015.142	336.541 320.541	0. 5 0. 5				N-37°-W	扇形・石室側内充填良好
桜井 4 号 墓	山 林	6. 7	5. 2	-37483.716 -37854.547	11043.090 11015.142	336.541 320.541	0. 5 0. 5				N-32°-W	椭圆形石室
桜井 5 号 墓	山 林	7. 0	5. 5	-37854.547 -37853.110	11043.090 11015.142	336.541 320.541	0. 5 0. 5				N-32°-W	中央部山道で破壊
桜井 6 号 墓	山 林	8. 0	3. 0	-37853.110 -37819.729	11043.090 11016.261	320.541 328.215	1. 8 1. 0	椭円式	(2.95)	0. 95 (0.8)	N-12°-E	
桜井 7 号 墓	山 林	7. 5	6. 1	-37819.729 -37335.527	11043.090 11013.358	320.541 324.375	1. 8 3. 2	椭円式	4. 45 (3.9)	0. 82 (1.25)	N-37°-W	
桜井 8 号 墓	山 林	1. 1, 2	1. 0, 6	-37335.527 -37017.256	11022.771 11022.771	315.439 358.631	1. 6 2. 6	椭円式	4. 45 (1.65)	0. 7 (1. 1)	N-32°-W	
桜井 9 号 墓	山 林	5. 8	3. 0	-37017.256 -37556.170	11022.771 11022.771	315.439 358.631	1. 6 2. 6	椭円式	4. 45 (1.65)	0. 7 (1. 1)	N-32°-W	
桜井 10 号 墓	山 林	9. 9	9. 3	-37556.170 -37610.897	11022.771 11016.682	352.743 352.743	1. 5 1. 5	椭円式			N-56°-W	
桜井 11 号 墓	山 林	7. 1	4. 9	-37610.897 -37830.390	11022.771 11016.682	352.743 352.469	1. 5 1. 0					
桜井 12 号 墓	山 林	9. 5	7. 3	-37830.390 -37512.615	11022.771 11015.971	352.469 346.961	1. 0 1. 8	椭円式	(1.4)		N-52°-W	
桜井 13 号 墓	山 林	7. 0	6. 5	-37512.615 -37511.512	11022.771 11015.971	352.469 376.168	0. 2 1. 9	椭円式	4. 1	0. 65	N-48°-W	
桜井 14 号 墓	山 林	8. 5	7. 5	-37511.512 -37543.407	11022.771 11015.971	352.469 357.218	0. 2 1. 8	椭円式				
桜井 15 号 墓	山 林	6. 9	5. 0	-37543.407 -37488.056	11022.771 11015.971	352.469 359.916	0. 0 3. 0	椭円式				
桜井 16 号 墓	山 林	6. 9	6. 2	-37488.056 -37610.670	11022.771 11015.971	352.469 357.638	2. 3					
桜井 17 号 墓	山 林	7. 1	5. 9	-37610.670 -37358.993	11022.771 11015.971	352.469 354.428	2. 6					
桜井 18 号 墓	山 林	7. 8	7. 2	-37358.993 -37444.853	11022.771 11015.971	352.469 359.741	-0. 2 1. 7	椭円式			N-44°-W	
桜井 19 号 墓	山 林	6. 3	5. 8	-37444.853 -37585.124	11022.771 11015.956	359.741 310.955	0. 0 1. 3	椭円式			N-24°-E	
桜井 20 号 墓	山 林	6. 7	6. 5	-37585.124 -37682.637	11022.771 11015.956	359.741 310.955	1. 3				N-42°-W	
桜井 21 号 墓	山 林	5. 0	4. 1	-37682.637 -37851.072	11022.771 11015.956	359.741 310.955	1. 45					
桜井 22 号 墓	山 林	5. 3	4. 9	-37851.072 -37440.357	11022.771 11015.956	359.741 292.515	1. 45					
桜井 23 号 墓	山 林	1. 1, 3	9. 2	-37440.357 -37138.217	11022.771 11015.956	292.515 217	2. 9					
桜井 24 号 墓	山 林	14. 7	11. 3	-37138.217 -37912.062	11022.771 11015.956	217 250.019	2. 0					

桜井横石塚古墳群東支群分布調査一覧表

名 称	現 状	現丘高さ (m)	現丘幅員 (m)	現丘位置 (X座標 (m) Y座標 (m))	測丘位置 (m)	測丘高さ (m)	測丘上方	石室幅 (m)	石室長 (m)	石室高さ (m)	石室主軸 (度)	備 考
桜井東 1 号 墓	山 林	9. 7	9. 4	-37893.233 -37711.704	11056.259 11495.205	323.769 319.610	2. 6 3. 4	椭円式	1. 9 0. 6	0. 48 (0.45)	N-70°-W	
桜井東 2 号 墓	山 キウイ	10. 4	9. 7	-37711.704 -37912.062	11056.259 11501.545	323.769 250.019	1. 7 4. 4	椭円式	3. 7 1. 6	1. 0 1. 6	N-36°-W	椭圆形石室
桜井東 3 号 墓	山 キウイ										N-16°-E	石室のお腹

第5節 分布調査の課題と問題点

横根・桜井積石塚古墳群は、甲府市東端の大藏經寺山南西斜面と、八人山南東斜面に挟まれた大山沢川による開削扇状地を中心として営まれている。この古墳群は1974年にその内容が明らかにされ、墳丘・石室などの実測図が公にされた。その後1981年には「古代の山梨を知る会」による分布調査が行われ、続いて1983年には、甲府市教育委員会が横根・桜井地区の積石塚古墳群の総合的な保存活用事業の一環として、詳細分布調査を山梨県考古学協会に委託して行った。さらに1991年には再度確認・補充調査を実施し、1/2,500の積石塚分布図及び古墳一覧表の作成、古墳番号の確定等を行った。

その間、1985年には山梨学院大学が横根支群39号墳の発掘調査を行っている。また1979年には春日居町に所在する符原塚3号墳において、積石塚古墳としては県内初の発掘調査が実施され、また1984年には接井東支群より尾根を越えた大藏經寺山南東斜面に所在する大藏經寺山15号墳が発掘調査を受けるなど県内に所在する積石塚古墳にも徐々に調査の手が及んでいる。

1. 規模と石室構造

今回の分布調査によって確認された古墳数は総数145基を数えた。支群毎の内訳では、横根支群107基、桜井内山支群11基、桜井支群24基、桜井東支群3基である。それらの詳細は、別掲の一覧表に詳しいが、ここではその概要をまとめてみたい。

(1) 墳丘・墳形などについて

①墳丘の構築について

本古墳群の最大の特徴は、墳丘の構築を石材によっていることである。墳丘構築に使用された石材は拳大から径60cm程の円礫であるが、平均的には人頭大のものが多く、また各古墳毎に大きさのそろったものを選択している傾向が認められる。本古墳群の営まれている山地一帯は、地質学的には新第三紀鮮新世の火山活動によって形成された水ヶ森複輝石安山岩、同火碎岩類の分布地帯であり、特に横根支群が集中して占地する大山沢川の扇状地には、それらに由来する扇状堆積物が厚く堆積している。また八人山山腹には、火山性堆積物が露出してガレ場状を呈する箇所が多い。從って墳丘構築材に関しては、「土」を求めるよりは、「石」入手する方が容易な地域といえる。

②墳丘規模について

墳丘の規模は、最大のものでも桜井支群1号墳の13.2mで、横根支群44号墳の12mがそれに続いている。これら2基を含め、径10m以上を測るものは10基（横根支群1・19・39・44・56・91、桜井支群1・8・23、桜井東支群2号墳）である。逆に墳丘規模の小さいものは、横根支群3・72、桜井支群21号墳の3基が径5m以下で、他はすべて径5~10mの範囲に含まれる。ちなみに各支群毎の平均墳径は、横根支群7.13m、桜井内山支群7.44m、桜井支群7.63m、桜井東支群10.05mとなる。わずかに横根支群の劣勢がうかがえる程度である。しかし今後の検討によって支群内部の小グループ間の格差を確認しうる可能性が強い。また、径10m以下の規模の古墳を含む小支群が、横根・桜井古墳群全体の縁辺部に占地しているように見受けられる。

③その他

また横根支群39号墳の発掘調査報告でも指摘されているように、墳頂部を大きな石が巡っている古墳が15基（横根支群29・30・31・33・34・35・39・42・44・62・78・90・98・104、桜井東支群3号墳）確認された。そのうちの9基は、中込氏宅北の横根支群への入口にあたる低い位置に築かれた古墳に集中している。尚、横根支群6・7・22号など列石が認められない古墳においても、墳丘裾部に比較的大

きめの石を選択して利用している傾向がうかがえる。

(2) 内部主体について

今回の調査で内部上体を確認したものは86基にのぼったが、残り59基については確認できなかった。確認したもののうち、堅穴式石室は、その可能性のあるものも含め19基、横穴式石室は同63基である。横根支群83・84号墳は、組合せ式箱式石棺系のものであろう。横穴式石室にあっても横根支群34号墳に代表される玄室長が1.5mに満たず、同高さの推定値も1mに達しない古墳（横根支群21・28・34・42・49・88号墳）については堅穴式石室と同様の使用方法であったと考えられる。また胴張を有する横穴式石室とされる横根支群55号墳についても、玄室高が0.5mを僅かに上回る程度と思われ、本来的な横穴式石室としての内部空間を確保したか疑問である。

①堅穴式石室

19基の石室が確認され、以下の5種に分類した。なお横根支群35号墳については、2基の堅穴式石室を持つ可能性も指摘されている。

A類 側壁に板状の礫を選択し、小口積みに構築したもの。小口側を小口積みにしたものをA-1類、小口側に一枚石を用いたものをA-2類とした。

B類 側壁に礫の小口、広口の両者を用いて構築したもの。A類に比べやや粗いつくりである。これも小口側のつくりによってB-1、B-2類とした。

C類 箱式石棺状のものである。

A-1類は横根支群87・96、桜井支群10号墳の3基である。

A-2類は横根支群5、桜井東支群1号墳の2基である。

B-1類は桜井支群14号墳1基である。

B-2類は横根支群6・7・8・22・35・43・99号墳の7基である。

C類は横根支群83・84号墳の2基である。

横根支群91・92号墳については、堅穴系石室であることは確実と考えられるが詳細については視認できなかった。横根支群105、桜井支群13、桜井内山支群11号墳の3基は小口側を確認できないが、前者はA類、後者はB類であろう。また横根支群28号墳も堅穴式石室とすればB-1類である。

ところで、横根支群22号墳については一方の小口側が三角形状を呈する石材を用いており、天井石が合掌型に架設された可能性を僅かに残している。橋本氏の指摘された横根支群25号墳は当墳にあたるものと考えられる。また、横根支群5・6・35、桜井東支群1号墳は東小口側が西側のそれよりも広く、埋葬頭位を暗示するものであろうか。7号墳についてはその逆となっており、唯一の例である。また4号墳についても、後述するように主軸方位が斜面に直交しており、横穴式石室と考えたが、規模・側壁の構築方法など箱式石棺系のものとなる可能性も残る。

古墳群の中での分布状況は散在する傾向を示すが、相対的に古式を示すと考えられるA類が古墳群中でも高所に位置している。また扇状地中央の標高390mから424mの緩傾斜面に占地する一群（横根支群6・7・8・105・106号墳）がほとんど堅穴式石室を内部主体としていることは注目される。更に横根支群6号墳をほぼ同高度に東へ進んだ桜井内山支群11号墳、また横根支群8号墳を同じく西へ進んだ同5号墳も堅穴式石室であることは興味深い。

②横穴式石室

今回横穴式石室と確認された古墳は63基であるが、規模を一部でも計測できたものは48基であった。石室の崩壊、崩落等のため推定値ではあるが、石室長を基準に3m以下、3~5m、5m以上を測るもののが3種に分類した。

《3m以下》横根支群4・9・15・21・28・30・33・34・36・41・49・51・55・61・62・64・80・81・85・98号墳、桜井支群7・19・20号墳の23基である。なかでも、横根支群4・21・28・34・42・49・88、桜井内山支群2号墳、桜井支群19号墳の9基は全長が2mに達していないか、玄室長が1.5m以下の石室である。

《3~5m》横根支群1・2・16・20・23・24・26・27・29・38・41・50・56・68・73・82号墳、桜井支群8・9号墳、桜井東支群2・3号墳、桜井内山支群1号墳の計21基である。

《5m以上》横根支群14・39・44号墳、桜井内山支群6号墳の計4基である。

石室の平面形態では、横根支群95号墳が片袖型石室の可能性を示すのみで他はすべて無袖であった。また、その程度に差はあるものの横根支群23・26・29・55・61・62・80、桜井東支群2、桜井支群9号墳の9基が胴張型石室であった。桜井支群の2基と横根支群高位に占地する55号墳を除くと、比較的にまとまりのある分布をみせ、大山沢川右岸の横根支群61・62号墳、中込氏宅北の緩傾斜面中の横根支群23・26・29号墳の三か所に遍在している。内部に胴張型石室をもつグループと、もたないグループの両者が存在している。

先程も述べたように、今回は分布調査であったため各石室のごく一部を観察したにすぎない。そのため、ここで石室の用材、構築方法等について言及することは早計ではあるが、ここでは奥壁の構築方法によって3種に大別した。

A類 奥壁に鏡行が用いられるもの。

B類 奥壁を広口あるいは横口に積み上げるもの。

C類 奥壁を広口及び小口積みにするもの。

A類 横根支群2・4・15・21・38・41・50・51・55・62・73号墳、桜井支群9号墳、桜井内山支群1号墳の13基

B類 横根支群16・20・23・24・28・30・34・44・49・56・64・80・81・82・98、桜井支群7・8号墳、桜井東支群2・3号墳、桜井内山支群5号墳の20基

C類 横根支群9・14・26・29・88号墳の5基

以上であるが、石室規模で分類のように横根支群21・28・34・42・49・88号の各古墳については規模等から二次葬が不可能と思われ、本来的な意味での横穴式石室とは考えにくい。これら特に規模の小さいものについては、D類として別個に扱える可能性もある。

また石室全体の構築についても、横根支群14・39号墳のように板状ないしは小型の角礫を選択的に使用するもの、横根支群1・29号墳のように大型の石を用いる等の相違が認められ、更に側壁基部1~2段を広口ないし横口積みとし上部を小口積みとするもの（横根支群55号墳）、小口積みと広口積み両者が混在するもの（横根支群24・62号墳）、広口積みを基調とするもの（横根支群56・82号墳）、などがあり、より詳細な観察が求められよう。

横穴式石室の内部形態からみた分布状況はA類が古墳群高位に集中する傾向が認められる以外は、特定の石室形態が集中する傾向は顕著には認められない。多様な形態が各支群中に散在するものと考えられる。

(3) 石室の主軸方位について

從来から指摘されていたように、本古墳群では竪穴式石室は東~西方向に、横穴式石室は南~北方向に主軸をとるものが主体をしめている。

横根・桜井古墳群は甲府盆地北縁山地の南向斜面に営まれているため、南~北方向に主軸をとる場合、必然的に等高線に直交し、その逆にとる時は並行することとなる。すなわち横穴式石室の場合、基本的

に等高線と直交し、竪穴式石室の場合は並行して構築されている。また横穴式石室についてみると、8割以上がN-30°～EorWの範囲に入っているが、その範囲をはずれているものについても地形的には等高線に直交している。

19基確認された竪穴式石室のうち、等高線に直交して主軸をとるものは、横根支群43・91・92号墳の3基である。箱式石棺とした横根支群83・84号墳も等高線と斜行して主軸をとっており、箱式石棺の可能性が残るとした横根支群4号墳は等高線と直交した主軸をとる。

一方、横穴式石室についてみると、等高線に直交するグループ、並行するグループ、及び斜交するグループに分けられる。

《等高線に直交する古墳》 横根支群1・4・13・20・21・24・26・36・42・50・51・55・62・67・73・81・88・98号墳、桜井内山支群2号墳、桜井支群7・19号墳

《等高線に並行する古墳》 横根支群14・28・34・48号墳、桜井内山支群1・6・9号墳、桜井支群9・18号墳

《等高線に斜交する古墳》 横根支群2・3・15・16・18・23・29・30・31・33・37・38・39・41・44・49・56・58・61・68・70・75・80・82・83・84・85・93・95・107号墳、桜井内山支群5号墳、桜井支群1・8・20号墳、桜井東支群2・3号墳

ところで、等高線に斜行するグループは、20°～30°の範囲で西あるいは東へ振れている。第3～9図は、主軸方位を示したものであるが、一瞥して主軸を西へ振るものと、東へ振るものとのグレーピングが可能である。特に中込氏宅の北で標高294～320m付近までの大山沢川東側緩傾斜面に存在する一群についてはその傾向が顕著である。すなわち低位から観察すると、まず西へ主軸を振る横根支群21・36号墳のグループが占地し、次いで東へ主軸を振る横根支群29・30・31・33・34号墳のグループが構築されている。その高位には、再び西へ主軸を振る横根支群16・18・19・20・21・23・26・27号墳のグループが占め、さらに高位には東へ主軸を振る横根支群13・15・17号墳のグループが認められる。同様の傾向は、横根支群中位に密集して存在する横根支群81～84号墳のグループにも認められ、更に横根支群最高位に占地する一群3・49・50号墳でも確認できる。横穴式石室を内部主体とする古墳については、主軸方位の振れによって一定線の支群の分類が可能であると考えられる。

2. 各支群の状況

今回確認された古墳数は145基で、古墳番号、位置等に若干異同があるものの、これまで確認されてきたものとはほぼ同様であった。また、従来は横根・桜井古墳群中には2基の盛土墳を含むものと考えられていた。しかし、その2基の盛土墳は分布域を異にし、積石塚古墳群の分布域をおさえる様に谷の入口に占地している。

このように横根・桜井古墳群の本体は純粋な積石塚古墳群として扱えられるが、その平面的な分布は従来からいくつかの支群によって構成されていると認識してきた。その支群名からもわかるように、大山沢川が開削した扇状地上から八人山南西斜面に営まれてきた横根支群と、大藏經寺山南東斜面に築かれた桜井支群とに大きく分けられてきた。横根支群は4～5の小支群によって、桜井支群は3の小支群から構成されているものと把握され、更にそれぞれの内部に3～5基程度を基本とする小グループが存在するものとされてきた。しかし、古墳群中にあって発掘調査が実施された古墳は僅か3基ということもあり、これまで確認された古墳群の内容は非常に貧弱なもので、その見解は必ずしも一致していない。

ここでは、まず本古墳群を占地上の地形的特徴によって大まかに支群として扱い、今回の調査によつてえられた新たな所見によって各支群の内容を検討してみたい。なお、以下、横根支群については古墳

番号のみを、他の支群については支群名・古墳番号の両者を併記して記述する。

まず、八人川南東斜面で確認された18基の群〔A群〕であるが、これを一支部とすることについては大方の一一致するところである。これは4ないし5のグループに細別しうる。この支群では96・99号墳と高所に築かれたものに堅穴式石室が採用されている。また91・92号墳も堅穴式石室を内部主体とする可能性がある。横穴式石室では、39・95号墳が等高線と並行に主軸をとり、93・98号墳が直交して主軸をとっている。95号墳は本古墳群中、唯一、片袖型石室を採用している。また39・91号墳は両者とも11mを越える径をもつ大型の古墳である。

大山沢川は標高400mを越える地点で二本の支流に分かれるが、その両者にはさまれた様に営まれる一群〔B群〕がある。このB群も2~3のグループに細別できる。合流地点やや上部に営まれたグループ、標高426mより高位に南北に並ぶグループ、及び87・51号の2基からなるグループである。この支群では主軸方位によってのグループの特徴を確認することができる。第1グループに含まれる1・55・56号墳は東へ、第2グループに含まれる2・3・49・50は西へ各々主軸を振っている。尚、後者に含まれる4号墳は箱式石棺系の内部主体となる可能性もある。この支群のうち55号墳は胴張型石室を採用し、4・87号墳は主軸方位が等高線に並行する堅穴式石室を採用している。また1・56号墳は径10mを越える規模である。

次いで、標高400m前後に散在するグループ〔C群〕がある。これには桜井内山支群11号墳をも含めた。このグループは内部主体の不明な106号墳を除くと全て堅穴式石室を内部主体とするグループである。5・6号墳は東側小口部が広く、頭位を示すものと考えたい。また確認しうる範囲で全て小口部が一枚石を用いており、5号墳以外は側壁の造りは粗い。

C群の下位、標高330m程に集中する一群〔D群〕がある。これも、小尾根状の高地を縦に並ぶ1グループと、その東に密集する1グループに分けたい。前者のうち、9・80号墳は胴張を有する横穴式石室を内部主体とし、後者に含まれる83・84号墳は箱式石棺を内部主体としている。またグループ内でやや離れて築かれる107号墳は石室主軸を大きく西へ振っていることも注意される。

このD群の対岸のやせ尾根状の地域に8基からなる1群〔E群〕が存在する。このE群は下位に集中するグループと、他に散在する4基のグループに分けられる。下位に集中するグループ中、61・62号墳は共に胴張をもつ横穴式石室を内部主体とし、石室方位もほぼ同一にとっている。43号墳は等高線に直交する主軸方位をもつ堅穴式石室である。

E群を更に下って、大山沢川の造る扇状地がようやく傾斜をゆるめる地帯に17基からなる一群〔F群〕が位置する。この一群も幾つかの小グループに分けられるようであるが、明確にはしえない。44号墳は本古墳群中、最大規模の径12mを測る古墳で、他も38・41・64・65号墳など径8~9m台の古墳が多い。本群は確認されるうちでは唯一堅穴式石室を有しないグループであり興味深い。

F群の対岸は、本古墳群の中でも最も古墳が集中する地域で、G群として分類したい。本群も6~7のグループに分けられる可能性が強く、特にB群同様、主軸方位によってグルーピングが可能と思われる。本文群中の高所は、小尾根状に張り出しているが、その上には12~15・79号墳が占地している。このグループは径8~9mの比較的大きな古墳が集中している。14号墳は等高線に対して主軸を完全に並行させる数少ない一例である。このグループの下方には石室主軸を西に振るグループが存在し、その下方標高300~320mにも主軸を西へ振る一団が存在している。第2グループ中、23・26号墳が、第3グループ中、29・30号墳は胴張を持つ石室である。22・35号墳は堅穴式石室を内部主体とし、後者は東側小口が広く造られている。横根支群の占地する扇状地の東縁部山腹に桜井内山支群が占地している。2~3基からなる4グループに分けられる。径10mを越える規模の古墳は存在していないが、6・9号墳は9mを越えるものである。F群と同様、堅穴式石室は確認できなかったが、9号墳は堅穴系とも呼びうる

石室を有しており注意が必要である。尚、竪穴式石室を持つ本支群11号墳は他の古墳と離れて営まれており、C群に属するものと考えたことは前述した通りである。

桜井内山支群から尾根を越えた大歳經寺山の南山腹に桜井支群が存在する。本群では1・8・23号墳が径10mを越え、10・12号墳は9mを越える規模である。前三者は支群中でも低位に営まれている。竪穴式石室を内部主体とするものは、10・13・14号墳であるが、これらは支群中でもやや高位に築かれている。この支群の横穴式石室は、19号墳を除くと全て等高線に並行して西へ大きく半軸を振っており、特に1・9・18・20号墳などは顕著である。成いは、横根支群を意識したものであろうか。この支群は継続的に散在しているが、5～6の小グループに分けられる可能性が強い。また同等高線上に、例えば21・22、4・9、6～8、13・20号墳の様に2～3基が並んで営まれていることも考えられる。

この桜井支群を更に東へ進むと、本古墳群の東辺を画している桜井東支群に至る。この桜井東支群は3基からなり、墳丘規模が確認できる1・2号墳は共に大きな規模の古墳である。内部主体は竪穴式石室1基、横穴式石室2基であるが、後者は2基とも胸張を有する可能性が高い。

3. 今後の課題

最後に今回の分布調査の若干のまとめを行いつつ、今後の課題を抽出してみたい。

今回、横根支群をA～Gの7群に分け、桜井内山、桜井、桜井東の各支群を加え、10支群に分類し、各支群内部もいくつかのグループ化を試みた。しかし、現状では分布調査の成果及び、僅かな発掘例からの推論であることは言をまたない。

(1) 墳丘構築について

本古墳群は名称が示すとおり積石塚古墳群であり、墳丘構築は全て積石によっている。しかし、本古墳群の占地する扇状地の出口をおさえるように横根山田古墳、村内1・2号墳など数基の封土墳が知られ、桜井内山支群3号墳東の尾根上には、古墳群を見おろす位置に墳径14.7mを測る天王社古墳が占地している。また分布調査担当者の所見によれば、桜井東支群1・2号墳は土石混合墳であるとされる。

ところで、これまで実施された積石塚古墳の調査例をみても、墳丘を断ち割ってその断面を観察、調査した例は比較的少ない。朝鮮半島における積石塚古墳の例をみても、その墳丘構築法はさまざまであり、各々歴史性、地域性をもっている。日本列島においても葺石や内部主体の控積みとの関連にも言及されることもあり、また積石塚、土石混合墳などと分類されることからも窺えるように、その墳丘構築法は決して一様ではない。構築石材の選別、墳丘縁部あるいは墳丘内部における石止めのための列石の有無、石室構築との関連等、今後、その詳細を観察、検討しなければならない課題が多いといえよう。

(2) 石室の選択について

横根支群C群において、竪穴式石室のみが選択されている事を除くと、各小支群毎に特定の内部主体の種別について指向性を持っていない。これは、先学諸氏の指摘⁹⁾にある通り、内部主体の差異が古墳群〔造墓集団〕の構造的な相違を示すよりも、むしろ時代差を反映していると考えられる。すなわち、ある程度の時間差は持つものの、複数の支群が同時併行的に形成されたことの頗われと思われる。今回のまとめの中では簡単にしか触れることができなかったが、内部主体については、より詳細な分析が必要となる。まず竪穴式石室については側壁及び小口部の構築方法の違い、石室の規模及び長短軸の比率の検討が待たれる。また横穴式石室についても、石室規模、主軸方位、側壁、奥壁等の構築方法など多くの課題が残っている。更に、一般的に竪穴系といわれる数次的な埋葬が不可能と考えられる小規模な横穴式石室の位置付けなども必要となろう。

(3) 石室の主軸方位について

石室の主軸方位については、特にB群・G群・桜井支群等において、主軸方位を基準にグルーピングが可能ではないか、という指摘をした。本古墳群のように幅のせまい横穴式石室の場合、その主軸方位は、すなわち埋葬頭位を示すものと解釈してさしつかえないであろう。とすれば地形的な条件に制約されつつも、ほぼ同方向の埋葬頭位を探り、かつ隣接して営まれることは、その相互間に共通した埋葬儀礼を有することがうかがえる。主軸方位の検討、分析、古墳間の隣接関係などによって、古墳群内部の小集団の抽出が一定程度可能ではないかと考えられる。

(4) 墳丘規模等について

今回の調査の結果、墳丘規模が径10mを越えたものは、11基（横根支群1・19・39・44・56・91・110、桜井支群1・8・23、桜井東支群2号墳）であった。これらのうち、横根支群19号墳を除くと他は本古墳群の周辺部に位置する古墳である。また内部主体との関係では、不明の3古墳（横根支群19・91、桜井支群23号墳）を除くと全て横穴式石室を採用している。

また横根支群39・44、桜井支群1号墳のように丁寧な小口積みの整った石室である例が認められる。

(5) 年代観について

本古墳群において、遺物等によって年代観に言及しうるものは、横根支群39号墳、桜井B号墳の2基である。

桜井B号墳からは、勾玉及び珠文鏡が採集されている。珠文鏡は径7.5cmで、素文縁、鋸歯文帯、素文帯、二重円闇、珠文帯の文様構成をとるものである。勾玉はC字形態をとる瑪瑙製で片面穿孔によっている。この古墳は今回の調査によって径10~13mを測る墳丘規模を持ち、横穴式石室を内部主体とすることが明らかにされた。本古墳の年代については珠文鏡の検討などから、絶対年代をいつにおくかについては、5世紀代から7世紀代まで、先学諸氏による様々な解釈が提出されている。¹⁰発掘調査、他古墳との比較などを待たねばならないが、少なくとも本古墳群の中では、初現期の古墳であることはまちがいがない。

横根支群39号墳は発掘調査が実施され、副葬品の検討から6世紀代の中頃におかれている。39号墳は前墳でも述べたように、大型の墳丘を持ち、小口積みの整った横穴式石室を持つ古墳である。本古墳群の他の横穴式石室と比較しても先行するものと考えられ、古墳の位置、墳丘規模、石室構築法など桜井支群1号墳と似かよった点が認められ、共に本古墳群形成期のものと考えられる。

横根・桜井積石塚古墳群の年代観については、豊穴式石室の変遷、盆地内横穴式石室との比較など過去幾つかの検討がなされている。今回の調査では、新たな解釈を提示しうる余地はないが、石室形態、構築方法の比較検討、墳丘規模、古墳占地の問題、主軸方位の解釈などによる、小支群あるいは、その内部におけるグループの抽出などを通じて、各支群の形成、変遷などを追求する糸口となりえるものといえる。それは更に各支群相互の比較を通じて、古墳群全体の形成、發展の過程や、古墳群の構造分析及び、造営集団全体の構造や変遷を探ることにも通じよう。

4. 研究の課題

最後に今回の分布調査にたずさわった「感想」を述べてみたい。

まず、從来、積石塚古墳をとりあげた場合、特に盛土墳との関係から「被葬者」の性格が問題とされてきた。積石塚古墳が朝鮮半島に多く認められることから、その起源を大陸に求める説—「渡来人墳墓説」と積石塚が織多い地域に築造される例が多いことから、自然環境によって墳丘構築材を石に求め

たとする「環境自生説」が対立していた。前者は、さらに合掌型石室など古墳の内部上体構造にも言及し、特に信濃においては、渡来人の移住など文献史学の面からも検討されている。

山梨県内にあっても、積石塚古墳の成立に関して、この二説が併立している。文献に記されている高麗人、百済系の瓦から推定される渡来人系技術者集団の存在などから前者を探る説、文献などに記されている渡来人の居住推定地域と、積石塚の分布範囲がずれていること、積石塚がそれ以前から継続して営まれている伝統的集団の後背地に占地していることなどから、後者を探る説とに分かれている。

ところで、積石塚という埴丘構築方法を採用する要因は、渡来人に因るものと、環境に因るものだけなのであろうか。日本列島における葬送儀礼の中からは積石塚は生まれえないものなのであろうか。埴丘や石室の様式や構築方法は、朝鮮半島の積石塚と日本列島におけるそれとは、文化的、技術的に全て同系列のものとしてあつかってよいのであろうか。例えば、朝鮮半島における積石塚といつても、多様な埴丘構築方法がある様に、日本における積石塚もヴァリエーションを分析するべきであろう。その上で、それぞれの独自性と共通性を見い出し、朝鮮半島におけるどのようなタイプの積石塚と日本列島におけるどんなタイプの積石塚とが関連性があるのかを検討する段階に入っているのではないだろうか。

多分に舌たらぎの「感想」になってしまったが、全ての積石塚の成立要因を一般的論に結論づけるのではなく、先ず、積石塚古墳を「古墳」として資料分析を行い、かつ各地域における歴史的・文化的条件の中でその成立、性格などを検討すべきであろう。
(清水博)

註

- 1) 飯島 進ほか「甲府北東部に於ける積石塚・横穴式古墳の調査」『甲斐の古墳I』 甲斐古墳調査会 1974
- 2) 坂本美夫「横根・桜井積石塚古墳群分布調査概報」『山梨考古』9号 山梨県考古学協会 1983
- 3) 野沢昌康ほか『笛原塚3号墳—積石塚の調査—』 春日居町教育委員会 1979
- 4) 田代 茅ほか『大藏経寺山第15号墳—積石塚古墳の発掘調査報告書一』 山梨学院大学・石和町教育委員会 1984
- 5) 従来唱えられてきた支群分類は、横根西・同東・桜井西（桜井逍遙院）、桜井東の四支群に分類呼称していた。今回の調査では、それぞれ、その占地名に因って、横根西→横根、同東→桜井内山、桜井西→桜井、桜井東→桜井東と分類呼称した。
信藤祐仁「横根・桜井積石塚古墳群における一考察」『歴史手帖』13巻-1号 1985
- 6) 河西 学 本報告書 第I章参照
- 7) 橋本博文「後期古墳と積石塚」『甲府市史通史編第1巻 原始・古代・中世』 甲府市役所 1991
- 8) 清水 博「横根・桜井古墳群について—分布調査の成果を中心にして—」『山梨考古』14 1984
橋本博文 前掲論文
- 9) 橋本博文 前掲論文
坂本美夫 前掲論文
- 10) 飯島 進ほか「横根積石塚の調査」『甲斐の古墳I』 甲斐古墳調査会 1974
橋本博文「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性』 雄山閣 1984
- 11) 小林広和「甲斐国積石塚の諸問題」『甲斐の古墳I』 甲斐古墳調査会 1974
- 12) 坂本美夫「山梨県の積石塚と笛原塚3号墳の位置」註3) 報告書
- 13) 大場磐雄「信濃國坂井村の積石塚に就いて」『信濃』II-56 1947
一志茂樹「信濃と越とを結ぶ古代の幹線」『信濃』III-15-10 1963

- 大塚初重「長野県大室古墳群」『考古学集刊』4-3 1969
 桐原 鍵「諏訪盆地古墳群にみられる一姿相」『信濃』III16-10 1961
 14) 斎藤 忠「屋根形天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』34-3 1944
 15) 橋本博文 誌8)論文
 16) 坂本美夫「先史時代・古墳時代」『春日居町誌』 春日居町 1987

第6節 保存活用に向けて

横根・桜井積石塚古墳群のこれまでの調査は「調査と保存対策をめぐる経過」の項にみるように、大部分が民間の研究団体や保存団体のボランティア活動として実施されてきた。今日、古墳群の全容が知られているのは、こうした人々の熱意と努力の結果である。また、この地域をめぐってはゴルフ場の計画や温泉掘削による療養機関建設計画、12メートル道路計画など、いくつかの開発計画があらわれては消えていった。民間団体の保存運動がなかったとしたら、いま残されている古墳の何割が現在に姿をとどめていることであろうか。実際に、考古学専門家として最初に古墳群を確認した故飯島進氏は、確認以来山梨県考古学研究会の手で分布調査が行われた1983年までの間に、保存状態のよい古墳が多く姿を消してしまったとのべている。

1981年に古代の山梨を知る会が分布調査を行って約70基を確認したのは、その年に明らかになった横根地区の共有林の開発計画への対応が急がれたためであった。これにつづいて1983年に山梨県考古学協会が行った分布調査は、かなり大規模な学術調査であった。1月から4月にかけて、毎週末に協会員が横根の中込茂樹氏宅に集合しては、何所かに別れてやぶのや中や急な斜面をはいまわって1基また1基と発見し、あるいは確認していく。1基の古墳が見つかるとその清掃に数時間かけ、さらに測量や写真撮影、そして最後には確認したすべての古墳に市教委の用意した金属製の標識板を立ててまわるという根気のいる作業であった。中込茂樹氏は、ご自身の所有地内に數十基の積石塚古墳が存在する事もあって、1981年の調査以来古墳群の調査と保存に情熱を燃やしており、桜井地区の久保寺春雄氏とともに市教委の保存策検討には地元研究保存団体の役員として参加した。

1985年早春の横根支群39号墳の調査も、古墳群の保存を願う山梨県考古学協会、古代の山梨を知る会および山梨学院大学考古学研究会のメンバーの熱意で進められた。雪の降るような寒さの中を3週間にわたって、小さな積石塚古墳にいたるまで全部を実測して記録に残していく学生達や、勤務を休んで交代で学生達の指導にあたった協会員の努力を忘れることができない。

都市化の進んでゆく甲府市にとって、盆地の北縁をなす丘陵地帯は市民の身近に残された希少な緑の環境である。この丘陵地帯の一角に存在する横根・桜井積石塚古墳群は、自然環境と歴史的環境が一体となったきわめて重要な環境資源である。しかも、この古墳群は全国的にみても注目に値する文化財的価値を有しており、甲府市民が郷土の誇りとするに十分なものである。

われわれは歴史の積み重ねのうえにたっているのであり、過去と断絶しては生きられないのである。この古墳群に葬られた人々はおそらくは今の甲府市民の先祖であろう。この人々の開拓の苦労の結果として今のわれわれの生活があるといつても過言ではない。したがって、この古墳群を市民達が歴史から学ぶ場として、また自然の中で古代のロマンとふれ合う場として整備し、将来にわたって保存してゆくことは、現代に生きる我々に課せられた使命であるといえるであろう。この報告書の完成の影には古墳群の保存のために活動した多くの人々のこうした願いがある。

(椎名慎太郎)

第Ⅲ章 横根支群39号墳発掘調査報告

第1節 発掘調査の経過

1. 調査の経過

横根・桜井の積石塚古墳群については、その分布の一部が集中する横根地区共有林部分の開発をめぐって、保存を求める市民運動が数年前から続いている。この動きの中で、甲府市教育委員会も貴重な文化財として保存対策に取り組み、1983年1月から3月にかけて山梨県考古学協会に委託して古墳群の分布調査を実施した。

今回の横根支群39号墳の発掘調査は、この分布調査に続くものであり、この一帯の古墳群の保存活用計画の基礎資料を得るために成因調査の一環である。

この発掘調査を甲府市からの要請で山梨県考古学協会が受託することとなり、検討の結果、横根地区に所在する積石塚古墳群の中で39号墳が最も保存状態がよく、成因を探るうえで適当であると判断し、土地所有者の了解をえて1985年2月1日より発掘調査に入った。

発掘調査の概略は次のとおりである。

2月1日、2日	清掃及び現況撮影
2月4日～2月24日	墳丘の実測作業及び周辺地形の測量
2月26日～3月9日	石室内及び墳丘周縁の発掘
3月3日 午前	見学会（約100名参加）
3月10日	埋め戻し
3月12日～13日	発掘した土の運搬作業
3月14日～20日	遺物整理作業

（椎名慎太郎）

2. 調査参加者名簿

山梨県考古学協会 田代 孝、萩原三雄、新津 健、坂本美夫

山梨学院大学考古学研究会

顧問 椎名慎太郎

学生 井上和彦、石川隆敏、奥原和彦、和田健正、秋山貴絵、興石英俊、横田知之、土橋昇、山口充弘、水野誠、望月真由美、橋本美樹、原節郎

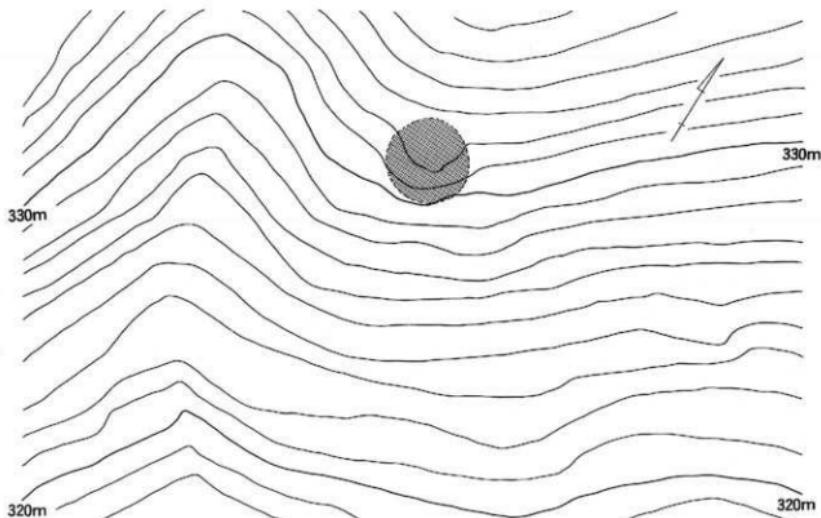
古代の山梨を知る会 中込茂樹、久保寺春雄、小池正蔵、今井定市、西田貞雄、平出知恵子、宮川昌藏、古屋高治

甲府市教育委員会 信藤祐仁、伊藤正幸

一般 池谷富士子、坂本しのぶ、武井美知子、金井いく代、名取つる子、倉田勝子、渡辺百合子、一瀬よし子、小宮通子、岸本美苗、福田妙子

第2節 墳丘

横根支群39号墳は、八人山の東斜面に分布する一群の中では最も低位の標高約329～332m付近に位置し、勾配角17°の比較的緩やかな傾斜地に造られている。付近には大小の石が散在しており、地山はロ



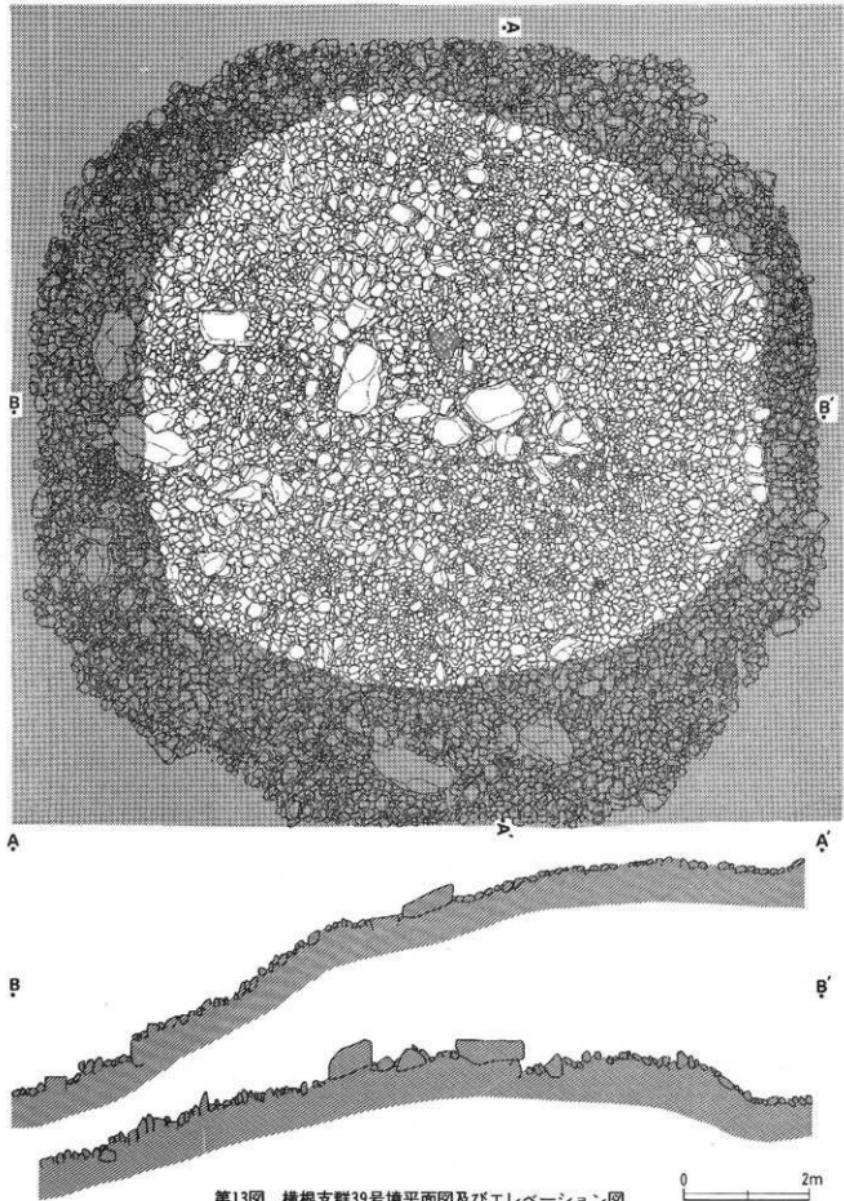
第12図 横根積石塚古墳群39号墳周辺地形図 (S = 1 : 600)

一ム質の土に石を多量に含んだ土石流である。

墳丘は山石による積石で構築されており、周囲に存在する輝石安山岩を利用して盛られている。大きさは20~30cmの人頭大のものが多く、拳大のものから一部には50~60cmの大型の石材まで使用されている。積石の間にはほとんど土は含まれず、石と石の間に空間をもつ乱石積みとなっている。墳丘の裾にあたる部分には、径30~40cmの裾列石が配置され、墳丘の構築石材の安定を図ると同時に墳丘の境界をなしている。この列石は斜面上方にあたる北側で遺存状態がよく、全周の1/4ほど並べられている。南側では、比較的大きめの安定性のある石がこの延長線上に点在しており、墳端の支えとして境界を画している。

本墳は当初径15m以上の範囲に石材が分布しており、墳丘石材の崩落により周囲に広がったことが判明した。発掘調査の結果、東西11.2m、南北9.8mの円墳であることが確認された。高さは石材の崩落が激しいものの、現状で斜面下方より中央部まで2.2m、上方より0.3mを測る。単純な円墳であるが、南側には一部段築構造を示すような箇所があり、築造時においては二段構築であった可能性も考えられる。

(信藤祐仁)

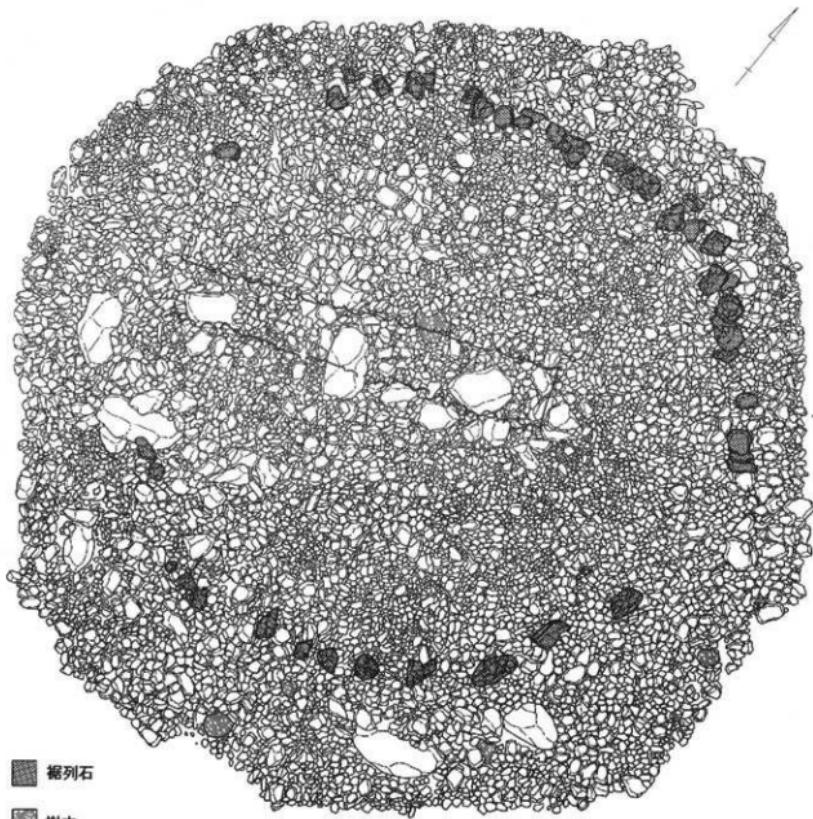


第13図 横根支群39号墳平面図及びエレベーション図

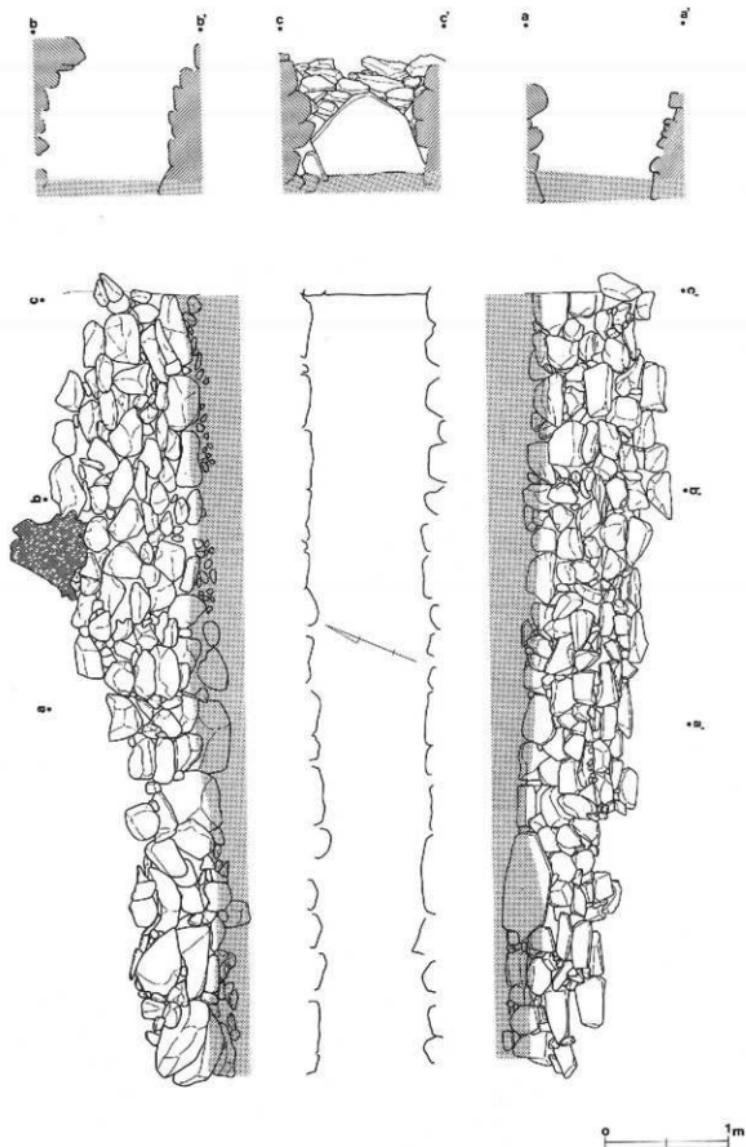
第3節 石室

石室は墳丘のほぼ中央部に位置し、無袖型の横穴式石室である。天井石（蓋石）は、調査前より墳丘の礫の崩落と盜掘のためか表面に露呈していた。これらは石室内に落下していたもの2個、墳丘上で原位置を保っていないもの4個が存在する。このうちのひとつは二つに割れていた。そのほとんどが120~140cm×80cmの大きさで、厚さは約20cmの平板状の石が用いられている。石室の方向は、等高線にはば並行し主軸をN-67°-Eにとる。

西南に開口する石室は、全長6.2m、奥壁幅1.0m、石室中央部幅0.95m、入口部幅0.85mを測る。石室の平面形は、奥壁に向かってやや広がる細長い長方形を呈しているが、中央部でわずかに胴張型の傾向を示す。羨道部と玄室部の区分は平面形で明確に区分することは難しいが、南東の側壁の下部に内側に突出した地山の石があり、ここまでを玄室とすると長さ4.5mとなる。玄門はないが、この部分を境



第14図 横根支群39号墳墳丘と石室・据列石



第15図 横根支群39号填石室実測図

に1.7mの羨道部分は地山に沿って傾斜している。前庭部には1m以上ある地山の石が存在するため、特別な施設は構築されていない。

奥壁は0.65m×0.95mのほぼ二角形の扁平な石を直立させて鏡石とし、その上部に平板状の割り石を小口積みに近い状態で積んでいる。側壁は両側ともに小口積みを基調とし、横口積みがこれに混じる乱石積みである。長さ40cmほどの石が1～6段積まれ、奥壁に近いところで1.2mの高さを測る。石室底面は入口部分の方向に下がっており、これに対応して側壁の高さも次第に減じている。奥壁と東南側壁はほぼ垂直であるが、北西の側壁は上部で持送り状にせり出している。石室の床には平板状の石が部分的にみられるが、盗掘時において副葬品を探すのに底面の石をはがした結果破壊されたものと推定される。

(信藤祐仁)

第4節 出土遺物

39号墳からは、石室内、墳丘上より土師器、ガラス小玉、鉄鎌、刀子、馬の歯などが出土している。土師器は赤色塗彩された环形土器が多数を占めており、小破片が多く復元実測可能なものについて図示した。馬の歯については第7節に詳述したためそちらを参照して頂きたい。

土師器（第16図）

环形土器は、口縁下に稜を有し、口縁部が外反するもの（A類）と、稜をもたないもの（B類）とに大別できる。

环形土器 A類

1は口径14cmを測り、口縁部は後から外反する。内面および外面口縁部はヨコナデ、外面胴下部半部から底部にかけては横方向のヘラケズリが行われている。胎土はやや粗く、色調は橙7.5YR6/6を呈する。外面には赤色塗彩の痕跡を残している。

2は口径14cmを測る。内外面ともナデ調整後にヘラミガキを施している。外面胴下部から底部にかけては斜位のヘラケズリを行っている。胎土はやや密で、色調はにぶい橙7.5YR7/4を呈する。内外面ともに赤色塗彩されている。

3は口径14.8cmを測り、調整は1と同様に行われている。胎土はやや密で色調は橙7.5YR6/6を呈する。やはり内外面ともに赤色塗彩されている。

4は口径14.2cmを測り、内面および外面口縁部はヨコナデ、外面胴下部から底部にかけては横方向のヘラケズリが行われているが、表面が摩耗しており、明瞭ではない。胎土はやや粗く、色調は橙7.5YR6/6を呈する。内外面ともに赤色塗彩の痕跡を残している。

5は他に比べ、口縁部が上方へ立ち上がる。内面および外面上半部はヘラナデが、外面下半部は横方向のヘラケズリが認められる。底部にはヘラ状工具による線刻がみられる。胎土は緻密であり、色調はにぶい橙7.5YR7/4を呈する。内外面ともに赤色塗彩されている。

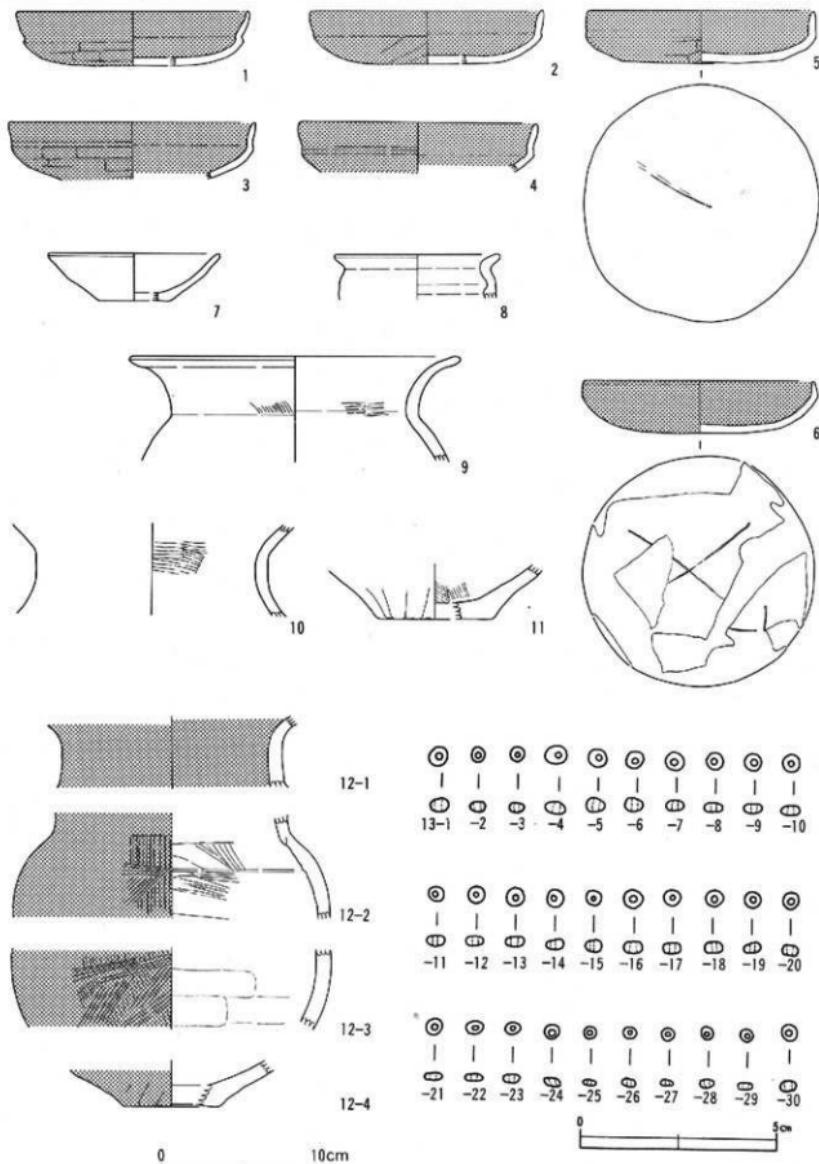
环形土器 B類

6は外面に稜をもたず、口縁部は緩やかに内彎する。口径14cmを測り、内外面ともにヘラミガキが施され、内面はその後、ナデ調整されている。胎土は密で、色調はにぶい黄橙10YR6/4を呈する。内外面ともに赤色塗彩されている。底部にはヘラ状工具による「×」・「ハ」字状の線刻が認められる。

7は平安期の环で、口径10.4cm、底径4.4cm、器高2.9cmを測る。内外面ともにナデが認められる。底部は回転糸切り痕を残す。胎土は緻密で色調は橙7.5YR6/6を呈する。

壺形土器

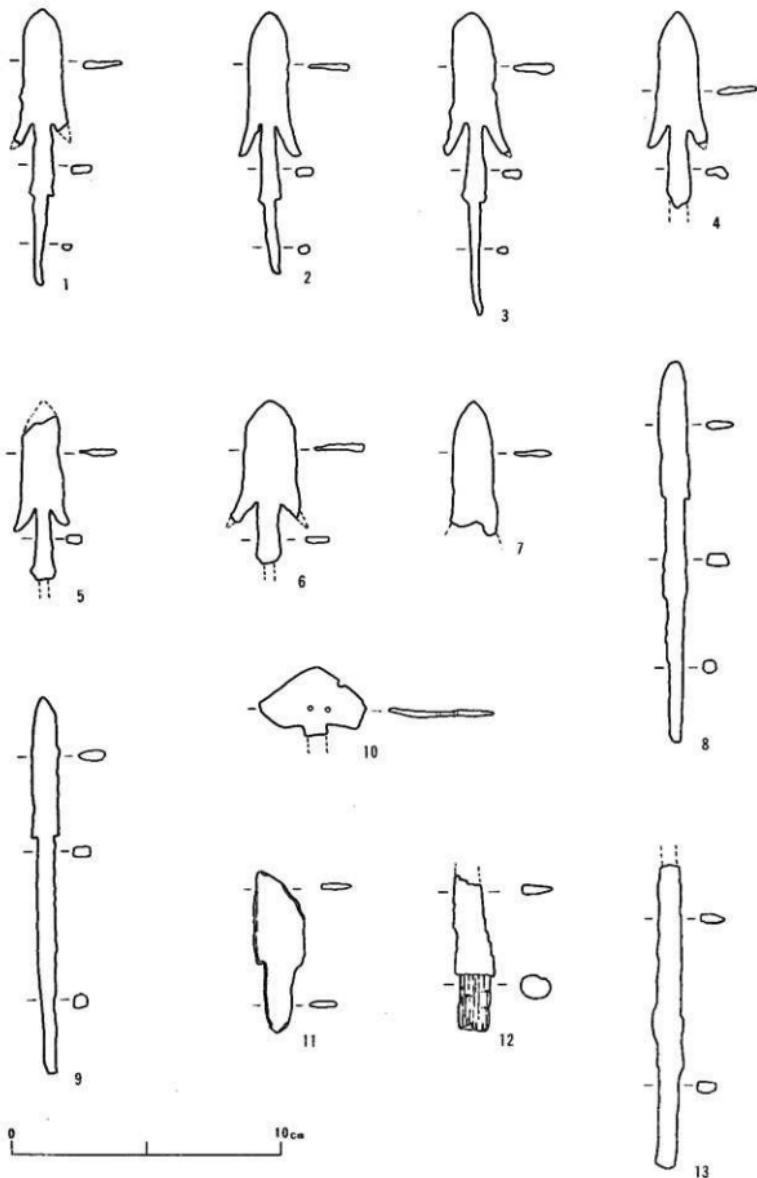
8は小型の壺形土器である。口径11cmを測る。底部は欠損しており不明である。内外面ともにロク



第16図 横根支群39号墳出土遺物

ガラス小玉一覧表

No.	径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	色 調
1	5.0	3.0	0.11	ダル ブルー グリーン
2	3.5	2.5	0.05	ダル ブルー グリーン
3	3.5	2.5	0.05	ディープ ブルー
4	5.5	3.0	0.13	ダル グリーニッシュ ブルー
5	4.5	4.0	0.12	グレイッシュ ブルー
6	4.5	4.0	0.10	ディープ ブルー
7	5.0	3.0	0.09	ディープ ブルー
8	4.5	2.5	0.06	ディープ ブルー
9	4.5	2.5	0.07	ディープ ブルー
10	4.5	3.0	0.07	ディープ ブルー
11	4.5	3.0	0.07	ディープ ブルー
12	4.5	2.5	0.07	ディープ ブルー
13	4.5	3.0	0.07	ディープ ブルー
14	4.5	3.0	0.06	ディープ ブルー
15	4.5	3.5	0.07	ディープ ブルー
16	5.0	3.0	0.09	グレイッシュ ブルー
17	4.5	3.0	0.07	ダル ブルー グリーン
18	4.5	3.0	0.07	ダル グリーニッシュ ブルー
19	4.5	3.0	0.06	ダーク ブルー
20	4.0	3.0	0.07	グレイッシュ グリーン
21	4.5	2.0	0.04	ダル グリーニッシュ ブルー
22	4.5	2.0	0.05	ダル ブルー グリーン
23	4.0	3.0	0.06	ダル ブルー グリーン
24	4.5	3.0	0.05	ダーク グリーニッシュ ブルー
25	3.5	1.5	0.02	ライト ブルー
26	3.5	2.0	0.02	ライト ブルー
27	3.5	1.5	0.02	ライト ブルー
28	3.0	2.0	0.03	ライト ブルー
29	3.5	1.5	0.03	ライト ブルー
30	4.5	2.8	0.06	ダル グリーニッシュ ブルー



第17図 橫根支群39号墳出土鐵鎌・刀子

④整形によるナデ痕を明瞭に残している。胎土は緻密であり、色調はにぶい黄橙10YR7/4を呈する。

壺形土器

9は口縁部の破片で、口径20cmを測る。内外面はハケメ調整後、ナデを行っている。胎土はやや粗く色調は橙7.5YR6/6を呈する。

10も9同様の整形を行っている。胎土はやや粗く色調は橙7.5YR6/6を呈する。

11は底部の破片であるが、外面は縦方向のヘラケズリ後、ナデ調整を行っている。内面はハケメが施されている。胎土はやや粗く、色調はにぶい黄橙10YR7/4を呈する。

12は接合しない破片であるが、胎土や色調より同一個体と思われる。外面はハケメ調整が、内面下半部にはヘラナデが施されており、頸部には横方向のハケメが残る。胎土は密であり、色調はにぶい黄橙10YR7/4を呈する。外面全面および内面頸部には赤色塗彩が施されている。

ガラス玉（第16図）

石室内より合計30個のガラス小玉が発見されている。ガラス小玉の径は4mm前後を測り、重量も0.1gにも満たないものがほとんどである。

鉄製品（第17図）

鉄鎌（1～10）

鉄鎌は鎌身だけで10点が出土している。形態から2種類に分類される。

1～9は両丸造腸状柳葉式鎌に属するものである。これらは鎌身の幅が広く逆刺部が顕著なもの（1～7）と、幅が狭く逆刺部が顕著でないもの（8・9）に大別される。8は関部が明瞭ではない。

10は平造五角形式鎌に属するものである。頭部を欠損しており、関部については不明である。鎌身にはシンメトリーではないが2カ所に直径1mmほどの孔が穿たれている。

刀子（11～13）

3点が出土しており、形態も様々である。

11は基部の先端を欠損する。刃部は研ぎ減りによってであると思われるが、非常に小さくなっている。

12は刃部は腐食による剥離が激しく断面形態を観察することはできない。基部は先端を欠損するが、断面形態は円形に近く、薄くではあるが木質部の痕跡を残す。

13は鉢を欠損しているが、身幅は狭く長い造りとなっている。

（宮澤公雄）

第5節 まとめ

横根支群39号墳の構造

〈墳丘〉

本墳は直径11.2m、高さ2.2mの円墳の積石塚である。墳丘は、付近に存在する20～30cm大の複輝石安山岩のみを用いて築造されている純粋な積石塚古墳である。

墳丘は、斜面上方の北半に外護列石が廻るが、斜面下方の南半では不明瞭で、点在する大きめの石がこれに代わるものと思われる。なお、周溝は存在しない。一部に二段築成の可能性を示す箇所がある。二段築成については、桜井内山支群6号墳にも同様な状況が観察される。

横根支群の中で八人山の東斜面には、合計18基の積石塚が分布している。この一群の古墳の直径は、現況で5～11mの大きさであるので、本墳はこの一群の中では最大規模のものである。立地的にもこのグループの入口部にあたり、上位の古墳が急斜面に占地しているのに対し、この群の中核的な古墳と

いえよう。

〈石室〉

石室は全長6.2m、奥壁幅1.0m、中央部幅0.95m、入口部幅0.85m、高さ1.0mの狭長な横穴式石室である。

上軸は等高線に並行に設定され、南北方向に開口する。横根・桜井積石塚古墳群の石室の主軸方向は、等高線に直交するものと本墳のように並行するものに大別される。等高線に直交するものには横穴式石室のものが多く、並行するものに竪穴式のものが多い傾向にあることが指摘されている。並行するものでも横穴式石室のものは、狭長なものが多くやや古式な様相を示している。

奥壁の鏡石の使い方や、側壁の小口積みに横口積みが混じる積み方は、他の横根・桜井古墳群中に一般的に見られる構造である。

本墳の石室規模は、本古墳群の中で最大のものである。分布調査によって計測された他の横穴式石室の全長(±2.1~5.0m)の範囲であるので、その卓越した優位性が指摘できる。

〈出土遺物〉

本墳からの遺物の出土状況は、墳丘上と石室内に分けられる。墳丘上では、清掃中に礫の間にたまたま腐葉土や石の間に、土師器の細片がわずかに見られた。石室中においては、内部をふさいでいた礫や腐葉土の上部で土師器片が、床面近くでは土師器片・鉄鎌・刀子・ガラス玉が出土している。土師器は石室内で平均的に分布していたが、鉄鎌は石室中央部に集中し、刀子は漢道にあたる部分からの出土である。墳丘上の遺物は、石室内の副葬品が盗掘時において散乱したものと推定される。

土師器は、古墳時代と平安時代のものに分けられる。古墳時代の土師器には壺と甕があり、両者共に赤色塗彩されている。壺には、器体部中央付近に稜を有し口縁が外反または直立するものと、稜をもたない半球状のものに二分される。これらはこれまでの山梨県における土師器編年研究から、6世紀後半から7世紀初めの年代が付与されるものである。平安時代の土師器は、壺と小型壺などを見られた。およそ11世紀代の時期のものであり、墓前祭祀の使用品であると推定される。

鉄製品には、鎌と刀子がある。鉄鎌の形態は、両丸造脇抉柳葉式と平造五角形式がある。これらは古墳時代後期6世紀代を中心として使用された形態であり、おおよそ6世紀後半を中心に存在したものと推定されている。

ガラス玉は、石室内床面付近から30点が出土している。ブルーを基調とする色調には濃淡の差が激しく、大きさにもばらつきがある。

馬の上顎の歯が6点、石室の床面付近から出土している。我が国では、馬を殉葬する風習はほとんどなく、大陸にその例が認められるためその被葬者の性格論にも影響を及ぼしかねないと、橋本博文氏は指摘している。馬をめぐる古代の牧と積石塚古墳被葬者との関係は、既に飯島進氏によって注目され渡来人墓誌の一つの根幹をなしている。同様に、明らかに朝鮮半島とのつながりが窺える長野県大室古墳群について、被葬者と馬を供給する牧との関係を大室初重氏は重要視すると共に、横根・桜井積石塚古墳群においても再検討の必要性を指摘されている。

(信藤祐仁)

第6節 横根支群39号墳の考古学研究上の課題

1. はじめに

日本における積石塚古墳の研究は明治時代以来、長い年月を経てきたが、大系的な研究成果が世に問われたとはいひ難い状況にある。日本における積石塚古墳が最も濃密に分布している長野市松代町大室

古墳群についてさえも、総数500余基という膨大な分布数と、合掌型石室などの存在から著名な存在であるものの、古墳群の特性を十分に把握するまでには至っていない。つまり学術上の目的を有する調査研究が不十分であったことに、最大の理由があると思われる。

長野県大室古墳群と対比しうる東日本大規模積石塚古墳群は、山梨県甲府市横根・桜井積石塚古墳群である。すでに山梨県考古学協会の分布調査が実施され、未確定要素があるとしても、横根支群107基、桜井内山支群11基、桜井支群24基、桜井東支群3基の合計145基の積石塚古墳が確認されている。これらの数値は、積石塚古墳の特徴ということもあって、過去の開墾、農耕作業中に意識的に土中の石塊が集積され、あたかも積石塚と信じて疑いえないほど、みごとな積石の墳丘を形成することがある。従って、積石塚古墳とする断定は慎重に行われなければならない。

しかし、また一方において八人山南東斜面に分布する古墳の中には、積石による墳丘の形成はほとんど認められず、僅かに急斜面に地蔵程度の石の高まりを見せるものが多くある。これらの例が、積石塚古墳ではないという積極的な理由もまた見当たらぬのである。長野市大室古墳群の場合を挙げるまでもなく、横根古墳群の中にさえ、ほとんど墳丘が認められない古墳で、石室遺構を有している古墳があることは事実である。従って、横根古墳群の分布実数は、逆に増加することもまた予測されるのであって、将来にわたり慎重な学術調査が継続されなければならない。

1985(昭和60)年3月に発掘調査が実施された古墳は、八人山南東斜面に位置する横根支群39号墳である。調査中の1日、それも僅か2時間ほどの実見であるため、古墳に関する個別的な事実の検証は困難である。従って、横根支群39号墳の考古学上の課題について、とりあえず気の付いた点だけを、まとめとして記述する次第である。

2. 古墳の立地と規模について

すでに、記述したように横根支群39号墳は八人山の南東斜面に位置しており、支群全体の分布状況の中でも下位にあると思われる。39号墳の位置から、より高位は傾斜が急となり、その変換点付近に39号墳が存在している。現況では高位置の積石塚古墳が墳丘規模や石室構造上において特別な内容を示しているのかどうか筆者には定かではない。ただし、横根支群の中においては、本古墳が明確な積石塚であるという確認がすでになされていた経緯からみると、39号墳は支群中では立地点と墳丘規模の点で優位にあったと考えられるかも知れない。

山の傾斜面に立地する古墳のため、墳丘裾のレベルは北側と南側とでは、かなりの高低差が見受けられた。その詳細な数値については報告の項にゆだねるが、下位にあたる南側の墳丘裾は、積石の崩壊を防ぐ意図もあって、大型の山石を礎石として行垣状に配列していることも勿論である。このような石垣状ともいえる裾部の列石が、積石塚古墳のみにあるのではなく、多くの前期古墳にも認められているが、積石塚古墳の場合には重量のかかる形状の不安定な山石を積み上げることもあって、特別に入念な配慮が裾石の配列からみとめられる。また礎石は南側に比較してやや小型化の傾向が認められるとはいえ、より上方位置にあたる北側の墳裾にもめぐっているように思われる。このことは39号墳の墓域を画する意図によるものと推考する。

墳丘は山石を積み上げたいっぽ純粋な積石塚古墳であり、ほとんど土を混じえない。東西方向の径は15mほどと思われ、横根支群の中でも大型墳丘の例ではなかろうか。この39号墳の横根古墳群中における歴史的な意義を考えるために、基礎的な資料が筆者の手許にはないが、調査された横穴式石室の全像を見ると、支群中における有力古墳であるように思われる。長野県大室古墳群においても、また埼玉県秩父市原谷古墳群などにおいても、径15m以上の積石塚古墳の存在は決して多くはない。積石塚古墳の墳丘規模の差と、立地点の相違との関係はなお今後の調査の進展にまつことになろう。

3. 内部構造について

横根支群中の39号墳の内部構造は横穴式石室である。南西方向に開口する石室の大井石のほとんどは、すでに古くから除去されていたようである。墳丘周辺にそれらしきや大型の石が散見されたので、おそらく崩壊した石よりも意図的に外された例が多かったのではないか。石室細部の特色や數値については本報告の記述にゆずるが、実見の際は、全体の平面形から見ると、玄室長が幅に対して長いように見受けられた。石室は明らかに未加工のあまり大きくなない山石を積み上げて側壁としており、奥壁にはやや大型の一枚石が用いられていた。これまでの1983年度と今回との二度に及ぶ横根古墳群の実査によって、筆者が見学した横穴式石室の中では、本例は古式な要素を有しているように思われた。袖石を持たないわゆる「袖無型横穴式石室」の部類に属している。ただ羨道部分と前庭部の調査がまだ進んでいない段階の所見によるものなので、確実なことはいいがたい。

横根支群の横穴式石室の全体像が把握された際には、より確実な指摘が出来るであろうが、おそらくは支群中では石室の長さに特色が示される古墳となるのではなかろうか。

4. 副葬品について

筆者が見学した際には、なお石室の床面発掘が継続中であり、最終的な調査結果は知らされていない。数個の鉄鎌片と土師器の坏と甕の破片が僅かに発見されていただけなので、全体の遺物相は不明である。しかし鉄鎌片の中には平根系統の三角彎抉形式の例がみとめられ、その特徴は6世紀代を中心に行なった形式であるように見受けられた。少なくとも東国の中墳時代終末期の7世紀終末から8世紀初頭に及ぶ形式の鉄鎌ではないことが確実であった。この横根支群39号墳の横穴式石室への追葬の実態については不明であるが、古墳築造時期と、最終埋葬年代との間に一、二世代の経過があるとすれば、6世紀後半期から7世紀初頭にいたる年代が、横根支群39号墳に与えられる年代だと思われる。

5. 横根支群39号墳の歴史的性質

日本における積石塚古墳の歴史的性質、端的にいって被葬者の性格などについては、いまだ十分な究明がなされているとはいがたい状況にある。古墳本来の墳丘は盛土によるものが一般的であり、前期古墳に見られる葺石と積石塚古墳との関連性さえも、まだ十分に検討されていない。積石塚古墳の出現にかかる環境自生説といわれる立場に立てば、横根・桜井積石塚古墳群の分布する山塊一帯はおびただしい山石の産出地域であって、積石塚の築造こそむしろあたり前のことのように思われる。山丘傾斜面を開削してブドウ園が急激に拡大しつつあるが、土中にも包含されている山石によって延々と続く石垣が築成されているほどである。

長野県大室古墳群においてもこの横根・桜井積石塚古墳群においても、自然の景観は勿論のこと古墳群の分布状況にきわめて共通した特徴を見出すのである。従って、積石塚古墳すなわち朝鮮半島からの渡来系集団に關係ある墓制と、単純に決めてかかるることは危険であろう。またすでに指摘したが、前期古墳に普遍的にみとめられる葺石施設の採用と、積石塚古墳の登場とに、全く關係があるのか否か検討の余地はありそうである。

横根古墳群の形成年代の上限は不明であるが、一般的には6世紀以降、とくに7世紀代に入って集中的に古墳築造がなされたと理解されている。しかし、長野県須坂市鎧塚古墳の例のように、5世紀代後半期にまで年代の遡る積石塚古墳が存在しており、本稿石塚古墳群の出現年代については、今後の調査の継続によって明らかにされるものと思われる。

横根・桜井積石塚古墳群が積石塚古墳の集中する特異性のある群集墳であることは、甲府盆地とくに

笛吹川流域に顕著な分布を示す古墳群と比較すると一層明確となる。その古墳群の性格が、長野県大室古墳群の場合に合掌型石室を含むという点で、渡来系集団との関係を想定するのであるが、現在の資料を基礎として考えれば横根古墳群を積石塚古墳だからといって渡来系集団の人々の墓所であったと速断はできない。ただ甲府盆地周辺の古墳像の中から横根古墳群を見ると、圧倒的な積石塚古墳の集中性は、目を見張らざるをえない。積石塚古墳の被葬者像として、これまでに渡来系集団の人々との関係が、比較的容易に考えられてきた。積石塚の形成が、わが国における渡来系集団の墓制であるとは簡単に言いきることは困難である。前期古墳における積石塚古墳の存在や葺石による外観上の積石塚風となる墳丘の歴史的性格について、伝統的なわが古代社会に登場した首長層に関係する墓制であるとすれば、横根・桜井積石塚古墳群もまた在來の伝統的な地域社会の人々を埋葬した可能性も強くなってくる。積石塚すなわち外来系、ことに朝鮮半島の積石塚文化と直接的な関係が求めがたい状況にあり、横根・桜井積石塚古墳群のはほとんどは在地集団によって形成されたものという考え方をしておきたい。長野県人室古墳群における合掌型石室と同様な、特異な内部構造がもし採用されているとすれば、それらの発見、調査の段階において、改めて検討すべきものと思うのである。

(大塚初重 1985.7.2)

第7節 横根支群39号墳出土の馬の歯について

1. 形 状

馬歯は、臼歯6点とも剝離・破損がみられ、完全な形状のものがない。今後、骨は科学的保存処理を施さないと、劣化をきたす恐れがある。

2. 特 徵

出土馬歯の比較資料としては、国立科学博物館所蔵のトカラ馬とモウコノウマ(*Equus przewalskii Poliakov*)の頭骨標本を使用した。

トカラ馬は、林田氏の研究によれば、わが国の小形在来馬のひとつで鹿児島県トカラ諸島に僅かに残存する馬である。

モウコノウマは、1879年に発見されたアジアの野ウマで、日本馬の祖先・蒙古馬の原種といわれている。

出土した臼歯は、破損の甚だしいものがあるため疑問の余地が残るが、ほぼ同一個体のものと判断できる。従って古墳石室に1頭の馬の存在が確認し得る。

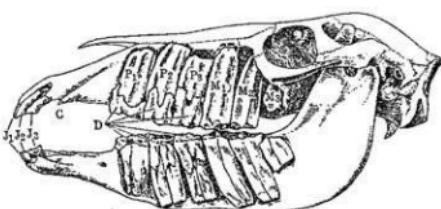
年齢は、臼歯咬合面の琺瑯ヒダが高く、歯根部が長いことから、乳歯が抜け替わって間もない若齢馬のものである。性別は犬歯がないので、牝馬の可能性が高い。

体形は、トカラ馬のものより大きいが、モウコノウマより小さく、恐らくわが国中形馬の木曾馬に近い体形を呈していたものと想定できる。

3. 個別の特徴（上頸骨）

3-(1) 左第2前臼歯 L P₂ (850227, YN39)

舌側部の一部分とL P₂側歯根部分に若干の欠損がみられるが、ほぼ完全な形状にある。臼歯咬



第18図 馬の歯列

合面の珊瑚ヒダのウネが高いことが特に目につく。

3-(2) 左第3前臼歯L P₃(850312、YN39)

歯根部分に欠損が見られるほか、臼歯咬合面は良好な状況を呈している。

3-(3) 左第3後臼歯LM₃(850312、YN39) ?

頬面及び舌面が大きく欠損を呈し、若干残存している咬合面で、第3後臼歯(?)と判断した。

3-(4) 右第2前臼歯RP₃(850225、YN39)

舌側前半部及び歯根部分に欠損があるほか、左側の(1)とほぼ同一の形状を呈している。

3-(5) 右第3前臼歯RP₃(850303、YN39)

臼歯のはば1/2が欠損しているが、咬合面に第3前臼歯の特徴を現していて、左側の(2)と同一の形状をもち、若齶馬の状況をよくとどめている。

3-(6) 右第2後臼歯RM₃(850227、YN39・850302、YN39) ?

舌側部が2つ割れて残存しているのみで、僅かな咬合面の形状から第2後臼歯の特徴をうかがうことができる。

(長谷川善和)

(鈴木 健夫)

第Ⅳ章 桜井内山支群9号墳発掘調査報告

第1節 発掘調査に至る経緯

今回の調査は甲府市農政課による農道建設により、横根・桜井積石塚古墳群桜井内山支群（旧称横根東支群）9号墳の一部が破壊されることに伴って行われた緊急発掘である。山梨学院大学考古学研究会は、1984年に石和町誌編纂委員会と協力して石和町松本の大藏經寺山積石塚古墳群15号墳を発掘調査し、1985年2～3月には山梨県考古学協会が甲府市教育委員会の委託をうけて行った、甲府市横根・桜井積石塚古墳群横根支群（旧横根西支群）39号墳の調査に主力メンバーとして参加したことから、今回の調査の中心になるように甲府市教育委員会から依頼され、これを担当したものである。埋蔵文化財は国民の貴重な共有財産であり、特に横根・桜井積石塚古墳群は1981年以来県考古学協会等の手により保存のための分布調査が行われ、甲府市でも保存計画を策定中であることもある。1985年春に調査担当の打診があつた時以来、出来ることならば路線変更により完全保存をはかりたいと考えて各方面に働きかけを行ってきた。5～6月に市教委、市経済部との間で協議をかねながら、地元の農業者の生産活動に不可欠の農道工事であること、路線変更には土地を無償提供する周辺農家の負担が多く、また、既に完成した部分との関係で工法上も無理があるということで、破壊される古墳の最も詳しい調査を行うことで保存にかかるという方策を選択せざるを得なくなつたものである。ただし、調査中にさらに路線の微調整を加え、また工法上の工夫をしていただいた結果、最終的には主体部全部をふくめて古墳全体の2/3が保存されたことを強調しておきたい。

調査は1985年6月2日～8月4日、9月2日～同6日の計29日間にわたって行われた。7月27日には現地説明会が行われて約60名の方々の参加を得た。これに引き続いて、県考古学協会のメンバーによる現地検討会が行われ、多くの御教示をいただくことができた。

この調査にあたって、地元桜井町の自治会、桜井果実出荷組合、桜井農道組合にいろいろとお世話をかけた。また、久保寺春雄氏には発掘作業の基地・宿舎となる住宅の貸与をうけたほか、様々な面で御支援いただいた。関係のすべての方々に、ここであらためて御礼申し上げる次第である。（椎名慎太郎）

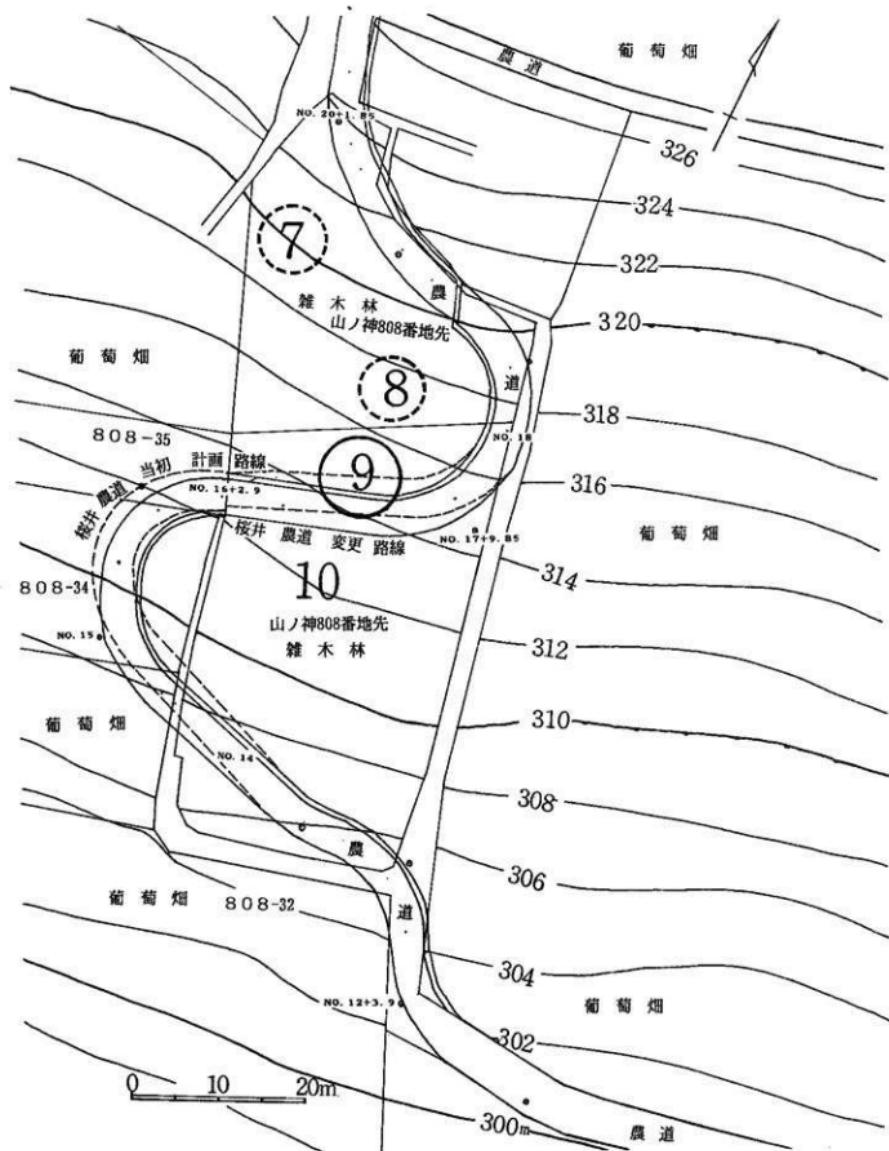
第2節 発掘調査の経過

1. 調査経過

桜井内山支群9号墳の調査条件の協議を進めながら、調査現場の確認を行った。現場は桜井町字山の神一帯に広がる南斜面のブドウ畠の中に南北85m、東西30mの範囲で残された山林で、クヌギ、コナラ、クリ、ササなどの雑木林となっていて、茂みをかきわけて入ると木がまばらに生えて、その間に石塊の集まった積石塚が認められるという状態だった。

調査作業はまず古墳周辺の伐採作業から始めた。6月2日、15日、22日、29日と大字の投票にかかる土・日曜日を使って、9号墳から8号墳にかけて周辺の地表面を露出させた。この作業によって、9号墳は直径7m、高さ2mと、古代の山梨を知る会・山梨県考古学協会の1983年（昭和58年）春の横根・桜井積石塚分布調査によって記録されていたが、やや規模が大きくなりそうなこと、10号墳そのものは明瞭な墳丘をもたず大きな石塊がまとまる所があること、8号墳については石の組み方から横穴式石室が南北方向にあること、などが観察できた。

7月9日夜に桜井果実出荷組合で甲府市教育委員会上催の「積石塚古墳発掘調査事前説明会」が行わ



第19図 桜井内山支群 9号墳の地形と桜井農道

れた。横根・桜井積石塚古墳群の概要と9号墳調査計画がスライドをまじえて説明され、行政と調査担当者が地元・農道組合への理解・協力体制をお願いした。

7月14日、現地で調査関係者が揃って、調査開始式が行われた。楠恵明市教育長、久保田敏夫社会教育課長や丸山敏農道組合長、土地所有者の桜井健雄氏、「古代の山梨を知る会」久保寺春雄氏らのあいさつをもとに、調査の成果への期待がこめられた。開始式後、9号墳の墳表の清掃作業が続けられ、積石の間に落ちている枯葉を丹念に拾って墳丘全体を露出させた。この過程で墳表から須恵器と土師器の破片を採集した。また調査区画の杭打ちを行った。8号墳の清掃を行い、直径7.5m、高さ2mの積石塚の外観を確認し、幅1m、高さ5mの両袖型の横穴式石室の石組上端が露出したので、9号墳の主軸もこの石室の長軸に等しいものと仮定し、N-18°-Eの方位でグリッドの軸線を設定した。2mグリッドで、東西方向をA~G、南北方向を3~10と呼ぶこととし、約60本の杭を設けた。

7月15日、墳丘の平面実測図作成のための写真測量を行った。シン航空写真株式会社により、ケーブル式の一眼レフカメラのリモートコントロールで垂直写真を撮り、それから積石塚の輪郭と等高線を図化した1/20平面図を作成する方法である。7月16日、伐採、レベル測定。17~19日、墳丘の東西(a-a')、南北(b-b')のエレベーション図を実測した。この間、墳丘を覆っている積石を除きながら、主体部の石組をさがした。当初の見込みでは墳丘の南裾に大きな石塊が南北に並ぶことから、南北に軸をもつ横穴式石室を想定した。ところが、B-C-D-6グリッドで表面の積石をどけても、石塊が乱石積みされているだけで、石室の規則的な配列はみられなかった。19日にC-5グリッドの表面の石を1層どけたところ、東西方向に並行する規則的な配列がみられ、20日にD-5グリッドへ拡張して石をどけたところ、東西方向に長い堅穴系石室であることを確認した。7月20~23日石室内に入っている石と少量の土を除去したところ、石室内から金環、須恵器片、土師器片、人骨、獸齒骨、鳥骨が出土した。24~26日には、石室床まで清掃し、写真撮影と実測図作成を行った。

7月27日には、甲府市教育委員会主催の「積石塚古墳発掘調査現地説明会」と山梨県考古学協会主催の「横根東9号墳現地見学・検討会」が催され、計60名が参加した。発掘ニュース(モニュメント2号)が配布され、遺構の説明と遺物陳列、古墳の年代等をめぐって検討が行われた。

7月30日~8月3日、墳丘の東西南北方向に1×2~3mのトレンチを設定した。各トレンチの断面で、石塊のみが2~3層になって集積する墳丘部と、石塊が土中に包含されている地山の部分とが識別でき、泥流土の上にほとんど石塊のみで墳丘をつくっていることと、周溝はないこと、古墳墳丘が直径9.5mに取まることが確認できた。地山まで浅く掘り、土層断面図を作成した。さらにこの規模確認結果により、墳丘外に露出している転石塊を人力で運び、除去した。

7月28日~8月4日まで、石室の実測を、40℃前後の猛暑と雷雨・夕立に悩まされながら続けた。

8月4日に9号墳墳丘実測と石室の発掘等、調査の第1期段階を終え、一旦中断した。

以上の結果をもとに古墳の範囲と農道計画図面を重ねたところ、削られる区域が古墳の南半分で、幅4mの農道に雨水水路や切土斜面の石垣・法面を加えると、6mの工事区域となり、石室の保存が危ういことになった。そこで、市教育委員会文化係と調査担当者は、市農政課に工事計画の見直しを依頼した。あわせて地元桜井町の関係者に協力をお願いした。8月10日の現地協議で、桜井農道路線を工法上最大限で変更し、当初の予定路線幅から南へ1.7mずらし、墳丘の2/3が現状保存できるよう再設計する計画が、市農政課から提示され、承認された。

この保存方法協議にもとづき、第2期調査を9月2日から9月5日まで行った。変更された農道法線に沿って墳丘の断ち割りセクション(c-c')を設定し、グリッド7以降の積石塚墳丘を断ち割った。石積みは乱石積みで、地山にも整地した痕跡はみられなかった。この墳丘断ち割りセクションを実測・撮影し、古墳周辺の地形図を完成させた。

さらに9号墳の保存のために、床面まで発掘した石室が崩れないよう、内部に墳丘の灰色の安山岩とは違う白色の山砂を詰めて保護した。

以上で、桜井内山支群9号墳の発掘作業を完了した。発掘調査面積は約120m²、延べ29日間であった。

以後、整理、報告書作成作業を、山梨学院大学考古学研究室で1986年3月まで続けた。1985年10月9日には調査結果の中間報告を盛りこんだ「モニュメント3号」を発行し、11月2日には「甲府盆地の積石塚古墳研究集会」（主催山梨県考古学協会・甲府市教育委員会・山梨学院大学考古学研究会）と「大学祭の考古学研究会展示会」が開かれ、普及・公開活動も行われた。
(十菱駿式)

2. 調査参加者名簿

代表 椎名慎太郎（山梨学院大学教授）

担当者 十菱駿武（山梨学院大学助教授）

山梨学院大学考古学研究会

O B 原 節郎・落合 淳

学生 横田知之・土橋 界・奥石英俊（法2年）・望月真由美・秋山貴絵（商2年）・皆川洋・森脇 健次郎・渡辺克敏・和田弘行（法1年）・本元正治（商1年）・中川五彰（商2年）

高校生 三井健一・塩島賢一・山本敬男・古屋圭絵・坂本奈緒子（甲府東高）

室星安治・浅野暢美（甲府一高）

都立大学考古学研究会

木崎道昭・田中 彰・稻葉洋忠

一般 吉田香屋子（全文協）・吉川幸雄（世田谷区文化財保護指導員）

椎名美江・十菱美津子・十菱俊英・椎名裕介・椎名拓也・丸茂理穂子

シン航空写真株式会社

木下大三・森谷 忠

事務局 甲府市教育委員会

教育長 楠 恵明

社会教育課長 久保田敏夫

社会教育課文化係長 山本 承功

社会教育課 石井 丈司

社会教育課文化財主事 信藤 助仁

社会教育課文化財主事 伊藤 正幸

見学者・協力者

地 元 久保寺春雄（甲府市桜井町・古代の山梨を知る会・山梨県考古学協会埋文委）

桜井健雄（甲府市桜井町・土地所有者・桜井果実出荷組合）

小倉一七（桜井町自治会長） 小倉 香・丸山 巍（桜井農道組合長）

滝口光徳・千野昌雄・桜井定矩・鈴木弘明・浅川鷹寛・山根弘人・松浦晴海

甲連小学校

山梨学院短大

森沢まさ子（食物栄養科助手）・伊藤美輝（講師・美術）

山梨学院大学

古屋忠彦（学長）・河西秀夫（教授助手・地質）・香西敏器（助教授）

白鳥令仁（教務課）

山梨県考古学協会

坂本美大・萩原二雄・末木健・畠大介・中山誠二・田代孝・金丸平甫

一般 石田二郎・山田清幸・今井定市・林 学・石倉ゆき美・白石真理・渋谷恵美子・佐野央光・

土屋政司・渡辺隆廣・立川隆章・伊藤博文・奥原和彦・松本潔和・矢崎照政・小口久美子

古代の山梨を知る会

中込茂樹・小池正蔵・宮川昌藏

第3節 墳丘

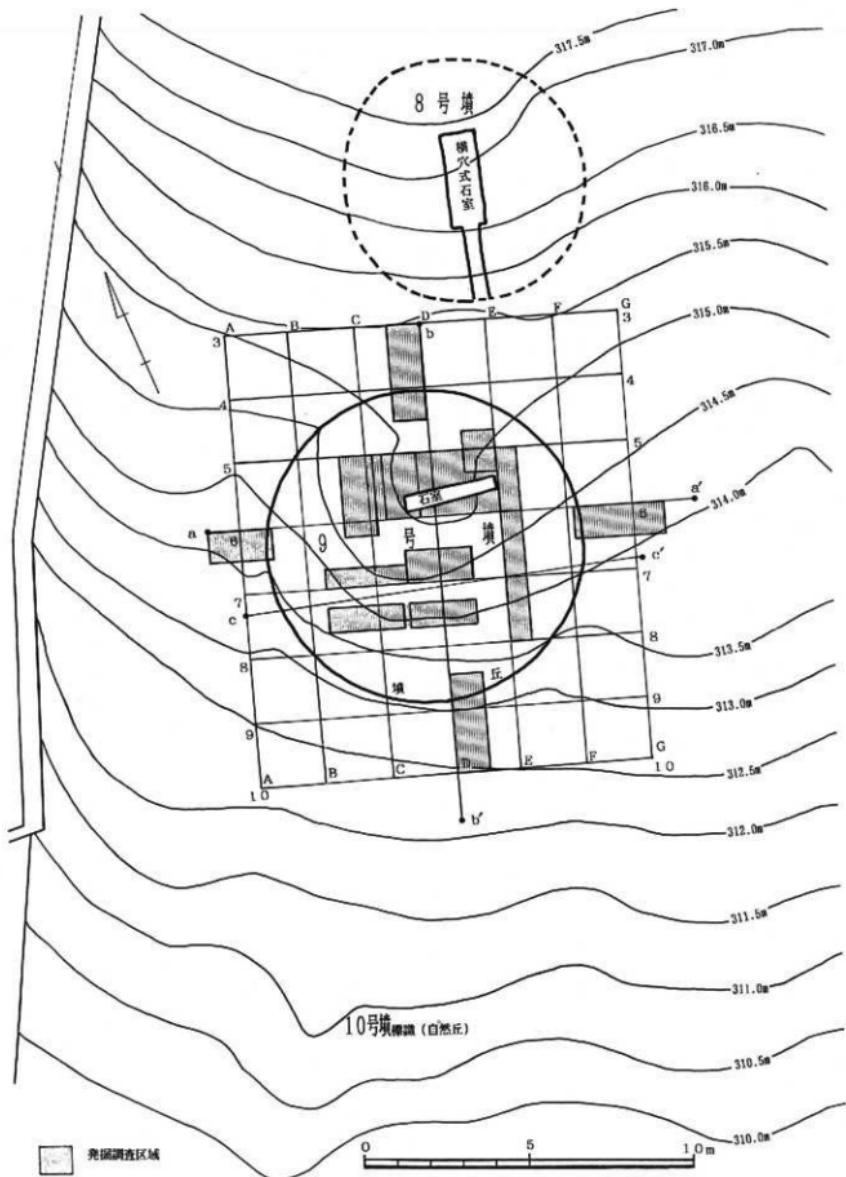
桜井内山支群9号墳は、大山沢川が形成した扇状地の東側、大藏經寺山の南西麓にあたり、桜井町字山の神、通称内山にあることから、桜井内山支群の1つである。桜井内山支群（旧称、横根東支群）は東禪寺から北西方向の三ツ石集落へ登る農道に沿って、1～11号墳が分布する。7～10号墳はまとまっているが、8号墳は横穴式石室をもつ円墳であるが、10号墳は自然石の集まったもので古墳とはいえない。

9号墳は、11号墳のある上方から下がる泥流（安山岩塊とローム土を含む土石流）の尾根状に小高くなった山腹南斜面、標高315mから312mにかけて、勾配約20°の傾斜地につくられている。東と西側のブドウ畑に比べると2m高く、しかも石が圧倒的に多い地山の上に造られている。

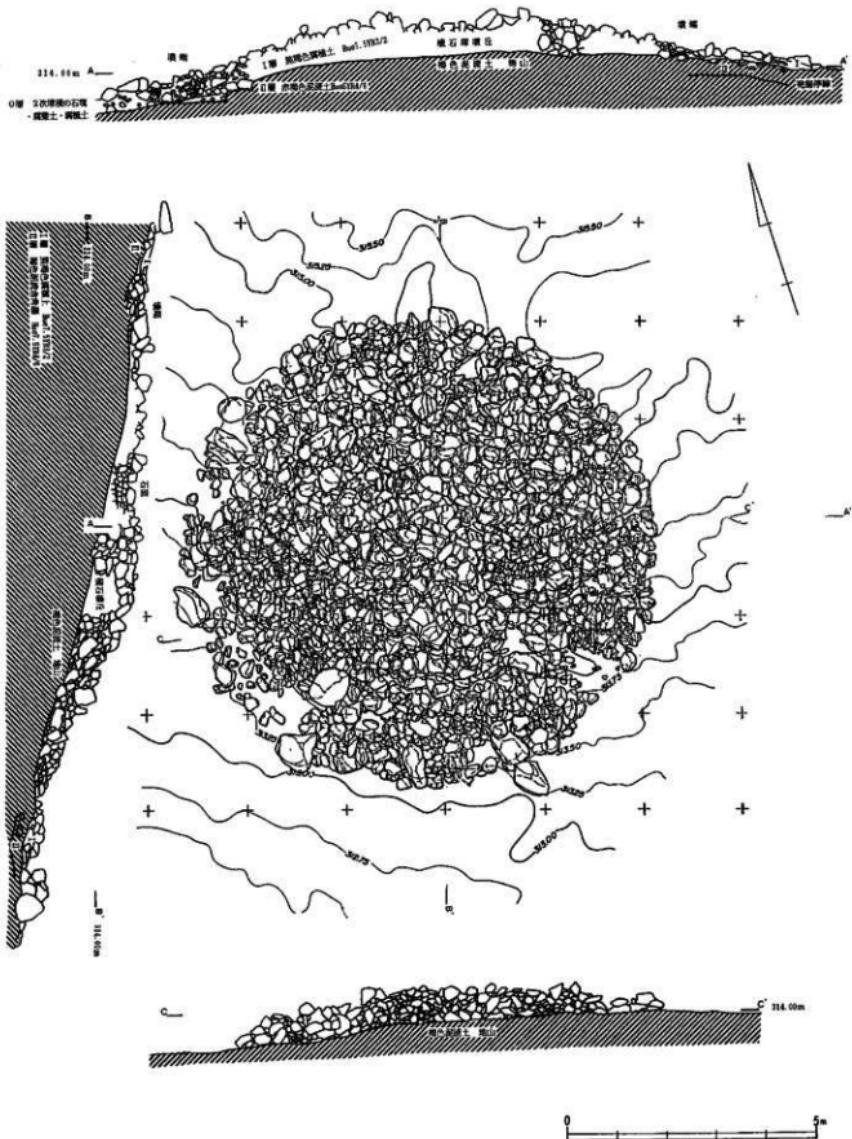
墳丘は、直径9.5m、高さ1.5mの積石塚の円墳である。墳丘は径10cmから径70cm位の輝石安山岩の石塊・礫を多層に盛っており、積石の間には褐色土は含まず、黒褐色の腐葉土を含むか、空いたままで、石と石を規則的に組み合わせなく、乱石積みである。墳丘南縁から西縁にかけて大きな石が地山から座わっており、おそらくこれらの大石を墳端の支柱として、周囲にある安山岩塊を積み重ねて、低い円錐台形の円墳を構築したものと考えられる。古墳の境界を示す外護列石や周溝はまったくみられない。

墳丘の用材となっているのは、灰色で黒色鉱物を含む複輝石安山岩で、水ヶ森火碎岩ともいわれ、甲府盆地北部の山塊や八人山、大藏經寺山の岩盤となっている石である。この泥流土に含まれる石・礫を寄せ集めて積石塚古墳としたもので、遠方から石材を運んできたとは考えにくい。

（十菱駿武）



第20図 桜井内山支群8・9号墳地形・区画図



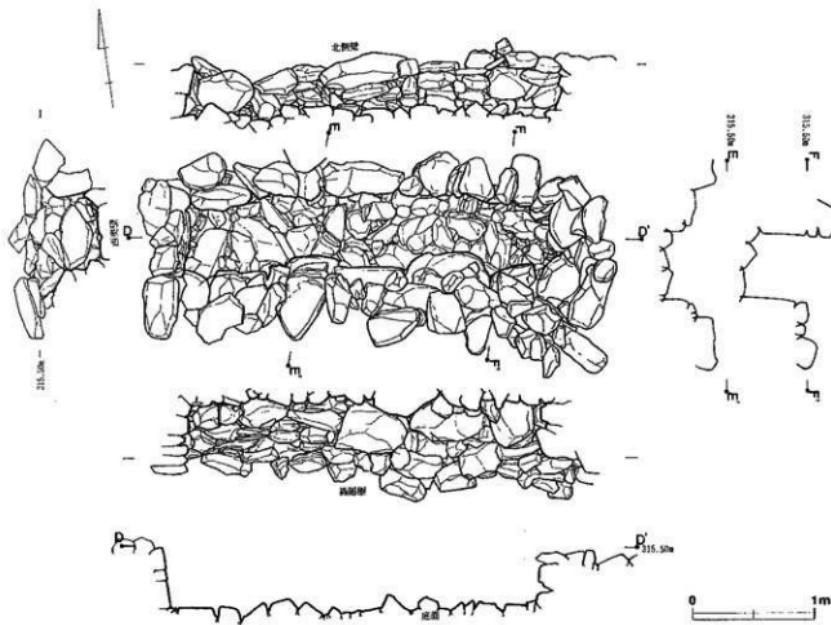
第21図 桜井内山支群9号墳平面図及び断面図

第4節 石室

墳丘中心より北部に寄って、東西に主軸をもつ石室が1か所検出された。C-5とD-5グリッドにまたがる位置である。

石室は長さ2.9m×幅0.6m×深さ0.4mの長方形で、主軸方位N-81°-Wではほぼ東西方向となり、主墳の主軸と仮定した傾斜方向とは直角とする形となる。

石室は墳丘を構成する石塊と同じ安山岩で、石の平らな面を石室内面として、小口積みか立石積みになっている。石室の西部、北壁と南壁の2~2.5mは、長径40~60cmの石の長辺の平らな面を1~2段積む形となっている。西壁には50×30cmの平らな石を立てており、奥壁の鏡石を意識したとみられる。これに対し、東壁および北壁と南壁の東部は、小口を壁面に向けた乱石積みで、閉塞部と考えられる。床は角礫がある凹凸面で、平石を數くような平面は意識されていない。石室内部の容積は、1人分位しかない。また石室の蓋（天井）となっていたと思われる大きな平石が墳丘南西に残されているのを見ると、堅穴系石室として、単数埋葬の主体部と思われる。



第22図 桜井内山支群9号墳石室実測図

このような堅穴系石室は、前期古墳に特徴的な堅穴式石室とは異なり、より小型で狭くまた横穴式石室の閉塞部と羨道の部分を遺している点で、横穴式石室の系譜を窺ぐ終末期古墳に特徴的な小石室または横穴式堅穴式石室と称するべきであろう。
(十賀駿式)

第5節 出土遺物

石室内から、金環1個、土師器破片27個、人骨片1個、獸骨2個、歯の歯4個が出土した。出土位置は第23図のドットマップのよう、甕、壺、壺の破片は石室の東半部に集中しており、また、東壁から0.7～0.8mの石室床面から金環と人骨片が出土している。さらに獸骨、歯は石室中央部の床面と石の下から出土している。

金環（第24図1）長径2.5cm×短径2.3cmの環状で、径5mmの断面円形である。環の空隙は3mmであり、重量は14gである。銅の地金に金アマルガム鍍金法で金張りしたもので、金は3割の遺存状態で、緑青をクリーニングすると金色の艶を保っている。

土師器（第24図2～9、図版39）いずれも破片で、2～6は石室内、7～9は墳丘中出土である。完形品は副葬されてない。2は壺形土器で復元径18cmの口縁部から胴部破片。黄褐色を呈し、粘土に黒色・赤色粒子を含むやや良好な胎土で、調整は内外面に横ナデされている。3～5は壺形土器の胴部で、褐色を呈し胎土は砂粒を含み粗くヘラケズリによる外面調整がされている。粘土帯の接合痕が内面には残っている。球形で復元径15～20cmである。6は灰褐色を呈する。壺形の須恵質土師器の頸部破片である。外面は横ナデ調整されており、内面には粘土帯接合痕とヘラによる暗文がある。7・8は壺形土師器の頸部から胴上部で、黄褐色を呈し、外面は横ナデ調整、内面は粘土帯接合痕を残す。9は、復元径11cm、高さ4cm、底径5cm位の壺形土師器で、灰褐色を呈し、やや固めの焼成である。体部外面は上半部は横ナデ、下半部は斜めヘラケズリで、底部は平らで全面ヘラケズリである。内面底部のみこみは画され、同心円状にヘラミガキされ、体部内面は放射状暗文がはっきりとみられる。

須恵器（第24図10）C-7グリッド墳表出土の平瓶形須恵器で、扁平球状の胴部の寄ったところに径6cmの口縁部がつく器形である。灰色で、外表面はあばた状に斑点があり、内面にはロクロ痕と胴心に同心円状の段がついている。

これら土師器、須恵器のうち年代判定のつくものは次のようにある。2の土師器は、御坂町二之宮遺跡西10号住居跡出土土師器坏Bに近いもので、古墳時代末期第2期（7世紀第2四半期）にあてられる。6の須恵質土師器壺は、古墳時代末期のものか。3・4・5・7は土師器壺で、頸部は球洞に開く口縁が付く古墳時代後期6世紀中頃の壺に似る部分があるが、壺は古墳時代末期7世紀にもあり、時期は特定できない。以上の石室出土土器の年代は7世紀第2四半期を中心とする7世紀中葉とみてよいと考えられる。

一方墳丘出土の土師器壺9は、器形とヘラミガキ、暗文の調整の特徴から、二之宮遺跡304号住居跡の壺と共に甲斐奈良平安時代七器編年四期（9世紀第4四半期）に比定される。須恵器平瓶（10）はロクロ技法で扁平な器形から、少なくとも8世紀代とみられる。墳丘・墳表の遺物は、古墳埋葬後の墓前祭祀品や後世の混入品とみられ、本墳の埋葬年代より遅れた奈良・平安時代の土器があってもさしつかえない。

（十菱駿武）

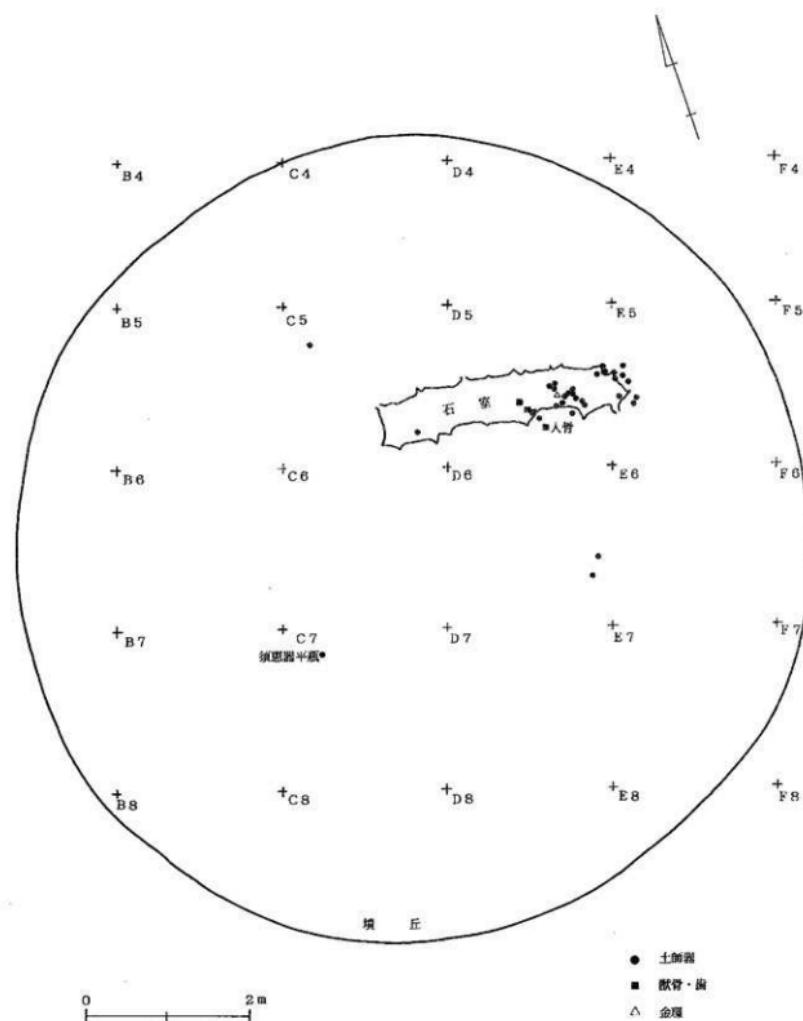
獸骨

石室内の獸骨は、骨片數片（部位不明）、臼齒〈乳齒〉5個、耳骨2個である。臼齒は径1～2cmで、上頸部の乳齒と思われる。耳骨は径2cm厚さ1cmの菱形で、2孔が両面にあいている。これらの獸骨は、シカの骨であり、しかも、幼いニホンジカの特徴を有しているものである。

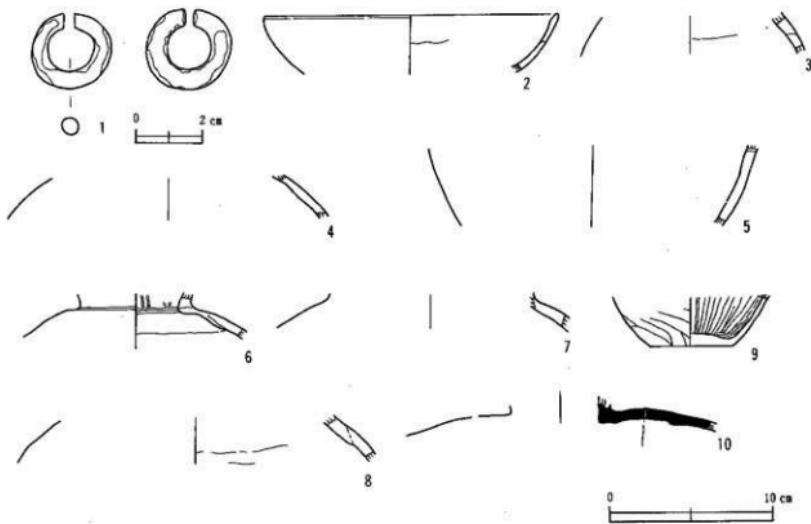
人骨

径2cmの骨片で、湾曲して厚さ2～3mm。断面に海綿状組織がみられ、人間の頭骨と判定される。部位、性別、年令は不明である。

（鈴木健夫）



第23図 桜井内山支群9号墳遺物分布図



第24図 桜井内山支群9号墳出土遺物

第6節 積石塚古墳の地形・地質的環境について

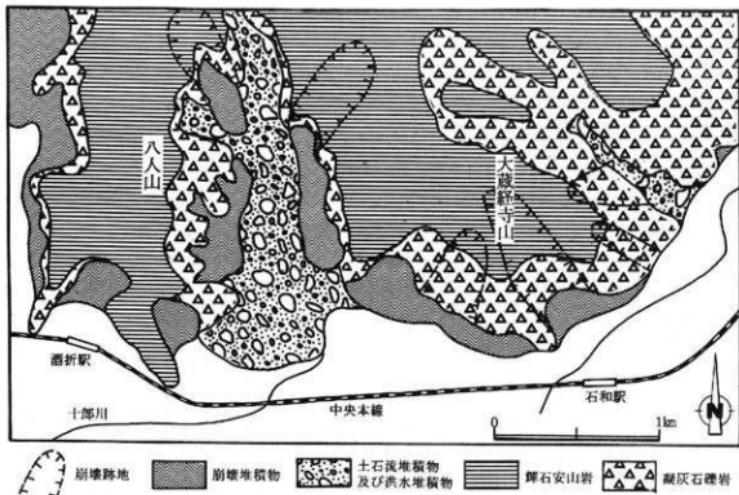
1. 地形・地質概要

積石塚古墳は甲府市横根町から春日居町篠目の北側の山地の谷部或いは山腹斜面に分布している。この積石塚古墳の分布している山地一帯は新生代第三紀の火山性堆積物からなる地域である。

この火山性堆積物は2層から構成されている。下位、即ち山腹斜面には直径10~30cmの輝石安山岩の亜角礫~亜円礫を主体とする凝灰角礫岩が分布している。上位、即ち、八人山・大藏経寺山等の尾根部には輝石安山岩の熔岩流が分布している。両層とも岩質的には同じである。この両層が山地一帯の基盤となっているが、この基盤を浸食して谷が形成されており、谷部内には基盤に由来する二次堆積物が厚く堆積している。また、山腹斜面の各所に大規模な崩壊跡地が認められ、この崩壊跡地脚部には崩壊性堆積物が分布している。

甲府市横根町の谷は本地域で最も大きい谷で積石塚古墳が多数分布している。本谷には土石流堆積物や洪水堆積物からなる二次堆積物が厚く堆積し、谷の出口では扇状地形を呈している。この二次堆積物は前述の基盤に由来するものであり、直径10~30cmの輝石安山岩の亜角礫~亜円礫を多量に含んでいる。また、土石流はその先頭部に巨礫を集中させて運搬する傾向があり、先端部に比較的大きな礫(岩石)が集中している堆積物を形成する。桜井内山支群9号墳はこの土石流先端部に構築されたものであり、この先端部に集中している礫を使用している。

横根町の谷を取りまく山腹斜面(谷壁斜面)には0次谷が多数発達している。これらの0次谷の多くは大規模な崩壊跡地であり、崩壊跡地脚部には崩壊堆積物が分布しており、また崩壊跡地以外の0次谷の末端部にも小規模な扇状地が発達している。これら崩壊堆積物上にも積石塚古墳が分布している。



第25図 積石塚古墳分布地域の地質

大藏経寺山の山腹斜面には大きな谷は発達していないが、大規模な崩壊跡地が認められ、この脚部にも崩壊堆積物が分布しており、この崩壊堆積物上に無名塚等の積石塚古墳が分布している。大藏経寺山の崩壊堆積物を構成する岩片は直径20cm以下のものが主体である。

2. 積石塚古墳を構成する岩石について

積石塚古墳を構成する岩石は輝石安山岩であり、本地域一帯の基盤である火山性堆積物に由来するものである。しかし、積石塚古墳の大部分は土石流堆積物や崩壊堆積物等の二次堆積物上に構築されていることから、古墳を構成している岩石は基盤から直接採取されたものではなく、これらの二次堆積物に含まれる岩石、特に地表部付近のものを使用したものと思われる。

古墳を構成する岩石に平面部を有するものがあるが、これは節理面であり人工的に切断等の加工の痕跡は認められない。また、岩石の大きさは古墳の立地条件に依存しており、比較的大きな岩片が入手可能な土石流堆積物や洪水堆積物上では大きな岩石を使用している。桜井内山支群9号墳はこの代表的な例である。一方、大藏経寺山山腹の積石塚古墳には比較的小さな岩石が多いが、これは前述の様に崩壊堆積物中に含まれる岩片が20cm以下の小さなものが多いことが原因である。

3. 積石塚古墳の構築技術の特殊性について

積石塚古墳の起源については渡来人説と環境自生説の論争がある。積石塚古墳の立地条件及び使用されている岩石の状況を整理すると次の様になる。

- ①積石塚古墳の大部分は二次堆積物上に構築されている。これは岩石の入手しやすさのためであろうと思われる。積石塚古墳が分布している地域では土がほとんど存在しない。
- ②積石塚古墳を構成する岩石は二次堆積物に含まれる岩石、特に地表部付近に分布するものを使用しており、岩石の移動量は小さいものと思われる。

③積石塚古墳を構成する岩石に人工的加工の痕跡は認められない。節理面を組み合わせて石室をつくっている。

以上のことから考えると、自然条件をうまく利用しているが、構築技術には特殊性は認めがたいと思われる。

(河西秀夫)

第7節 まとめ

桜井内山支群 9号墳の構造

〈墳丘〉

本墳は直径9.5m、高さ1.5mの積石塚の円墳である。墳丘は複雑な安山岩の山礫から成る純粹な積石塚古墳である。

墳丘を画する周溝や外護列石はなかった。

墳丘は、泥流の中に混在する安山岩の石塊を支えにして、石塊・礫を乱石積みで積み重ねたもので、斜面に作られた積石の墳丘を安定させるためだろう。

墳丘の規模は、横根・桜井積石塚古墳群全体では最小径4m～最大径13mであるから、直径9.5mの本墳は、古墳群のなかでは中規模クラスに属する。桜井内山支群では、8号墳(径7.5m、高1m)より大きく、7号墳と並ぶ大きさである。

〈石室〉

埋葬主体となる石室は、長さ2.9m×幅0.6m×深さ0.4mの長方形で、安山岩礫の小口積みと縦積みによっている。この埋葬施設は、四壁を石材で封鎖し天井を大きな平らな割石で蓋石とする点で、いわゆる竪穴式石室との共通性はあるが、その規模は前期古墳の竪穴式石室より小さく、また主軸と直交する方向に石室の長軸がある点で、前期の竪穴式石室と異なる。一方、短壁に鏡石を置く構築法は、『甲斐の古墳I』(甲斐古墳調査会1974)の横根支群5号墳の竪穴式石室を典型例として、横穴式石室と共に通する。横穴式石室では木古墳群の場合南北方向に主軸をもっていたものが、墳丘の直径も高さもより小規模になるために、埋葬施設の底面が平面になるように、東西方向に主軸を直交させた石室へ変えたものと思われる。竪穴式石室のはとんどが、斜面に直角に主軸をとる傾向が横根・桜井積石塚古墳群全体に認められているが、本墳の場合もこれにあてはまる。

本墳の石室主軸は、ほぼ東西方向であるが、埋葬頭位は石室東部に土器片が多く、金環と人骨頭部が東部の床面から出土していることから、東頭位をとるものと考えられ、石室の主軸方位はN-81°-Wとなる。

石室の規模・プランは、横根支群5号墳の竪穴式石室(長2.2m×幅0.5m×高0.6m)、横根支群6号墳の竪穴式石室(長2.9m×幅0.4m×高0.7m)と共に通している(甲斐古墳調査会1974)。すでに、横根・桜井積石塚古墳群の石室構造については類型化が試みられている。

I a型 竪穴系石室。長1.35～2.7m×幅0.5～0.7m×高0.4～0.6m。長壁小口積み、奥壁立石。主軸斜面に直角。

I b型 竪穴系石室。長2.2～2.3m×幅0.5m×高0.6m。長壁小口積み、奥壁・前壁は立石。主軸斜面に直角。

II型 竪穴式石室。長2.3m×幅0.9m×高0.6m。長壁・奥壁・前壁ともに小口積み。主軸は斜面方向。長さはI a, b型に近いが、幅が広く、IIIより小型なため、I a, b型とIII型の中間型式。

III型 竪穴式系石室。長3.7m×幅1.2m×高0.9m。長壁・奥壁・前壁ともに小口積み。石材が大

きく、石室規模が大型。主軸はほとんどが南北方向。

IV型 壱穴式石室?。長2~3m×幅1m×高1.5m。板石を立てかけて構築する箱式状石室。

これらの類型のうち、III型は横穴式石室と規模の点で共通点があり、I a、b型は小型化・簡略化されたものとみることから、III→II→I a、bの前後関係が推定されている。

以上、要約した『甲斐の古墳I』の小林広和氏の石室類型と前後関係は、概ね妥当なものといえ、本古墳の壹穴式石室はI a型にあたることになる。

〈石室の伴出遺物〉

本古墳の石室の確実な埋葬遺物は人骨頭部と金環である。金環は1対をなさないが、被葬者の耳を飾っていた装身具で、古墳後期の家長級の身分を示すとみてよいだろう。

土器類はいずれも破片で、完形で副葬されたとはいがたく、埋葬時または埋葬以降に破損して石室周辺へ遺存したものであるようだ。土器器塊・土器器壺・須恵質土器器壺は、7世紀第2四半期を前後する時期である。

この他、須恵器平瓶・甲斐型壺は、8世紀~9世紀で、古墳埋葬後の墓前祭祀品や後世の混入とみられ、直接本古墳の年代を決めるものではない。

また石室内出土のニホンジカ幼獣骨は、混入した可能性もあるが、意図的な出土遺物とすれば、鹿の頭部を埋葬時に供えたともいえるが、断定はできない。

〈年代観〉

石室は古墳時代後期の横穴式石室の退化型式である小型の横穴系壹穴式石室であることは確実である。石室からの年代観をより絞りこんでみよう。

長野市大室古墳群の場合、小型の箱式石室の壹穴式石室は94基あり、大半が7世紀後半とされている。

東京都秋川市瀬戸岡古墳群のなかでは、瀬戸岡5号墳の壹穴式石室（長2.4m×幅0.7m×高0.6m）が胴張長方形のプランながら、本古墳と類似する。河原石を小口積みにした長方形平面の壹穴式石室をもつ積石塚古墳は、石室の規格尺度が30cm単位の唐尺に適合し7世紀後半とされ、多摩川流域古墳の横穴式石室編年から、瀬戸岡5号墳は7世紀第3四半期、瀬戸岡4号墳は7世紀第4四半期に位置づけられると考えられている（池上1982）。

本墳の壹穴系石室は、大室古墳群と瀬戸岡古墳群の積石塚古墳の例から、7世紀第3四半期を前後する時期となる。共伴土器の年代を加味すると、7世紀中葉から7世紀後葉にかけてということになるであろう。

〈積石塚古墳の被葬者と性格〉

桜井内山支群は、大山沢川扇状地の東部につくられた10基から成る支群の群集墳である。発掘調査されたのは、9号墳のみであるが、横穴式石室4基、壹穴式石室1基、不明5基である。8号墳は両袖型横穴式石室で、6世紀後半頃とみられ、隣接する9号墳より半世紀位前に造営されたことになる。つまり桜井内山支群の古墳には時期差があり、しかも墓域を共有する同族集団の家長層の個人墓・家族墓ということになるだろう。

このような関係は、桜井東支群・桜井支群・横根支群A~D支群のそれぞれにもあてはまることといえ、なかでも大山沢川扇状地の中央を占める横根支群A群は中核集団といえよう。墳丘の相対的に大規模な大きさ、横穴式石室の卓越などは他の支群よりもまさる面といえる。

横根・桜井積石塚古墳群の成因については、環境自生説と渡来人説があるのは周知のことである。桜井内山支群9号墳の発掘調査結果では、積石塚墳丘は安山岩塊とローム質土壤を混在する雨滴状の土石流の高まりの尾根筋に造営され、土石流にある安山岩を墳丘構築材として多数用いたため、積石塚となつたことが考えられた。地質学的河西秀夫(1981)梨学院大学教授助手の所見もこのことを実証した。このこと

は「積石塚古墳環境自生説」を補強するようであるが、事は単純でない。

横根・桜井積石塚古墳群については「甲斐の牧と関連する渡来人墳墓説」が飯島進・小林広和氏によつて主張されている。横根・桜井に145基もの積石塚古墳が集中する理由は、そこに石が沢山あるからでは不足であり、6～7世紀になぜ密集するのか説明しきれない。横根山田古墳など盛土古墳を含めて、横根・桜井古墳群の具体的・個別的な内部構造、副葬品の時期や文献資料との検証が必要であろう。内部構造については石室プランの胴張型石室や合掌型石室があれば、渡来系工人による構築といい得るだろう。また、馬具・装身具など副葬品に朝鮮・中国からの渡来品と断定できるものがあれば、渡来人墳墓説の有力な証拠となしうるであろう。

今のところ、横根支群のいくつかにある胴張型石室、横根支群39号墳石室で、古代の木骨馬に近い中形馬の骨が出土したことがあげられる。馬骨は副葬されたものと考えられ、39号墳の被葬者が中形馬を飼養していた馬飼い・集団牧人の有力家長層と考える。とすると、横根・桜井積石塚古墳群は6～7世紀に東国に移った朝鮮北部・南部の渡来人とも関係があつても良いと思う。しかし現状では、証拠不十分であり、各積石塚古墳の充分な吟味が必要であろう。

(十菱駿武)

文献

- 甲斐古墳調査会 1974 「甲斐の古墳Ⅰ」
- 池上 悟 1982 「南武藏・多摩川流域における横穴式石室の導入と展開」『物質文化』No.39
- 十菱駿武 1987 「多摩の古墳と渡来文化」『多摩のあゆみ』47号

第V章 資 料

第1節 山梨県における積石塚の分布と研究の現状

1. 積石塚の分布

山梨県においては、現在までに170基余りの積石塚が確認されている。山本寿々雄氏によれば甲府盆地西部では南巨摩郡増穂町馬門付近に2基、盆地南東部から東部地域では東八代郡農富村と同郡境川村藤垈に1基が、同御坂町には井之上に1基、金川原地区・下黒駒長出にもそれぞれ3基ほどがあったことが報告されている。⁽¹⁾しかしながら現在確認できる例は一例もなく、知られているものはそのほとんどが盆地北縁の山間部に集中している。盆地北縁部地域では甲府市の八人山（標高574m）から甲府市と東八代郡石和町にまたがる大藏經寺山（標高715m）の南側斜面および東山梨郡春日居町の吾妻屋山（標高798m）西斜面にかけて広く分布している。

分布域は大きくは、甲府市の北西部・北東部、石和町北縁部、春日居町北縁部に分けることができる。以下、各分布域の様相について概略する。

（1）甲府北縁部地域

甲府市北縁部には、横根・桜井積石塚古墳群のはかにも多くの古墳が分布している。市域の北西部には千塚・山宮古墳群が知られる。宅地化が進み、現在遺された古墳はほとんどないが、『甲斐国志』には「無名ノ古塚多シ破壊シテ今分明ナラズ蓋村名起所ナリ」とみえ、かつては多くの古墳が存在したことが窺える。その中で、県立あけぼの学園敷地内にあった2基ないし3基のうちに積石塚があった可能性が指摘されている。また、『西山梨郡志』によれば、攀桂寺の北に所在した薬師塚は、「小石集積の塚」であったと伝えられている。いずれも平坦地に位置し、伝えられているように積石塚であったとするならば立地条件には注意をしなければならない。

千塚・山宮古墳群を望む羽黒山山頂（標高491m）に、1基のみ「山頂単独積石塚」とでもいるべき古墳が占地している。羽黒山古墳である。墳丘端には荒木大神宮が祀られており、墳丘上にも剣が立てられ信仰の対象となっている。内部主体は不明であるが過去に刀剣等が出土したとされるものの、詳細は明らかでない。直径30m、高さ6mを測る円墳で、甲府盆地においては最大規模の積石塚である。⁽²⁾

盆地北西部に張り出した湯村山（標高446m）南東および西斜面には10数基からなる湯村山古墳群が点在している。古墳群はその分布から東西両支群に分けられるが、本古墳群中東支群1号墳のみが積石塚として知られている。直径15m、高さ3mを測る円墳である。内部主体は横穴式石室で南に開口している。石室全長5.3m、幅1.58m、高さ1.66mを測る。奥壁と側壁の連結部は斜位に架構されており、石室プランは胴張型を呈する。その他『甲斐の落葉』に「甲府在湯村ニ蝙蝠塚トイヘル石塚二ツアリ盛ルニ土ナク小石片ノミナ落チタルモノ乎始ヨリナク造リカ詳ナラズ」と記述されている。先の『西山梨郡志』には、「かふもり塚」として記載されており、「湯村鹽澤寺の裏山にして、射的場の東南に隣接してみて二個ある」とある。この古墳は立地や2基の古墳が隣接していること、石室の規模などから大平1・2号墳であると推察される。ちなみに大平1・2号墳は盛上墳である。

夢見山（標高441m）と大笠山（標高549m）に挟まれた南傾斜面に北からニッ塚古墳群、大笠山古墳群、夢見山古墳群が点在している。いずれも2基ないし3基の小規模な古墳群である。そのうち、おそらくニッ塚古墳群かと思われるものが、積石塚であったと報告されている。遺された古墳の墳丘上には礫が認められるものの顕著には認められず、積石塚とするには問題があろう。

したがって、現在のところ甲府市域において横根・桜井積石塚古墳群以外に積石塚と確認できるものは、羽黒山古墳、湯村山古墳群東支群1号墳のみである。

(2) 石和地区

東八代郡石和町に分布する大藏経寺山古墳群は、大藏経寺山南斜面標高280m付近から420m付近に分布しており、19基の積石塚の存在が知られている。うち3基は消滅している。

古墳群はその分布から大きく3群に分けることができる。大藏経寺北側の標高300m前後に分布する大藏経寺裏支群は6基からなる。墳丘径10~12mを測り、南西に開口する横穴式石室を有するものが多い。そのうち15号墳が発掘調査され、径12mを測る円墳で無袖型の横穴式石室を有することが判明した。出土遺物としては土器類のほかに刀子・鉄鎌等の鉄器、金環・管玉をはじめとする装飾品類などが出土している。

大藏経寺裏支群の北東250mほどの所、標高350~400m付近には七ヶ石支群がある。現在は5基が存在する。本支群は墳丘径8mほどを測り、大藏経寺裏支群よりやや小型のものである。内部主体は横穴式石室が知られており、南に開口している。また、本支群中より馬具、直刀、鉄鎌などが出土している。出土遺物は耕作中発見されたものであり、出土古墳が盛土塚なのか積石塚であるのかは不明であるが、本支群の古墳はすべて積石塚であり、積石塚である可能性が高いことが指摘されている。

大藏経寺山から南東へ張り出した尾根付近、標高500m付近に所在する鞍掛塚古墳は直径10mを測り、東西に主軸をとる2.5mほどの堅穴式石室を有する。かつてはこの古墳も「山頂単独積石塚」とされてきたが、分布調査の結果、周辺にも3基の積石塚の存在が確認された。鞍掛塚古墳の北、標高550m付近に所在する古墳も東西に主軸をとる堅穴式石室を持つことが確認されている。

(3) 春日居地区

東山梨郡春日居町に分布する春日居古墳群は、大藏経寺山（標高715m）と吾妻屋山（標高798m）に挟まれた南斜面を中心として標高770m付近から280m付近まで点在し広い分布を見せる古墳群である。古墳は41基が知られており、そのうち積石塚は14基を数える。積石塚は笛原塚支群のみがまとまりをもつが、他は散在する傾向にある。笛原塚3号墳は本県における初めての積石塚発掘調査例であり、石室全長3.25mを測る小規模な横穴式石室が発見された。石室は大きく破壊を受けており、出土遺物としては鉄鎌だけが確認されている。他地域に比べ本古墳群の積石塚は規模が大きく、墳丘が10mを越えるものが13基中4基を数える。なかでも山伏塚古墳は直径16m、石室全長8m、幅約1.8mを測る。これは本古墳群中において最大規模にちかく、盆地内の盛土塚と比較しても大型の古墳として位置づけることができる。のほか、備前塚古墳が墳丘径15mを測るなど、比較的大型の積石塚がみられる地域である。また、内部主体が明らかな10基中9基までが両袖型のプランをもつ横穴式石室であり、墳丘規模・石室構造ともに他地域の積石塚とは様相を異にする。

以上が甲府盆地における積石塚の分布概要であるが、その分布に大きな片寄りがあることが理解される。甲府北縁部および石和地区においては群在する傾向がみられるが、北西部では分布が希薄で群集傾向ではなく、1基のみ点在する傾向にあるといえる。

2. 積石塚研究の現状

(1) 古墳群の石室構造

横根・桜井積石塚古墳群の石室構造の細分と変遷については、先学によっていくつかの試案が出されている。小林広和氏は堅穴式石室をその規模、構築方法から石室長・幅とともに小型のもの（第Ia型）、

石室幅は第I a型と同じであるが主軸長がやや長いもの（第I b型）、第I型と第III型の中間形態（第II型）、石室が大型となるもの（第III型）、板状の石を立てかけるように用いたもの（第IV型）の5つに分類し、IからIII型については石室規模の大きなものから小さなものの変化を想定し、III→II→I a、bと推移するとしている。また、古墳の石室が立地する地形に並行するものと直交するものについては、石室が並行するものは「石室が小形であるので、斜面にそって設けた場合、石室の保存は、耐久性、構築技法等に非常に無理」があるとし、その要因を立地環境に左右された技術的な問題であるとしている。⁽²⁾

坂本美夫氏は甲府盆地北縁部の積石塚について触れ、横穴式石室を両袖式と無袖式に大別し、両袖式石室を大型のもの（I a類）、小型のもの（I b類）として玄門付きの石室はII類としている。無袖式石室も奥壁を広口積みにし、側壁を小口積みにするもの（I類）、石室規模の小型のもの（III類）としている。豊穴式石室については広口ないし小口で積まれるもの（I類）、小口で積まれ胴張傾向にあるもの（II類）として分類している。⁽³⁾ 氏はその後の調査成果を踏まえ、本県の横穴式石室の推移については、無袖式の豊穴式石室が両袖式の横穴式石室に先行する可能性が高いことを指摘している。

橋本博文氏は豊穴系の石室について「小口積みから広口積みへ、さらに箱式棺状に板石を立てるものへという変遷」を想定している。また、高位にある豊穴系石室をもつものは豊穴式石室に先行するとしている。

ここで横根・桜井積石塚古墳群における古墳の主軸方向が地形の等高線に対しどのような方向を示すかについて調べてみるとこととする。等高線に対し主軸が並行するものについてみてみると、各支・小支群の周辺部に位置する傾向にあるといえる。横根支群では、八人山東斜面において横根支群39号墳が支群の中で最下位にあり、横根支群95号墳が高位に位置している。また、大山沢川左岸の古墳がもっとも密集する地区においても横根支群14号墳が群の高位に位置している。桜井内山・桜井支群では群の周辺部に位置している。現在判明しているこれらの古墳12基のうち、墳丘径9m以上になるものは8基を数え、概して大型墳が多い傾向といえよう。加えて、横根支群39号墳は石室全長6.2m、幅1mを測り、狭長な豊穴式石室となっている。これは現在知られているなかでは、本古墳群中最大規模となるものである。石室の構築方法も奥壁こそ鏡石状に1枚石を用いるものの、側壁は板状の石を用いて丁寧に小口積みしている。横根支群14号墳も入口部が不明となっているものの、全長5m以上を測り、大型の豊穴式石室であるとができる。また、39号墳同様側壁は板石を用いて端正に小口積みし、奥壁も底部に大型の石を広口に積むものの、その上には板石を小口積みしている。

ところで、積石塚の年代については、横根支群周辺から採集された灰陶陶器から8～9世紀代とされており、桜井B号墳から出土した珠文鏡・勾玉については7世紀代を測るものではないとされていた。加えて、笛原塚3号墳の調査においても、7世紀代を測る資料は確認されなかった。その後、一部では6世紀代に遡る可能性も指摘されながら、発掘調査の結果を待たざるを得ない状況にあった。ようやく横根支群39号墳の発掘調査によって、出土遺物の一部が6世紀中葉頃に比定されるものもみられ、初めて本県の積石塚の初現が6世紀代に遡ることが確実となった。また、大蔵経寺山15号墳の調査においても、6世紀代に遡る資料が提示されることとなった。

橋本博文氏は積石塚の出現について触れ、「私見では、小林三郎氏のいうA類の珠文鏡と片面穿孔ではあるものの6・7世紀のC字形勾玉の形態を呈しないC字形仕上げ研磨の入念な良質の瑪瑙製勾玉を作出した桜井1号墳は、5世紀代にはいる可能性が高いものと考えられる」として、積石塚の初現を5世紀代に想定している。加えて、積石塚における豊穴式石室が豊穴式石室に先行するという前提に立ち、古墳群の高位に位置する豊穴式石室を「5世紀代にさかのぼる可能性がある」としている。⁽⁴⁾

桜井B号墳出土の珠文鏡は小林三郎氏分類では珠文が一列でありA類に該当し、氏はそのなかで年代について触れ、5世紀前半としている。この珠文を一列巡らす例は珠文鏡の出土古墳のなかでは古式な例が多く、4世紀末から5世紀代に比定される古墳からの出土例が多いようである。

第I章第3節でも触れたが、これまで桜井支群1号墳出土とされた珠文鏡と勾玉は4号墳に隣接し現在は消滅した古墳であった可能性が高いことが明らかとなつた。そのため、内部主体の検討など遺構による年代の特定はできない。桜井B号墳は支群および木古墳群において下位に位置する。これまでの調査によって下位に位置する古墳はほとんどが横穴式石室を有する古墳であり、堅穴式石室を有する古墳はわずかに横根支群22・35号墳に認められるだけである。また、当時の測量図によると石室は4mとされている。これまでに確認されている堅穴式石室の規模は横根支群10号墳の3.5mが最大であり、4mとなるような規模のものは知られていない。これらのことからすると桜井B号墳は横穴式石室であった可能性が高い。甲府盆地や周辺地域における横穴式石室の導入は、6世紀第2四半期頃と考えられるため、出土古墳が横穴式石室墳と仮定するならば、5世紀代とすることはできない。珠文鏡A類とされる例は6世紀代においても多くの類例が知られており、瑪瑙製勾玉は甲府盆地においては後期古墳からの出土が顕著である。いずれにしても桜井B号墳が本県初現期の積石塚の1基として位置づけられるることは確かであろう。

横根支群39号墳および大藏経寺山15号墳が6世紀中葉頃に比定され、B号墳がさらに遡ることが想定されている。前二者の主体部は、等高線に対し並行して構築された横穴式石室を有するものである。加えて狹長な無袖型の形態をとる。既述したように、等高線に対し並行して石室が構築される横穴式石室墳は、大型の石室構造をもち、端正な小口積みによって積まれている例が見受けられる。したがってこの形態をもつ古墳が、甲府盆地北縁部地域における積石塚において、初現的な横穴式石室墳であることが想定される。

これは石室構築において端正なものからより簡略化されたものへという傾向を窺うことができ、橋本博文氏が想定した、堅穴式石室の小口積みから広口積みへさらに右棺系石室への変遷と符合するところがある。桜井内山支群9号墳の石室などは、横穴式石室の退化形式としての堅穴系横穴式石室であるが、他の堅穴式石室の多くも複次葬から單次葬へ移行する時期の所産と考えられる。しかし、端正な小口積みによって構築された一部の堅穴式石室は、横穴式石室に先行するのか、退化形式として横穴式石室に後出するものなのかは出土遺物等によって検証されではおらず、今後の調査を待たなければならない。

(2) 積石塚と盛土墳の位置関係について

積石塚が主に石を用いて墳丘を構築している関係上、その積石塚の成因および性格を考える上で比較検討しなければならないものの一つに盛土墳との関係がある。

春日居古墳群では積石塚は御室山古墳（標高310m付近）を除いては、すべて標高380m以上に立地しており、標高380m以上に立地する盛土墳も輪廻塚・菩提塚古墳・梅沢1号墳の3基のみである。したがって以前から指摘されているように、盛土墳と積石塚ではその分布域において完全に色分けされているといつてよいであろう。

石和地域の古墳群においても積石塚古墳群は大藏経寺山南斜面に広く分布しており、いくつかの支群として把握できそうである。大藏経寺や物部神社の立地する傾斜変換線付近と平等川に挟まれた寺の前地区には大藏経寺前古墳群があり、現存する古墳3基と消滅した古墳1基が知られている。現存する3基はいずれも石室の一部と思われるものが露出しており、横穴式石室墳であることが推定されている。出土遺物等はまったく知られていない。墳丘は開墾等によって破壊が著しいが、いずれも盛土墳であることが確認されている。このように石和町北部における古墳分布のあり方は、積石塚は大藏経寺山南斜

面に限って分布し、盛土墳は平坦面のみに構築されている。おたがいに混在する状況はまったくみられない。

横根・桜井積石塚古墳群においても石和町北縁部の古墳群同様、傾斜変換線を境として、斜面に積石塚古墳群が広く分布し、前面の平坦地には盛土墳が知られる。横根山田古墳は墳丘の上半部が削平されており、主体部も基底部だけを遺すのみであるが、直径23.5m以上を測る円墳である。内部主体は南北に主軸をとり、主軸長7.45m、幅2.27mを測る大型の横穴式石室をもつ。詳細は不明であるが土器片、金環等が出土したと伝えられている。横根山田古墳の東側には村内1号墳や2号墳が存在したらしいが、いずれも現在は全廃している。⁽³⁾ 以上の3基が横根・桜井積石塚古墳群の前面に展開する平坦地に所在する盛土墳として知られている例であり、現在のところ平坦地には積石塚の分布はまったくみられない状況にある。

しかしながら、本積石塚古墳群の中で特異な様相を呈している例が若干ではあるが見受けられる。桜井支群24号墳（天王社古墳）は、直径14.7m×11.3m、高さ2.0mを測る円墳である。墳丘には僅かに大型の礫がみられるのみで盛土墳といえる。墳丘からは土器片が採集されているが、いずれも小破片であり年代の判明するものはみられない。桜井内山支群1号墳・桜井東支群2号墳はともに墳丘に礫は認められるものの、土も多く露出しており、土石混合墳ともいべき様相を呈している。桜井支群24号墳を含めこれらの古墳は、周辺に礫ばかりではなく、土もある程度露出した状況にある。横根支群82号墳などが分布する一群は現在ブドウ畑の中にあり、周辺には比較的に土が豊富にある地帯である。これらの古墳はほとんどが石室の基底部のみを遺すだけであり墳丘については不明であるが、主体部周辺にはあまり礫は認められない。したがってこれらが、盛土墳ないし土石混合墳の様相を呈していた可能性は十分にあろう。

湯村山古墳群東支群では位置的に最下位にあり、1基のみ単独で所在する1号墳のみが積石塚で、それより高所に位置する5基の古墳は盛土墳である。

以上のように、積石塚と盛土墳ではその分布域に大きな差異をみせる。春日居・石和地域では両者が混在する状況ではなく、位置的に前者が高所に位置し、後者が斜面下位および斜面前方に広がる平坦面に位置する状況にある。横根・桜井積石塚古墳群周辺では巨視的には積石塚と盛土墳の分布がある程度分かれたり同様な状況にあるが、一部においては積石塚古墳群の中に盛土墳ないし土石混合墳が点在しており、やや様相を異なる。湯村山古墳群東支群では両者の分布が分かれる点では同様であるが、両者の位置関係では逆転傾向にある。

したがって現状での積石塚と盛土墳の分布は混在傾向ではなく、それぞれ分離しているといえる。加えて、それぞれの古墳が立地する周辺の地質的環境と等質的な墳丘の構築用材を採用している状況にあるといえるであろう。

（3）積石塚の性格について

積石塚は視覚的に通常の盛土墳と異なるために、常に被葬者の性格ないしは積石塚が構築されるに至った過程が問題にされる。被葬者については、積石塚が朝鮮半島にみられることから積石塚の起源を大陸に求め渡来人の墳墓であるとする「被葬者渡来人説」と、古墳が立地する周辺には礫が豊富に認められる場合が多いためその成因を自然環境に求めた「環境自生説」とがある。両者は古くから対峙している状況にあるといえる。

被葬者渡来人説は、積石塚が多く分布する信濃・甲斐には朝鮮半島系の渡来人が多く移住したことが文献より明らかとなっていることから、両者を結びつけたところから出発している。⁽⁴⁾ その後、齊藤忠氏によって信濃の積石塚にみられる合掌型石室類似のものが朝鮮半島の百濟にみされることを紹介された

ことにより、⁽²⁸⁾被葬者渡来人説は急速に論を展開していった。

その後も大場若雄、一志茂樹、大塚初重、桐原健の各氏等によって、考古学・文献史学の両面から積石塚の被葬者渡来人説が盛んに検証されていった。それらのうちには積石塚が多く分布する長野県高井郡には、御牧としての人宗牧・高井牧が設置されており、牧の經營に渡来人が深く関わったであろうことを推察している論もみられる。これらの諸説は、積石塚・渡来人・牧場経営が三位一体となり、その後の積石塚被葬者渡来人説の根幹をなしている。

環境自生説については斎藤忠氏が、朝鮮半島とくに高句麗と結びつけるには地理的にかけ離れすぎていることや、高句麗からの移住者は平城遷都後渡来しており、積石塚が遷都後には造られていないことなどから環境自生説をとっている。しかしながら、東日本とくに信濃の場合には渡来人と結びつけられる可能性があることを示唆している。⁽²⁹⁾

以上のように、積石塚の研究は考古学および文献資料が多く残されている信濃を中心にして論じられてきたといえる。斎藤忠氏がいとうように、立地環境および年代的に隔たりがあり、西日本と東日本の積石塚を分けて考察する必要があるとする考え方もあるが、東日本の積石塚にも古く遡る例があることから分けで考える必要はないといいう見解もみられる。⁽³⁰⁾

それでは甲府盆地の場合にはどうであろうか。甲府盆地においても二説があり、決着をみていないといえる。

橋本博文氏は付近に存在する寺本庵寺や甲斐国分寺に百濟系の瓦が使用されていることから、百濟系渡来工人の関与があったことを想定し、被葬者渡来人説をとっている。

それに対し、坂本美夫氏は、

- ①積石塚の分布する甲府盆地北縁部一帯は地質的に複輝石安山岩と水ヶ森火碎岩類が露出していること。
- ②朝鮮半島の積石塚とわが国の積石塚では構築方法が異なること。
- ③高句麗人が多く居住したことによるとされている巨麻郡には積石塚がほとんど確認されていない。
- ④渡来系神社と積石塚の分布では合致しない。
- ⑤積石塚が分布する前面に展開する集落遺跡は積石塚が構築される以前から形成されている伝統的集落が多くみられる。

などの理由をあげ、環境自生説をとっている。⁽³¹⁾

また、桜井内山支群9号墳の調査では、安山岩疊の多い土石流堆積物上に構築されており、環境自生説を補強する調査結果となったと報告されている。

筆者も以前、積石塚について一瞥し、積石塚の分布する地域は後の山梨・巨麻郡の境界あたりに渡来系族を集住させていたことになり、後の郡郷配置においても不自然であるとともに向地域にまたがる集落遺跡においても渡来人と関係するものが発見されていないこと、積石塚の出土遺物には渡来人を想定させるような遺物が確認されていないことなどから、被葬者渡来人説には否定的な見解を述べたことがある。

確かに信濃の場合のように、文献からは渡来人が数多く甲斐に移住してきたことが判明している。『続日本紀』垂亀2年5月辛卯条に「以駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野七国高麗人千七百九十九人遷于武藏國始置高麗郡焉」とあり、甲斐の地にも高句麗人が居住していたことが窺える。加えてそれ以前の7世紀段階にも渡来人が甲斐にいたらしいことは文献により推察されている。さらに遡って4~5世紀段階に渡来人の移住があったことを想定する見解も出されている。⁽³²⁾

また、信濃で想定されている御牧との関連については、甲斐においても總坂牧・真衣野牧・柏前牧の三牧があったことが知られている。しかしながら、甲斐の三牧についてはいくつかの論考が出され、その所在は定説をみていないが、三牧とも現北巨麻郡下に比定されていることでは大方の一一致をみている。

「甲斐の黒駒」に代表される馬銅いが御收成立以前にあったことは推察されるところであるが、本県の積石塚が密集している地域とは位置的に大きな隔たりがあるといわなければならない。

もちろん、東八代郡境川村で確認されている須恵器窯跡や横根・桜井積石塚古墳群の前面に展開する瓦窯跡などの存在から、甲斐の国に渡来系技術者集団の存在は推定されるところであり、彼らの技術によるところは大だったと考えられ、渡来系集団の存在そのものを否定するものではない。けれども、それが積石塚と直ちに結びつくものではない。甲斐の古墳総数に対する積石塚の割合は、20%ほどとなり、全県的にみても大きな割合を占めているといえる。これが積石塚の集中する盆地北縁部地域についてみてみると、甲府市域では64%、石和地区70%、春日居地区34%となり、占める割合は非常に高くなっている。このことは、盆地内の生産遺跡や馬匹の実態からみて、盆地内に拡散したであろう渡来系技術者集団を、「何らかの要因で墓域を共同にさせられた結果」とみるべきなのであろうか。大塚初重氏が指摘するように、すべての積石塚を同レベルとして扱い、すべてを渡来系氏族の墳墓とするには問題があるのでないか。

盆地北縁に広がる積石塚古墳群の前面には、平等川によって形成された肥沃な沖積地が展開している。この沖積地の微高地上には、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が一面に分布しており、古墳時代後期にも数多くの集落が形成されていたことが推測される。平坦面に展開する集落群に対し、積石塚を除いた古墳の数は僅かなものであり、積石塚すべてを渡来人系の墳墓とすることには賛成できない。

いずれにせよ、甲斐における積石塚に関する資料から、被葬者渡来人説を積極的に肯定する材料は、現在のところ見あたらないというのが現状であると考える。

甲斐に限ったことではないが、それ以前に、積石塚の定義自体が研究者の間で必ずしも一致しているとはいえない状況にある。積石塚とは石によって墳丘が構築された古墳をさすが、全国的にみても純粹に礫だけを用いて墳丘を構築する例は大勢を占めておらず、礫のみではなく、土も同時に使用している例も積石塚として扱われる例がほとんどである。

大室古墳群では古い段階の古墳には純粹な積石塚が多くみられるが、7世紀代になると土石混合墳が多いという。これについては後藤守一氏がいう退廻の姿の積石塚と同様なものとして理解されるものだろうか。しかしながら、以上のような形態の異なる積石塚を同レベルのものとして扱うことには慎重でなければならないと考える。時間的な差異はもちろん、周辺の立地環境、古墳群内でのあり方などを考慮しなければならないであろう。

これらの構築方法の違いが、果たして年代的な差異によってのみみられる現象なのであろうか。甲府盆地においては古墳が立地する周辺に上の露出が多くみられる場合、土石混合墳となる例がみられる。

(4) 今後の積石塚研究の課題

積石塚をめぐる問題は非常に複雑な様相を呈しているといえる。大塚初重氏は先にその論考の中で「積土か積み石かの差異のみで、特殊な性格の古墳と断定するのは早計である。墳丘の問題以外に、内部構造と副葬品の内容に被葬者の特性を示す事実が存在するかどうかを究明してみる必要はありはないか」と述べ、積石塚研究の方向性を示唆している。

積石塚の研究は、通常の古墳とは異なって墳丘の構築用材に礫を用いることが研究の出発点になってきた。したがって積石塚の系譜と性格を考える上で、礫の使用が重要な位置を占めているといえる。だが、現状ではそれに捕らわれすぎることによって、見失っている部分も多いのではないだろうか。

積石塚を地域における一群集墳として、地域における存在意義を検討することも必要と思われる。甲斐の積石塚は、盛上の群集墳と比較していくつかの相違をみることがある。

まず、積石塚古墳は群集傾向にあり、密集度が高いといえる。墳丘についても比較的小規模なものが

多く、主体部は竪穴系の石室が多い傾向にあることなどが指摘できよう。

密集する群集墳については、横根支群の下位に位置する一群がもっとも特徴的であるが、これら積石塚群は立地からみても、傾斜面にほとんどが分布している。

墳丘の規模も総じて小型であり、直径10mを越えるものはそれほど多ではない。同様な時期に形成されていたと考えられる盛土群集墳に比べ、小規模な墳丘といえる。墳丘同様主体部も小型であり、4mを越えるものは極端に少なく、3m前後のものが多数を占める。その中に竪穴系の石室が多いことも注目されよう。竪穴系の石室の多くは横穴式石室の退化形式として捉えることが可能であり、複次埋葬から単次埋葬への移行期に構築されたものと考えられる。近年の盛土群集墳の調査においても、竪穴系の石室および、横穴式石室の形態はとるもの、横穴式石室の機能を果たすことができない例などがみられるが、群に対して非常に小数であり、積石塚古墳群はどの高い割合を占めることはない。また、それらが群をなす横根支群7号墳を中心として分布のあり方をするものは確認されていない。

複次埋葬から単次埋葬への移行は、古墳建築停止に向かう大きな歴史的変遷として認めることが可能であるが、甲斐においては桜井内山支群9号墳、一宮町四ツ塚古墳群13号墳などの調査例から、竪穴系の横穴式石室も含め、7世紀後半になされたものと考えられる。したがって、単次埋葬が多くみられる本郷石塚古墳群においては、古墳の造営が他地域より長く行われていたか、単次葬への規制を強く受けている地域といふことができる。このことが、何に起因するものなのかは不明であるが、本古墳群の性格づけに関する一つの重要な要素として捉えることができよう。

積石塚古墳群の立地・密集度・墳丘・石室規模等からみると、前面ないし周辺に存在する盛土墳との格差を想定せざるを得ない。これらの積石塚古墳群は、辰巳和弘氏が指摘する「密集型群集墳」として捉えることができ、その性格づけに関しても同様なものが想定される。これらの格差が積石塚の性格を究明する上で、重要な鍵となるものであろう。

(5) おわりに

積石塚研究にとって、積石塚古墳群のみの検討では解明できない部分も多いと思われる。積石塚古墳群の歴史的位置づけは、それのみの追究によって達成されるものではない。地域における他の積石塚および盛上古墳群との比較検討の中から、その特色を見いだすことが肝要ではないだろうか。

それにしても、甲斐における積石塚の研究は、やっとその分布がほぼ明らかになり、緒についたばかりといえる。積石塚研究の先進地である信濃では、学術的な調査が継続的に行われており、合掌型石室墳の問題も含め、積石塚の初現について明らかにされつつある。

甲斐の積石塚も遺構の性格上、そのほとんどが盜掘を受けており、副葬品の全容を明らかにすることはできないものの、幸いにして遺構の保存状態は良好なものが多い。この調査報告書は、170基余り存在する山梨県内の積石塚のうちの2基の発掘調査報告と横根・桜井積石塚古墳群の分布調査の結果報告にすぎない。分布調査の性格上、確実な積石塚であるのか、また内部主体の構造や計測値などについて実際とは異なるものが多くあると思われる。それらについては今後の継続的な調査・研究によって修正していくければと考える。

しかしながら、飯島進氏らによる調査から20年、第1回の山梨県考古学会の分布調査から10年が経過しているが、完全なものではないにしろこの分布調査報告書が刊行されることには、今後の積石塚研究にとって重要な資料を提示することになろう。これによって本県の積石塚研究がさらに進展することを期待するものである。

(宮澤公雄)

〔付記〕ここに記載した内容と同じ趣旨のものは次の文献に掲載予定である。
 宮澤公雄「横根・桜井積石塚古墳群の検討 一分布調査の成果を中心としてー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第4集（近刊）

ただし、論旨に変更はないが分布調査の成果については脱稿後の修正も数多くあり、本報告書を原典として参照されたい。

註

- (1) 山本寿々雄「山梨県における積石塚」『甲斐考古』7-1 1965 p.6-7
- (2) 註(1)文献に同じ
- (3) 山梨県教育会西山梨郡支会編「第13編 史蹟・名勝誌」『西山梨郡志』 1926 p.1332-1333
- (4) 飯島進ほか「第6章 山頂単独積石塚の調査」『甲斐の古墳I 甲府北東部に於ける積石塚・横穴式古墳の調査』甲斐古墳調査会 1974 p.59-62
- (5) 山中共古『甲斐の落葉』 1975年復刻
- (6) 註(1)文献に同じ
- (7) 田代孝ほか「考古学から見た山梨と石和 4 古墳時代」『石和町誌』第1巻 石和町 1987 p.338-354
- (8) 田代孝ほか『大藏經寺山第15号墳-積石塚古墳の発掘調査報告書』山梨学院大学・石和町教育委員会 1984
- (9) 坂本美夫「大藏經寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集I』山梨県考古学協会 1986 p.263-285
- (10) 註(7)文献に同じ
- (11) 野沢昌康・坂本美夫『笛原塚3号墳-積石塚の調査ー』春白居町教育委員会 1979
- (12) 小林広和『甲斐国積石塚群の諸問題』『甲斐の古墳I』甲斐古墳調査会 1974 p.92-101
- (13) 坂本美夫「山梨県の積石塚と笛原塚3号墳の位置」『笛原塚3号墳-積石塚の調査ー』春日居町教育委員会 1979 p.18-29
- (14) 註(9)文献に同じ
- (15) 橋本博文『甲府市史通史編第1巻 原始・古代・中世』 甲府市役所 1991 p.120-121
- (16) 飯島進ほか「横根積石塚群の調査」『甲斐の古墳I』甲斐古墳調査会 1974 p.63-85
- (17) 坂本美夫「山梨県における古墳(首長権)の展開」『シンポジウム古代甲斐国を考える』(基調報告要旨)山梨県考古学協会 1982 p.2-4
- (18) 橋本博文「甲府盆地の古墳時代における政治過程」 地方史研究協議会『甲府盆地-その歴史と地域性』雄山閣 1984 p.77-111
- (19) 小林三郎「古墳時代初期仿製鏡の一侧面 一重圓文鏡と珠文鏡ー」『駿台史学』46 1979 p.78-96
- (20) 坂本和俊「方形周溝墓群出土遺物の意義 珠文鏡」『前組羽根倉遺跡発掘調査報告書』前組遺跡発掘調査団 1986 p.101-103
 今井亮「中・四国地方出土素文鏡・重圓文・珠文鏡 一小形倭鏡の再検討Iー」『古代吉備』13 1991 p.1-26
- (21) これまでの報告例や筆者も珠文鏡の保管者から1号墳出土とのご教示を得たため、別稿のなかにおいて1号墳出土遺物として考察を考えたが(宮澤公雄「横根・桜井積石塚古墳群の検討 一分布調査の成果を中心としてー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第4集 近刊)、1号墳

- 出土ではない可能性が高いためここで訂正させていただく。
- (22) 桜井内山9号墳は等高線に並行する横穴式石室墳であるが、堅穴系の石室であり、ここでいう横穴式石室とは同様なものとしては扱えない。
- (23) 註(1)文献では蝙蝠塚古墳を?つきはあるが、積石塚古墳として扱っている。しかし、墳丘には小砾が散見される程度であり、小稿では盛土墳として扱うこととした。ちなみに註(9)文献では盛土墳として扱っている。
- (24) 註(10)文献と同じ
- (25) 註(7)文献と同じ
- (26) 田代孝・萩原三男「甲府市域の古墳分布と二、三の課題」『甲府市史研究』創刊号 甲府市役所 1984 p.44-61
- (27) 栗巻英治「人化前後の信濃と高句麗遺跡」『信濃』I 7-5・6 1938
- (28) 斎藤忠「屋根形天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』34-3 1944 p.1-8
- (29) 大場善雄「信濃國坂井村の積石塚に就いて」『信濃』II 56 1947 p.1-17
一志茂樹「信濃と越とを結ぶ古代の幹路」『信濃』III 15-10 1963 p.27-55
大塚初重「長野県大室古墳群」『考古学集刊』4-3 1969 p.73-106
桐原 健「諏訪盆地古墳群にみられる一樣相」『信濃』III 16-10 1964 p.49-59
等の論考によって積石塚被葬者渡来人説が検証されている。
- (30) 斎藤忠「積石塚考」『信濃』III 16-5 1964 p.17-25
- (31) 杉山晋作「積石塚研究史」『考古学ジャーナル』180 1980 p.8-13
- (32) 註(18)文献と同じ
- (33) 坂本美夫「先史時代・古墳時代」『春日居町誌』 1987 p.189-265
- (34) 十菱駿武「横根積石塚古墳群東支群第九号墳」『甲府市史史料編第1巻 原始・古代・中世』 甲府市役所 1989 p.122-126
- (35) 宮澤公雄「後期古墳より観た甲府盆地の様相」『山梨考古学論集II』山梨県考古学協会 1989 p.285-315
- (36) 原正人「巨麻郡と渡来人」『山梨郷上史研究入門』山梨郷土研究会（近刊）p.32-33に巨麻郡と渡来人に関して簡潔に解説している。
- (37) 「シンボジウム・甲斐の古代文化」『日本の中の朝鮮文化』48 1980 p.24-40
- (38) 甲斐の御牧については秋山敬「町の歴史 第2章古代」『白州町誌』 1987 p.233-247に詳しい。
- (39) 末木健「山梨県生産遺跡分布調査報告書」山梨県教育委員会 山梨県埋蔵文化財センター調査報告51 1990
- (40) 甲府市史編さん委員会『甲府市史史料編第1巻 原始・古代・中世』 甲府市役所 1989 p.143-156
- (41) 古墳の数については各市町村誌および遺跡分布調査報告書により、約800基程度と推定された。
- (42) 広瀬和雄「群集墳論考説」『古代研究』15 1978 p.1-42
- (43) 大塚初重「積石塚の再検討」『日本歴史』510 1990 p.66-67
- (44) 桐原健「積石塚と渡来人」UP考古学選書10 東京大学出版会 1989
- (45) 後藤守一『瀬戸岡古墳群』東京都埋蔵文化財調査報告3 1956
- (46) 大塚初重・小林三郎・下平秀大「信濃長原古墳群」長野県考古学会研究報告書5 1968
- (47) 近年人規模に調査された例として、21基が調査された一宮町四ツ塚古墳群（小林広和・里村晃）

『四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会・日本道路公団 山梨県埋蔵文化財センター調査報告11 1985) や御坂町長田古墳群(御坂町金川工業団地内遺跡調査会によって1989年より調査が進められており、35基の古墳が調査されている)では古墳群中2基ほどが平次葬の形態をとるだけである。

(48) 辰巳和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100 1983 p.10-18

第2節 山梨県積石塚古墳関係文献一覧

- 山梨県教育会西山梨郡支会編『西山梨郡志』 1926年
 松平定能撰『甲斐国志』 1814年
 山中共古『甲斐の落葉』 1926年
 仁科義男「甲斐国の先史並原始時代の調査」『甲斐史料集成』 1935年
 大場善雄「原始神社の考古学一考察」『歴史公論』6-1 1937年
 三枝善衛「甲府の古代遺跡」『郷土研究』第9号 山梨郷土研究会 1949年
 萩野秀男ほか「積石塚について」『郷土社会の研究 中学校編』山梨県教職員組合・山梨県連合教育会 1956年
 山本寿々雄「破壊され潰滅する甲府盆地の古代遺跡」『富士国立公園博物館研究報告』第14号 富士国立公園博物館 1965年
 長野県考古学会「特集・積石塚をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』第6号 1969年
 山本寿々雄「山梨県における積石塚」『甲斐考古』7の1 山梨県考古学会 1970年
 山梨県教育委員会『山梨県遺跡地名表』 1979年
 飯島 進ほか「甲斐の古墳 I 甲府北東部に於ける積石塚、横穴式古墳の調査」甲斐古墳調査会 1974年
 小林広和・里村晃一「甲府盆地北縁部における後期古墳の様相 I」『史陵』5 山梨史学研究会 1976年
 野沢昌康・坂本美夫『笛原塚3号墳 一積石塚の調査』春日居町教育委員会 1979年
 桐原 健「積石塚の地域相 一中部山岳地方」『考古学ジャーナル』180号 ニュー・サイエンス社 1980年
 飯島 進ほか「シンポジウム—甲斐の古代文化」『日本のなかの朝鮮文化』第48号 朝鮮文化社 1980年
 横根・桜井古墳群分布調査班「横根・桜井古墳群分布調査概要」『山梨考古』第9号 山梨県考古学協会 1983年
 田代 孝・萩原三男「甲府市域の古墳分布と二、三の課題」『甲府市史研究』創刊号 甲府市役所 1984年
 清水 博「横根・桜井古墳群について—分布調査の成果を中心に—」『山梨考古』第14号 山梨県考古学協会 1984年
 田代 孝ほか「大藏院寺山第15号墳 一積石塚古墳の発掘調査報告書」石和町教育委員会・山梨学院大学考古学研究会 1984年
 橋本博文「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性』地方史研究協議会 1984年
 山梨郷土研究会「座談会 山梨県考古学研究の現状と課題」『甲斐路—考古特集号—』第52号 1984年
 山梨県考古学協会ほか「甲府盆地の積石塚古墳研究集会(資料)」 1985年
 信藤祐仁「横根・桜井積石塚古墳群における一考察」『歴史手帳』13巻1号 名著出版 1985年

- 坂本美夫「大藏經寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会 1986年
- 坂本美夫「先史時代・古墳時代」『春日居町誌』春日居町 1987年
- 田代 孝ほか「考古学からみた山梨と石和」『石和町誌』第1巻 石和町 1987年
- 宮澤公雄「後期古墳から観た甲府盆地の様相」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会 1989年
- 桐原 錠『積石塚と渡来人』UP考古学選書 第10巻 東京大学出版会 1989年
- 甲府市史編さん委員会『甲府市史史料編第1巻』 甲府市役所 1989年
- 矢島宏雄「中部高地」『古墳時代の研究』第11巻 地域の古墳II東日本 雄山閣 1990年
- 橋本博文「後期古墳と積石塚」『甲府市史通史編第1巻』 甲府市役所 1991年
- 宮澤公雄「横根・桜井積石塚古墳群の再検討 一分布調査の成果の検討からー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第4集 帝京大学山梨文化財研究所 (近刊)



横根・桜井積石塚古墳群遠景



横根・桜井積石塚古墳群案内板全景



横根・桜井積石塚古墳群案内板近景



分布調査清掃風景



分布調査計測風景



プレート設置状況



プレート設置状況



プレート設置状況



プレート設置状況



横根支群 1 号墳



横根支群 1 号墳石室



横根支群 5 号墳石室



横根支群 6 号墳石室

図版 4



横根支群 7号墳石室



横根支群 7号墳



横根支群 9号墳



横根支群 10号墳



横根支群 11号墳



横根支群14号墳



横根支群14号墳石室



横根支群14号墳石室北側壁



横根支群14号墳石室奥壁



横根支群14号墳石室閉塞石



横根支群15号墳



横根支群16号墳



横根支群16号墳石室奥壁



橫根支群19号墳



橫根支群20号墳石室



橫根支群20号墳



橫根支群21号墳石室



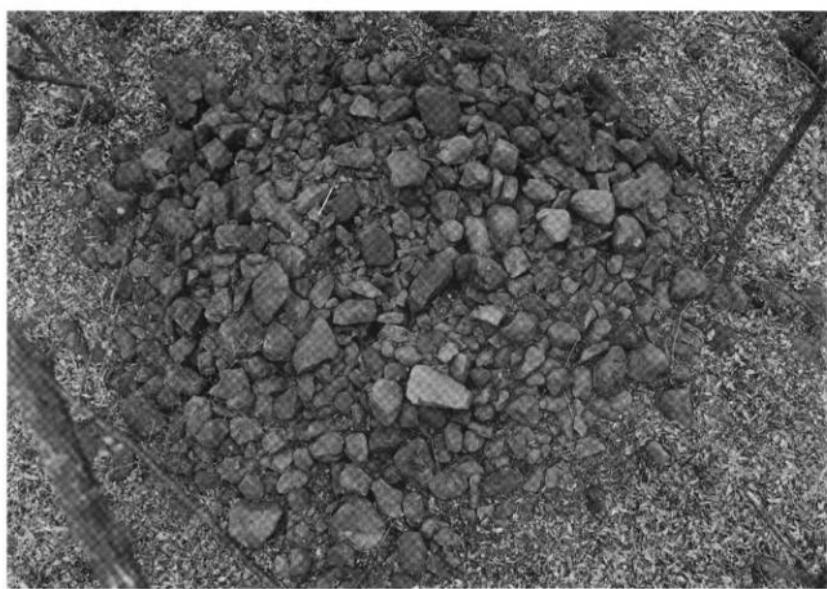
橫根支群22号墳石室



横根支群23号墳



横根支群24号墳



横根支群25号墳



橫根支群29号墳



橫根支群29号墳



橫根支群29号墳石室奥壁



橫根支群29号墳石室



横根支群31号填石室



横根支群30号填



横根支群31号填



横根支群33号填



横根支群34号墳



横根支群35号墳



横根支群36号墳



横根支群38号墳



横根支群41号墳



横根支群43号墳石室



横根支群44号墳石室



横根支群47号墳



横根支群48号墳



横根支群51号墳



横根支群55号墳



横根支群56号墳



横根支群62号墳



横根支群62号墳石室



橫根支群65号墳



橫根支群69号墳



橫根支群70号墳



橫根支群75号墳



横根支群77号墳



横根支群81号墳



横根支群82号墳



横根支群84号墳



横根支群89号墳



横根支群95号墳石室



横根支群95号墳



横根支群94号墳



横根支群98号墳



横根支群98号墳石室



横根支群99号墳



横根支群105号墳



桜井内山支群 1号墳石室



桜井内山支群 3号墳



桜井内山支群 5号墳



桜井内山支群 6号墳



桜井内山支群 6号墳



桜井内山支群 11号墳



桜井支群 1号墳



桜井支群 1号墳石室



桜井支群 2号墳



桜井支群 8号墳



桜井支群 8号墳



桜井支群 9号墳



桜井支群 9号墳清掃風景



桜井支群10号墳



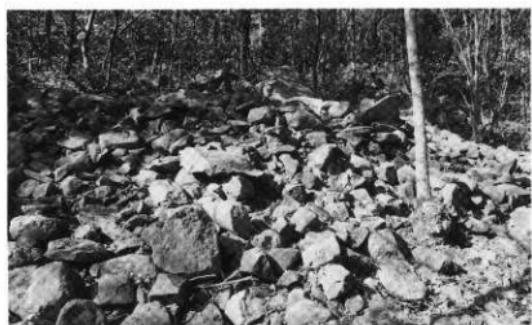
桜井支群10号墳石室奥壁



桜井支群10号墳石室側壁



桜井支群11号墳



桜井支群14号墳



桜井支群14号墳石室



桜井支群14号墳石室



桜井支群15号墳



桜井支群16号墳



桜井支群17号墳



桜井支群21号墳



桜井支群22号墳



桜井支群・桜井東支群の立地する大歳経寺山



桜井支群24号墳（天王社古墳）



桜井支群24号墳上の石祠



桜井東支群 1号墳



桜井東支群 1号墳石室



桜井東支群 2号墳



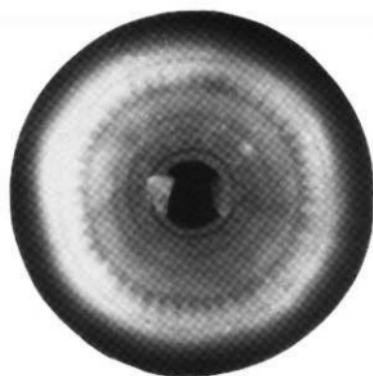
桜井東支群 2号墳石室



桜井東支群 3号墳



桜井B号墳 珠文鏡



珠文鏡X線写真



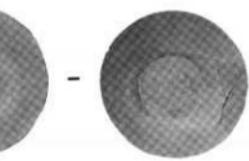
桜井B号墳 勾玉



横根31号墳



横根74号墳



横根74号墳

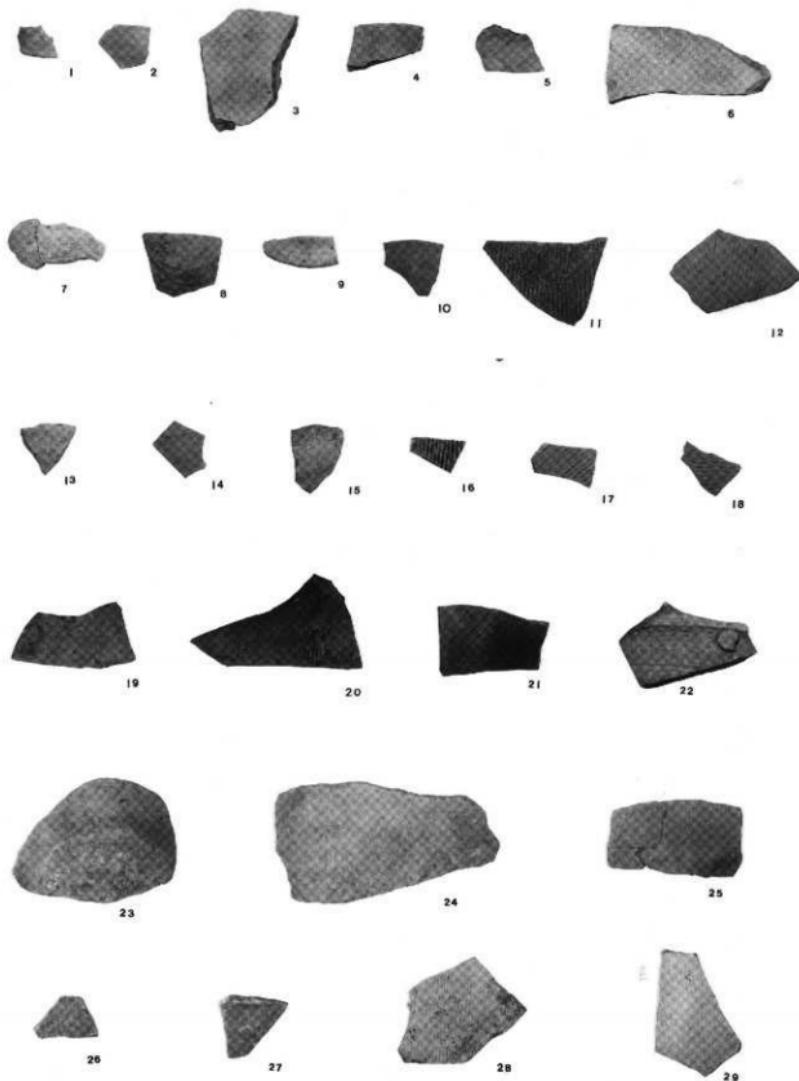


横根74号墳



横根74号墳

横根・桜井積石塚古墳群群表採遺物



1・2横根24号墳 3～6横根42号墳 7横根47号墳 8～18横根73号墳 19～21横根84号墳
22横根58号墳 23～25桜井24号墳 26・27桜井東1号墳 28・29桜井東3号墳

分布調査表採遺物



横根支群39号墳の立地する八人山東斜面



東上方より



石室付近



西方より



東方より

横根支群39号墳発掘調査前の状況



石室全体



奥壁



横根支群39号填石室



横根支群39号墳南側



横根支群39号墳北側の壇列石



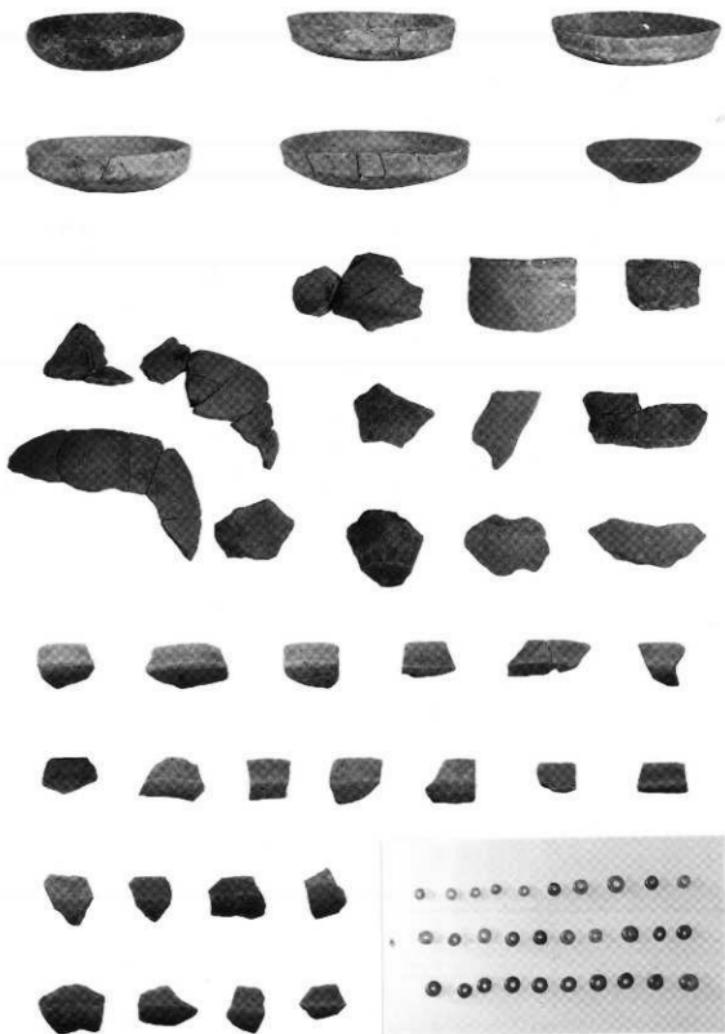
実測風景



発掘調査風景



横根支群39号墳現地説明会



横根支群39号墳出土遺物(1)（土器・ガラス小玉）



橫根支群39号填出土遺物(2) (鐵針・刀子・馬齒)



桜井内山支群 9号墳遠景（中央の森）



桜井内山支群 9号墳のある森（近景）



桜井内山支群 9号墳（発掘調査前）全景



桜井内山支群9号墳（東北より）



桜井内山支群9号墳（北より）



桜井内山支群9号墳石室



桜井内山支群9号墳写真測量風景



桜井内山支群9号墳測量風景



桜井内山支群9号墳（墳丘断ち割り状況）



桜井内山支群9号墳出土遺物（左上と右・土器類、中央・金環、左下・骨片）



発掘調査開始式



現地説明会



調査風景



調査風景

甲府市文化財調査報告6

横根・桜井積石塚古墳群調査報告書

—分布調査報告、横根支群39号墳・桜井内山支群9号墳免掘調査報告—

平成3年3月30日

編 集 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会

発 行 甲府市教育委員会

〒400 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

印 刷 エンドレス

〒405 山梨県山梨市上石森123

